
COBALT-SERIES
前田珠子
聖石の使徒
其は天秤をかざす者
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は天秤(てんびん)をかざす者

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

其は天秤をかざす者

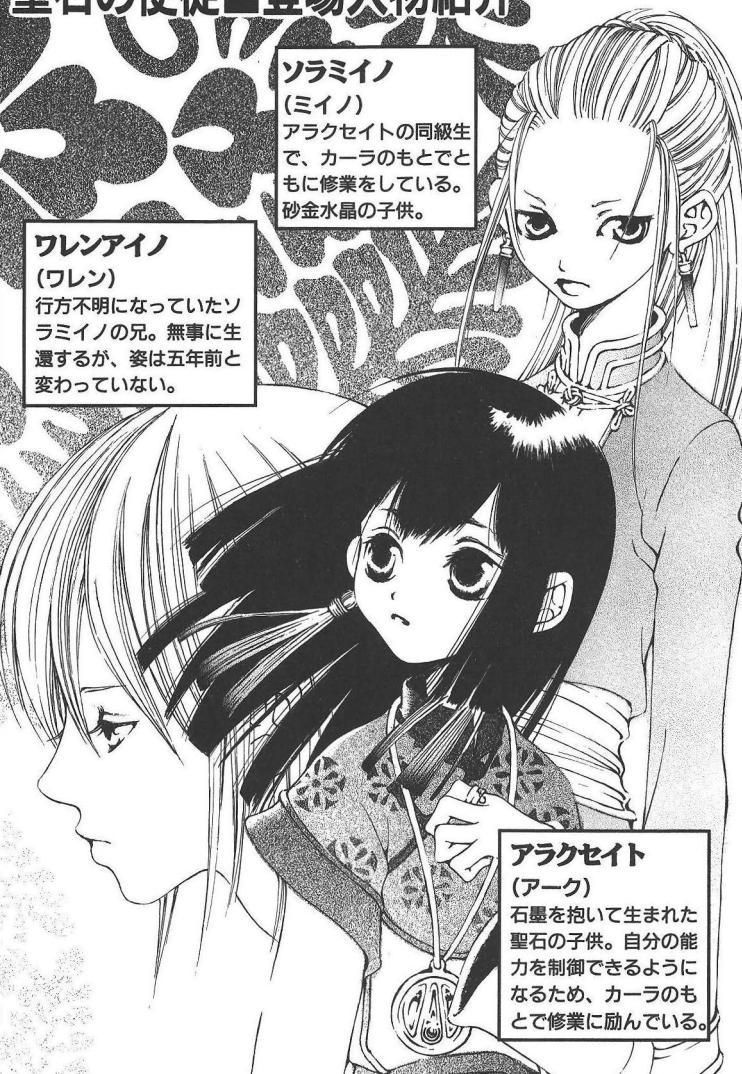
前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
其は天秤をかざす者
バルヴァローズ創世神話……7
其は天秤をかざす者……17
海と月の宝石……169
あとがき……200

聖石の使徒■登場人物紹介



ソラミイノ
（ミイノ）
アラクセイトの同級生で、カーラのもとでともに修業をしている。砂金水晶の子供。

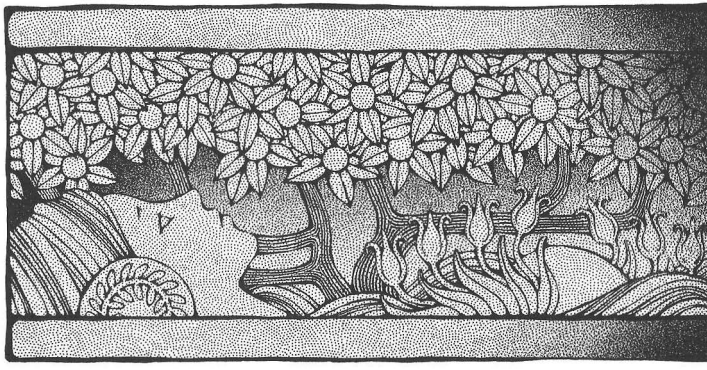
ワレンアイノ
（ワレン）
行方不明になっていたソラミイノの兄。無事に生還するが、姿は五年前と変わっていない。

アラクセイト
（アーク）
石墨を抱いて生まれた聖石の子供。自分の能力を制御できるようになるため、カーラのもとで修業に励んでいる。


セイタマール
（セイ）
血赤珊瑚の使徒。朱色の髪と褐色の肌を持つたくましい青年。
カーラトーニ
（カーラ）
黒珊瑚の使徒。黒髪と漆黒の瞳を持つ美女。殊玉の神殿に籍を置いている。
ガネルオージュ
（ガネル）
稀有な存在である金剛石の子供。師匠である青玉の使徒に絶対的な信頼を寄せていたのだが、ある事件をきっかけに破門を言い渡されている。

イラスト／山本鳥尾

バルヴァローズ創世神話



麗しき、万能の至高神セイトーリ――。
恵み豊かにして美しいこの世界――バルヴァローズはかの女神の手により生まれた。
女神はまた、この世界のために、多くの神々を産み落とした。
最初に生まれたのは太陽女神ライアトーリ。
セイトーリの両手の間に太陽が生じた瞬間、彼女は生まれた。
次いで生まれたのは三つの月を司る、三つ子の月神――シイムタール、サイサロール、サラムトーリたちだった。
女神の左の瞳から、不意に三粒の涙がこぼれ、月となると同時に三人は誕生したのだ。シイムタールとサイサロールは、バルヴァローズのために生まれた、初めての男神だった。
女神の右の瞳からこぼれた涙は海となり、その吐息は風となり、ひと雫の血は大地となった。
それと同時に海神アイルトーリと空神パルムローリ、地神アスカニーリが生まれいでた。
セイトーリはバルヴァローズに生きるであろう者たちのために、やさしい静寂と暗闇を与えてやりたいと願い、歌を歌った――その歌声は女神の願いそのものの姿となり、世界に夜が生

まれ、夜神タイナトーリも誕生した。

女神はバルヴァローズをとても愛していたから、考えられ得るすべての豊かさと美しさと愛情をこの世界に贈りたいと思い、同時に子供たちにもこの世界を愛してほしいと願った。

だから、この世界を作る手伝いをしてくれぬものかと問い、祝福を与えてほしいと子供たちに告げたのだ。

子供たちである神々は、もちろん母神であるセイトーリに言われるまでもなく、バルヴァローズを愛していたものだから、喜んでこの世界を共に作る手伝いに応じた。

海神アイルトーリは真水の神カンラタールを生み、カンラタールも多くの子供たちを誕生させた。かくして水は海以外にも居場所を得たのである。

空神パルムローリは空を吹き渡る風の神イーオダールを生み、イーオダールも多くの子供たちを作った。

彼らの誕生により、空間はさまざまな表情を持つこととなり、気象や天候が生じた。

太陽神ライアトーリは、自らの光と温もりを伝える者として、火神イイタールを生み出し、イイタールもまた多くの子供を持ったが、彼らはしばしば大きすぎる傷をバルヴァローズにもたらしたため、しばらくのあいだライアトーリの監督下に置かれた。いささか気性が激しい神々揃いだったのかもしれない。

さて、月神のひとりであるサイサロールは、天空の神ながら、大変に大地に対して興味を抱

いていた。

彼は、興味の赴くままに地上に降り立ち、妹神であるアスカニーリの渋面をものともせずに大地の気配を満喫した。

天空に属する存在でありながら、彼は『空』を隔てたバルヴァローズの地に、興味を覚え、そこに好意さえ抱いたのだ。

『許しておくれ』

と、彼は妹神に謝った。

『けれど、天空ではない、大地という場所が、これほどに楽に呼吸できるものだとは思いもしなかったのだよ。理を乱すほどに頻繁に訪れるつもりはない……ただ、それに触れない程度のわたしの訪いを、どうか許してはくれないかい？』

懇願されて、さすがのアスカニーリも心動かされた。

ただ、大地のあちこちに、月神の気配を残されるのはアスカニーリとしても歓迎できないことだった。

バルヴァローズはまだまだ不安定な世界だったのだ。

そのため彼女は、注文をつけることにした。

自らが支配する大地のなかで、最も安定し、他神の影響を受けにくい場所――バルヴァローズ中で九つある場所に関してのみ、兄である月神の『羽休め』の場所として……本当に仕方な

くとは言え……認めたというわけである。
そんな配慮で疲れたというわけでもあるまいが、地神であるアスカニーリは、子供神を生まなかった。
甥である水神カンラタールと協調することで、やがて生まれてくるであろうバルヴァローズの住人たちをやさしく包みこむ環境を作ろうと思ったのかもしれない。
セイトーリの産み落とした子供神は、ほかに四神……三つ子の月神と夜神との間で、小さないさかいが起こったのはこのころだった。
三つ子の月神たちはみな、自分と夜神が組むことで、星神を生み出したいと思ったのだ。三人の神から同時に同じことを申しこまれ、夜神はたいそう困ってしまった。
結局、夜神が申し出を受けたのは、三つ子の末っ子であるサラムトーリに対してだった。ほかのふたり――シイムタールとサイサロール――が我こそと強く主張したのに対して、サラムトーリだけが夜の空を飾る星々の数や光量、闇との均衡に心砕く気遣いをみせたからだった。
こうして雲のない夜空には、小さな星のきらめきが生まれることとなった。
だが、一層美しくなったバルヴァローズに、穏やかならぬものが生じはじめたのもこのころのことだった。
タイナトーリに選ばれなかったふたりの月神の不満や憤りが、澱のごとく世界に溜まり始めたのだ。

ふたりの月神たちは、自分たちが選ばれなかったことにのみ心捕らわれ、やがてほかにできるであろうなにかを見つけ、行使する道ではなく、どこまでも原因を掘り下げ、その原因となった存在を含むすべてに対して不満を発散する道を選んでしまったのである。

ほかに自分にできることはないのかと、考えるより先に、拒まれたと思いこみ――。

なぜ他者が選ばれたのかと内省するより先に、相手への不満を溜めこみ――。

いつしかふたりの月神は、バルヴァローズを蝕む毒気のみを発するようになってしまった。

瘴気と呼ばれるものは、このふたりによって初めてこの世界に生じたものだった。

セイトーリや姉妹神たちの再三の説得にも耳を傾けぬまま、月神ふたりは瘴気をバルヴァローズに溜めこんでいく。そればかりではない。ふたりの月神は、互いへの敵愾心を抱えたまま、ついにはバルヴァローズそのものへの憎悪まで育て始めてしまったのだ。

セイトーリはふたりの子供神に訴えかけた――それこそ、何度も。

だが、ふたりの行為は改まらなかった。バルヴァローズに集う瘴気は増えていく一方だった。

このままではバルヴァローズ諸共、自らを除くすべての子供神、孫神すべてが滅んでしまう……月神たちの生み出した瘴気によって！

そうと悟ったとき、至高神セイトーリはひとつの決断を下した。

「なんと悲しく情けなく……」

呻きながら、至高の女神は自らの左の瞳から零れた二粒の涙を……その姿を変えたものを消滅させ、嘆きに涙した。

至高の女神の流す涙には万能の力がある。

けれど、それですら浄化できぬほどの瘴気がすでにバルヴァローズには根づいてしまっていたのだ。

残る手段はただひとつ――至高の女神は、ふたりの子供神の生み出した瘴気を抱いて眠りにつくことを決意した。

眠りのなかで、女神は子供神ふたりの生じさせた瘴気のすべてを浄化する。

浄化しきるその時まで、かの至高の女神は眠りつづける。

それは約束されたこと――。

かの女神が瘴気を胸に、大地の奥底に眠りについたそのときに。

その寸前に生み出された誕生の女神と死滅の男神の存在そのものに刻印された、それは絶対の約束だった。

だから、至高の女神であるセイトーリの最後の娘である誕生神カリカトーリと最後の息子である死神ナムラタールは、バルヴァローズに生まれ、いずれは死に行くすべての存在にこう語りかけたのだ。

『瘴の女神の眠りを妨げてはならぬ――』

と――。

瘴の女神とは、瘴気を封印して眠り続ける至高の女神――。
彼女の眠りを妨げてはならないと。
妨げたとき、訪れるものはひとつきりだと。
つまりは破滅のみなのだと、はっきりとしっかりと、神代の約束には記されている……。

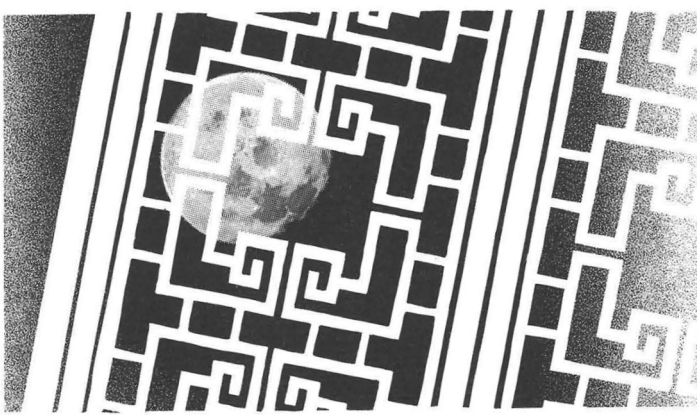
瘴の女神の眠りを妨げてはならない。
瘴の女神を目覚めさせてはならない。
その眠りを守るため……聖石の使徒は生まれたのだ……。

大地の女神は、今も考える。
あるいはあの時、自分がもっと有効な手だてを口にしていれば、世界そのものの行く末は、もしかしたら変わっていたのではないのか、と。

考えても、仕方のないこと。
そうと割り切っても、完全には割り切れない。
もしも、兄たちが母神に背こうとしていたその時、もっと早くに気づいていれば……そしてもし、説得する余地が残されていたとしたならば――。
誰ひとり、欠けることなく、この世界は成立していたのだろうか、と……。

それは、夢。
夢に過ぎない。
けれど、かなわなかった夢だからこそ、地神は夢を馳せずにはいられないのだ。
そんな女神の抱えた後ろめたさゆえの空洞が、世界中には九つ存在する。
九つの死点が、バルヴァローズには存在するのだ……。

其(そ)は天秤(てんびん)をかざす者



プロローグ

長く静かな眠りのなかに、聞こえてくるのはただひとりの声だけだった。
信じない……信じられるはずがない……。
乙女の声は歌のように、やさしく心に響きわたる。
信じられない……信じない。あなたがわたくしを置いていくはずがない……。
耳に……否、心に快い響き——声音。
声そのものではないというのに、すぐにも心はそれを思い出す。
なぜなら、すでにその声は、彼の心に刻みこまれていたものだから。
(信じませんわ、……さま。貴方がわたくしとの約束を破っておしまいになるはずがないのですもの……!)
約束。
そうだ、と彼は思い出す。
そう、自分はこの可憐な声の乙女と約束したのだ。

必ず戻る、と。
それは、いつのことだったか……。
（そうだ……あれは、旅立ちの朝……）
薄紅色のバラを思わせる、金の髪の乙女に、自分は何度も約束したのだ。
『大丈夫だよ、すぐに戻る……どうしてきみは、こんなにも心配性なのだろうね？』
決して危険な旅ではないのだから――と、繰り返す自分に、彼女は口を尖らせ、やはり同じ答えを重ねたものだ。
『危険でない旅などございませんわ』
確かにそれはその通りだったのだが、そこで『そうだね』などと答えようものなら、彼女がどれほどに心乱されるか想像できたものだから、自分は相手の不安を杞憂だと笑い飛ばしたのだ。
『けれど、充分な用心と準備をすることで、限りなく安全な旅にすることはできるものだよ。それに、わたしには力強いお守りがある』
十粒を越える、聖石の子供石――すべての属性を網羅するそれらがある限り、まず旅の無事は保証されたも同然だった。
なにしろ、それは旅とはいえ、片道十日ほどのもののよく見知った道程だったのだし、しかも季節は夏にさしかかっていたのだから。

『大丈夫だよ、きっと。もちろん油断などはしないけれどね』

心配そうに見上げてくる乙女――許嫁の頬に唇で触れ、笑いながら自分は告げた。

そう……油断などしなかった。

けれど、運命は時として、思いもかけぬ道を人間に示すものなのだ。

詳しいことはよく思い出せない。

ただ、自分がとても冷たいなにかに抱かれ、眠りについたことだけは覚えている。

死――ではない。

けれど、限りなくそれに近いものだったかもしれないとは思う。

よくはわからない。

けれど、乙女の声は常に心に届いていた。

(貴方が亡くなるはずがない……)

ああ、そうだと思ったのは、いつのことだったか……。

(貴方はお戻りになると約束してくださった……)

そう、約束したのだ……だから、自分はそれを果たさなければならない。

(貴方は……)

ああ、そうだ……。

(いくつもの約束を、きみと交わした……わたしはその約束を果たすためにも、目覚めて……

戻らなくてはならない……）

今一度、かの乙女に会うために――。

「それこそが、約束というもの……」

思いは意外にもすんなりと、喉から声として紡がれた。

その自らの声を、自らの耳が認識したその瞬間、彼の意識は覚醒し、同時に瞼が難なく開いた。

「そうだ、わたしは……帰らなくては……」

覚醒した少年は、はっきりと口にした。

自身が騒ぎの中心となる存在に変化したことも知らず、彼はこの後家路をたどった。

世界が一変していることも、そのときは知らずに――。

1

「ええっと、えっと、ええーっと……ええいっ！」

気合いに気合いを重ねた、少女の声が豊珠の空に響きわたる。

声をあげたのは、紫紺の髪に黄橙色の瞳を持つ少女――十五ほどの、まだ幼さの残る顔は真剣そのものだった。

「点いて、お願いっっ！」

少女が、一心に目を向けているのは枯れ枝の束――そう、少女……アラクセイトはなんとかこの枯れ枝に火を起こそうと頑張っていたのだ。

両手を胸の前で組んだ少女の願いが天に届いたのか……彼女のほか、赤い髪の青年、黒髪の美女、白金の髪の少女の見守るなか、それは起こった。

ぽっ、と枯れ枝に光が宿った。

オレンジ色の炎が、ちろりと姿を現したのだ。

「や、や、や……っ」

黄橙色の双眸を潤ませながら、「やった！」と歓喜の声をあげかけたアラクセイト――なにしろ、これまで出来た試しがなかったのだ――は、しかしすぐに不穏な兆しに気がついた。

彼女が気づいたのだから、彼女よりは経験豊富な他の面々が気づかないはずがない。

「伏せて！」

黒髪の美女が鋭く叫ぶと同時に、赤い髪の青年が、懐から漆黒と青の石を取り出し、放り投げた――すさまじい光が、その場を圧倒したのは次の瞬間だった。

可愛らしいオレンジ色の、指先ほどの大きさしかなかったはずの炎が、青白い色彩へと変化したのだ！

骨すら焼き尽くしかねないまでの高温の炎――そんなものにさらされて、無事でいられるはずがない……わけなのだが、一瞬の後、四人はごうごうとたちこめる熱蒸気を前に、風そのものに保護された形で、灰すら残らなかった薪の束のあった部分を凝視していた。

尋常ならざる事態であった。

少なくとも、一般常識に照らしあわせた場合、このようなことはまず絶対起こらないはずのことだった。

だが、しかし。

幸か不幸か、この四人、この手の奇跡――あるいは災難――には、すでに慣れっこになっている。

成人組ふたりの男女は、そっと――元凶であるアラクセイトに気づかれないように小さく息をつき、もうひとりの少女、ソラミイノは「あーあ」とでも言わんばかりの顔で目を閉じ……そして、騒ぎの原因そのものは、ぶわっと両目に涙をたたえた。

「なんで……!? どうしてっ!? 姿だけじゃなくて、炎霊たちの声も聞こえるようになって、意思の疎通できるようになったから、もう、もう二度と暴走したりしないって思ってたのに……どうしてっ!?」

ぼろぼろ、ぼろぼろと泣く少女のそばには、なんとも不思議なモノが落ちている。

一部だけが透明に変化した――正確に言えば、淡紅色なのだが――漆黒の柔らかそうな石だった。

その正体がなんであるのかも……この四人は知っていた。

黒い部分は石墨――アラクセイトが生まれてきたときに抱いてきた石だ。

この世界には、石を抱いて――正確には肉体に宿した形で――生まれてくる子供が存在する。その子供たちは『聖石の子供』と呼ばれ、不思議な力を宿している。

だからこそ、そのような子供はまず例外なく神殿に預けられ、自らの力を制御するための知識と技術を学ぶのだ。

そうして、力の制御を体得し、また自らが生み出す『聖石の子供石』――それは、その人間が生まれてきたときに抱いていた石と同種のもの、というのが常識なのだが――を十全に活用

できるだけの経験を積んだ者のなかから、神々は特別な資質を持つ者を選ぶと言われる。
バルヴァローズの神々に選ばれた『聖石の子供』――それこそが、聖石の使徒と呼ばれる存在だ。
いかなる選別によって、使徒とそうではない者が決まるのかはわかっていない。
あくまで、それは神々によるものなのだ。
だが、使徒に選ばれやすい『聖石の子供』たちがいるというのも事実だった。
そう、稀少な石を抱いて生まれてきた子供たちは――無論、自らの能力を制御できてこその話だが――使徒に選ばれる確率が高いと言われている。
たとえば……そう、宝石と呼ばれる石を抱いて生まれてきた子供など。
アラクセイトとソラミイノの保護者兼師匠と呼べる黒髪の美女と炎色の髪の青年もその一員だった。
黒髪黒瞳の美女の名はカーラ――カーラトーニ。
海の宝石と呼ばれる珊瑚のなかにあって、あまり知られていない――つまりは珍しいというわけだが――黒珊瑚を抱いて生まれてきた女性で、七つあるバルヴァローズの全大陸を自由に行き来する許しを地神神殿と海神神殿から授けられている使徒である。
その相棒である青年――炎色の髪と褐色の肌を持つセイタマールは、珊瑚のなかで最も稀少で最も価値が高いとされる血赤珊瑚の使徒だ。

他にも、先日ひょんなことで知り合った——正確には、アラクセイトが巻きこまれた災難の原因とも呼べる相手なのだが——純白の髪と鳩の血色の瞳を持つ青年は、外見からは想像できなかったけれど、極上の青玉を抱いて生まれてきたという、青玉の使徒だったし、その相棒だという——こちらは、アラクセイトは実際に会ったことはなく、友人であるソラミイノから教えてもらったのだけれど——琥珀色の髪と矢車菊色の双眸の青年は、外見からは想像できないという点では似合いというか、やはり極上の紅玉の使徒だったりした。

ほかにも、真珠や緑柱石、黄玉や翡翠などなど、宝石を抱いて生まれてきた『聖石の子供』は、まずほとんど使徒に選ばれるのだという。

もちろん、貴石や半貴石を抱いて生まれてきた者のなかからも使徒は選ばれる。

各種水晶や瑪瑙の使徒は多い。

数から言えば、彼らが一番多いかもしれない。

だが、選ばれる確率を考えれば、決してそれは高くはない。

稀少な石を抱いて生まれてくる子供は稀であり、だからこそ、神々の目がそちらに向くのか……それとも、宝石と呼ばれるほどの石に宿る力を制御できる者こそが生前に選ばれ、生まれてくるからこそまず例外なく使徒に選ばれるのか……。

真実がどこにあるのか、人間の身では計り知れない。

ただ、この四人……いや、当事者であるアラクセイトを除くほかの三人にとって、神々の持

つ規格やらなんやらとは関係なく、いまのいま、盛大な失敗を披露してくれた少女には、なにがなんでも『使徒』と認められる程度――程度、である。輝かしい功績その他に対する期待など、ほとんど皆無といっていい――の、能力の制御を取得してもらわねば困るという想いがある。

なぜならば、だ。

少女――アラクセイトには、非常に厄介な事情があったからだ。

彼女が抱いて生まれてきたのは石墨だった。

純粋な炭素の構成物質で、その柔らかさから筆記用具の鉛筆の材料にされる、まず間違っても宝石とは呼べない……いや、半貴石ですらない石を抱いて生まれてきた子供なのだ、彼女は。

だが、聖石の子供であることに変わりはない。

神殿は、建前上、抱いて生まれてきた石に貴賤はないと説いている。それがいかなるクズ石であろうとも、石を抱いて生まれてきた以上、それはほかの大勢の『聖石の子供』と等しく扱い、教育をほどこすべきであると主張し、その態度を貫き通している。

だが、宝石を抱いて生まれてきた子供のまずほとんどが――恐らくその向学心の高さは、持って生まれた崇高な魂というよりも、制御できずに暴走した際に心に受けた痛みやら後悔ゆえなのだろうとは、ここ一年ほどの経験で、ソラミイノがたどり着いた推論だったりするわけだ

が――使徒に任じられ、周囲の期待通りの活躍を見せていることに比べ、貴石や半貴石を抱いて生まれてきた子供は、その能力や制御力にばらつきが見られる。

神々が選ぶのは、自らの力をきちんと行使できる者――に限られるのではないかと、ソラミイノあたりは思っている。

事実、たとえ力を完全に制御できずとも、周囲に甚大なる被害をもたらすほどの能力を持つ『聖石の子供』は滅多にいない。

半貴石の子供ですら、そうなのだ。

それにすら当てはまらないアラクセイトが、たとえ幼少時の――犯人が人外の……かつて神と呼ばれた存在の名残であったというあたり、確かに特異な例とは言えるが――誘拐事件が原因で、それまで見せていた見事な能力と制御ぶりを失い、おかげで以降落ちこぼれとしての人生を歩むことになり、結果的にそれが生涯つづくことになろうとも、本来であれば気にすることはなかった。

割り切った言い方をしてしまえば、最悪の場合のひとつとして、彼女が自らの能力を把握できぬまま暴走したとしても、たいした被害を周囲に及ぼす危険性がないからである。

ところが、例外中の例外であるこの少女には、非常に困った『おまけ』がついていた。

火神イイタールに愛され、その名を授けられ、同時にかの神の真名をも与えられた、いささか強大すぎる火神の加護――発火能力を与えられた身であるというのが、まずひとつ。

そして、もうひとつが……さらに厄介なことに、持って生まれた聖石は石墨という、やわらかく、また珍しくもない石であったにも拘わらず、彼女が危機に陥った場合、もしくは集中しすぎた場合――だろう、といまだにこれは推論にすぎないわけだが――彼女は、石墨ではなく、構成元素を同じくする、地上最高の宝石……金剛石を子供石として生み出し、それに宿る力を揮うということだ。

歴史上、聖石の子供は数えきれないほど生まれてきた。

聖石の使徒と選ばれた者もやはり、数えきれぬほどにいる。

だが、しかし。

金剛石を抱いて生まれてきた使徒など、歴史を繙いてもひとりとして見つからない。

いまだ使徒と認められていない存在がひとりいることを、彼らは知ってはいるものの……それでも、ほんのたったひとりだ。

アラクセイトのように、持って生まれた石とは違う、しかも状況にあわせて違う色彩の金剛石を生み出す能力者など、バルヴァローズの歴史上、ひとりとして存在しないのだ。

そんな存在であるアラクセイトが、能力を制御できない。

これは大問題だった。

あらゆる鉱物のなかで、最高の価値を持つ金剛石は、同時に最高の力を宿し、発揮する媒介となる。

そんな石を自由に生み出す者が、その力を制御できなければどうなるか――。

しかもアラクセイトは、イイタールの娘――火神の加護により、神であった者の残した瘴気すらも浄化できるほどの炎を駆使できる少女なのだ。

炎と金剛石――これほど力強い結びつきはない。

世界最高にして最硬の宝石は、数少ない『燃える』石のなかでも最高位にあたるもの。

火神の加護を受けた者――性別によって、それは『娘』であったり『息子』であったりするわけだが――が、石墨や黒玉、金剛石を媒介に炎を起こすとき、それはこの上ない浄化の炎を生み出すことになる。

素晴らしい才能であり能力だと呼べるかもしれない――ただし、その力を彼女が完全に制御できていれば、の話だ。

そう、アラクセイトは幼少時の誘拐騒ぎのせいで、恐怖のあまり、その期間の記憶と同時に力を制御するやり方さえも封じこめてしまった。

ところが、能力のほうはそのままだったのだ。

いっそ、両方とも封じられたのであれば、さほどの危険はなかったかもしれないが……一度拓かれてしまった力は眠りには就かず、しかし制御の方法が失われてしまったために暴走することとなった。

さらには、火事場の馬鹿力よろしく、再び危機に瀕した際、更なる力を発揮してしまったも

のだから、事態は深刻さを増した。
つまるところ、現在のアラクセイトは、尋常ならざる力を持ちながら、その制御においては甚だ頼り無いという、『歩く爆弾』と呼んで差し支えない存在なのだ。
多少の制御はきくようになったとはいえ、いまだ完全とは呼べない状況に、同行者三名が切なる祈りを抱いてしまうのは当然というものだった。
「アーク……あなたね……」
ぷちぷちっと、眉間やら額やらに二三の青筋を立てながら、つぶやくソラミイノを前に、不穏なものを感じたらしいアラクセイトが即座に反応する。
「ご、ご、ご……御免なさい……っ！　でも、でもっ！　昔と同じやり方、やってるのよっ!?　昔はこれでちゃんと制御できたのよっ!?　どうしてこんなことになっちゃうのか、わたしにもわからないっていうか……その……!?」
必死に言い訳を並べる少女に対して、同情のかけらもなく、ソラミイノは怒鳴りつけた。
「そんなのっ！　昔っより、あなたの力が大きくなってるからに決まってるじゃないのよぉぉおっ！　いい加減、それぐらいのこと、自分でさっさと悟りなさいっていうのっ！」
まさに雷だった。
アラクセイトはひっ、と首をすくめ、だが言い訳がましく言葉を紡いだ。
「でっ……でもっ！　金剛石だなんて、力が大きすぎるんだもの……ほんのちょっとのつもり

で作った炎なのに、なんであんなに大きくなるのか、わたしでもわからないんだものっ！　ミイノ、知ってたら教えてよっ!?　どうしたら、ちゃんときちんとこの炎、制御できるの……!?　わたし……わたしじゃ、わからないよぉっ！」

べそべそ泣きながらの少女の訴えに、ソラミイノは答えることができなかった。

なぜなら、前例と呼べるものが皆無だったからだ。

かつて、アラクセイトのような存在はいなかった。

前例のない存在――。

アラクセイトはバルヴァローズに生まれた、前例のない……『初めて』の存在なのだ。

当然、力の制御もそのやり方も、彼女自身が見いだすしかない。

とは言え、目の前でべそをかく少女にはっきりとそう――自力で頑張るしかないのだとは少々言いづらく、ひとつため息を洩らして、ソラミイノはアラクセイトの紫紺の真っ直ぐな髪を撫でた。

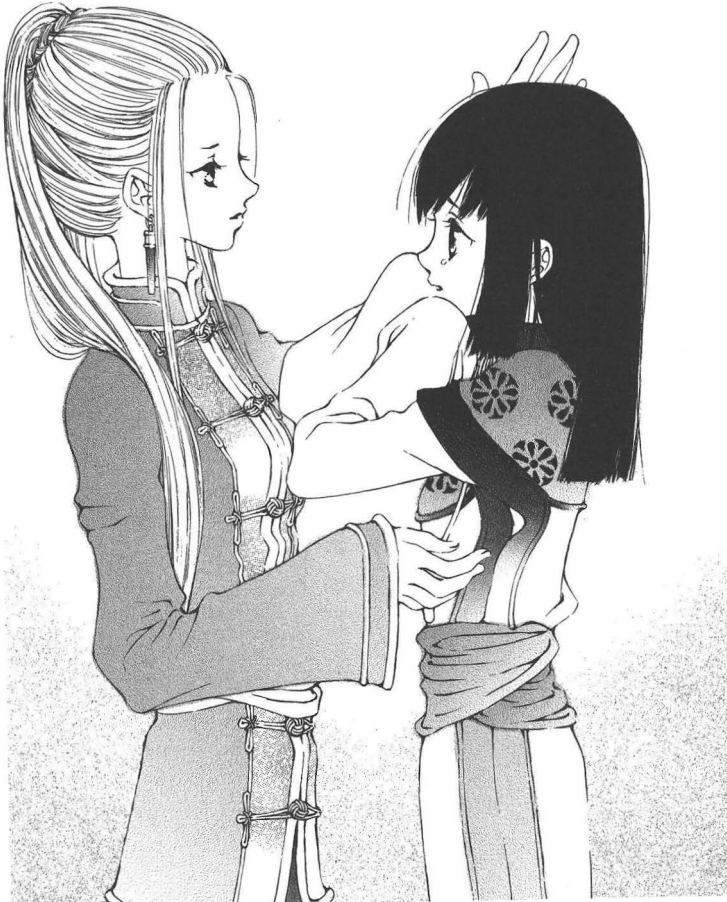
「なんで、あなたってば、こんなに手間がかかるんだか……」

自分も協力するから、一刻も早く、力を制御できるようになりましょう。

囁いた彼女に、アラクセイトはこくこくとうなずいた。

（本当……制御してくれなくちゃ、おちおち眠れやしないわ……）

という本音は、とりあえず、胸の内に納めておくことにする。



（ほんとに……まったく、この娘ときたら……）

厄介だとわかってるというのに、切り捨てることもできないだなんて……面倒なこと、この上ない……。

それでも、面倒だから……厄介だからという理由で、切り捨てることはできない。

どうして——と、ソラミイノは胸の奥でちらりと考えた。

どうして、わたしはこの子を、放っておけないのかしら……？

答えは、もう、すぐに出る。

2

さて、言うまでもないことだが、バルヴァローズには七つの大陸があり、それぞれに数多の国が存在している。

神殿に籍を持つ者とはいえ、国境を越える際に手形が必要であることに違いはない。

ただし、神殿が発行するそれは、各国政府のものより随分と融通の利くものではあったが——そうでなければ、先日の件では、密入出国で罪を問われていたに違いない。

まあ、そういうわけだから、アラクセイトとソラミイノ、カーラトーニにセイタマールの四人は、大きな街に立ち寄った場合、必ず地神——アスカニーリ神殿に顔を出すようにしていた。聖石の使徒や子供は、すべからくアスカニーリ神の加護下にあるとされているためだ。

今回、立ち寄ることになったのは、世界最北の大陸豊珠の、最南端にあたる国——玻瑠の第二の都と呼ばれる街、晶花だった。

いつものように、ここでカーラトーニとセイタマールが神殿の責任者に面会し、手形への署名を増やすことで、より自由な行動を保証してもらう……のが、いつものなりゆきだったのだ

が、今回は少々、様子が違っていた。

師匠ふたりとは別に、ソラミイノまで、別室に呼ばれたのだ。

緊急を要する知らせということで、急きたてられるように部屋に案内されたソラミイノは、正直、あまりいい気分はしなかった。

神殿に籍を置く身でありながら、彼女を案内した神官が、あからさまに自分とアラクセイトとを差別する態度を取ったからだ。

アラクセイトの特殊な能力のことは、極秘事項として一部の人間しか知らないわけだから、彼女を特別扱いしないのは、わかる。

問題なのは、自分に対する丁重すぎる相手の態度だ。

それは……生まれ故郷である玉濫では常のものだった。

神殿とはいえ、そこにひとが集う以上、派閥というものは存在し、幸か不幸か、ソラミイノの生まれた一族は、豊珠の地神神殿にあって、最大と見なされるそれの中枢に位置していたのだから。

能力の高い使徒を送りだす確率と、有能な人材の宝庫として、彼女の生まれた一族は特別視されている。

ソラミイノ自身、生まれてきてからずっと、大切にされてきた事実でもって、それは当たり前のことだと思っていた。有能な人間を優遇する——それは、当然のことではないかと……だ

から、自分が周囲に特別扱いされるのも、至極当然のものだと信じていたのだ。

なぜなら、自分たちは優れているのだから、と――。

生まれた時から、持て囃される環境に置かれていたのだから、ある意味仕方ないことなのだと、いまでは少しだけ周囲も悪いとは思えるようになったのだけれど――これは、自分のせいではないという責任転嫁ではなく、自分自身にも、周囲にも褒められぬ点があったことを客観的に認めた結果である――それでも、傍目にもはっきりとわかる贔屓を受けておきながら、それを当然だと思っていた傲慢な自分自身を思い出すと、それだけで顔から火が出るような羞恥を覚える。

それを自覚させてくれたのが、アラクセイトだった。

秀才と褒めたたえられた自分と同い年の、しかも自分よりずっと遅れて神殿に入ってきた……屑石としか思えない石墨の子供だったにも拘わらず、アラクセイトの示した成績は尋常ならざるものだった。

あっという間に飛び級を重ね、あれよあれよとばかりに、同級生になった。

アラクセイトが神殿に入ったのは、自分より三年も遅かったというのにだ！

本来、負けず嫌いなタチだったソラミイノは、俄然やる気を出した。

今にして思えば、ようやっと張り合える好敵手を得たことで、日々の生活に張りを覚えたのだ……と、言えないこともない。

同い年——しかも、神殿に入って正式に学びはじめたのは、自分より三年遅れ。
なのに、追いつかれそうになっている。
目茶苦茶、腹が立った。
なにがなんでも負けるものかと思った。
それで、精一杯頑張った。
どうにもこうにも、アラクセイトにだけは負けたくなかったのだ。
けれど、その競争は、ある日、突然断ち切られた。
アラクセイトが、ある日突然、『落ちこぼれ』てしまったせいだ。
その理由は、決して明かされることはなかったけれど……今は、知っている。
けれど、あの当時は知らなかったしわからなかった。
だから、物凄く苛立ったし、腹も立てた。
彼女に対する態度がきつくなったのは、そんな感情が関係していたからかもしれない。
ある日を境に、それまで見せていた明敏さを失し、ただの落ちこぼれと化してしまった同級生……。
なのに、ずっと、目を離すことができなかった。
なぜ、こんな簡単なことが出来ないのかと、以前はもっと難しいことだってたやすくなし遂げていたではないかと、思って、呆れて……けれど、見放すことはできなかった……唯一の少

女。

その後、うっかりと感動し、生涯ついていってもかまわないとまで思ってしまった少女。

事実、世界に前例のない輝きを放ち、自らを魅了してしまった少女――。

（悔しい……）

と、思う気持ちは、ソラミイノにもある。

どうしたってかなわないとか、そんなことは思いたくもない。

けれど、どこかで、彼女の放つ輝きにうっとりする自分がいるのだ。

負けたなどとは、絶対に思わないけれど、それでもアラクセイトは凄いと……そう純粋に思ってしまう部分は……あるのだ。

もちろん、他のぽややんでのほほーんな部分も知っているからこそ、目が離せないとも思ってしまうのだけれど。

（でも……っ！　むかつくのよね、この神殿のやり方ってば！）

実力を無視した、派閥重視のこの対応――。

（ものすごっく、むかつくって言うか……すごく、気持ち悪いっていうか……）

目茶苦茶気分悪い対応だわ――と、そんなことを思いながら、たったひとり通された応接室で、受け取った封書の中身に目を通した瞬間、ソラミイノは目を瞠った。

「うっそ……!?」

つぶやきながら、何度も何度も、彼女は書面に目を落とした。
高価な紙の便箋に記された文面は簡潔なもの。
『兄帰る。至急、戻られたし』
それは、五年前に行方不明となり、いつしか死んだものとされていた、ソラミイノの実兄の帰還を知らせる文だった。
「本当に……!?」
両手で口を覆いながら、ソラミイノはつぶやいた。

「ミイノって、お兄さん、いたんだ？」
数年間、一緒に寝起きしてきたというのに、そんなことを知らなかったんだな、と少しだけ淋しく思いながら、アラクセイトが尋ねると、白金色の髪の友人は、ひょいと肩をすくめて答えた。
「いるわよ、兄だけじゃなくて姉もね。もっとも姉はふたりとも嫁いじゃってるからほとんど会えないけど。今回見つかったのは、二番目の兄なの。五年前、行方知れずになったものだから、誘拐とか暗殺とかの線で、ずいぶん調べたらしいんだけど、結局足取り摑めないままで

ね。そういう生臭い話、口にしたくもなかったし……」

苦笑まじりの口調と、耳慣れない不穏な言葉に、アラクセイトは目を瞠った。

（誘拐……とか暗殺……って……？）

言葉とその意味を知っていても、普通日常ではよそ事の話題でしか聞いたことのないたぐいのものだ。

それをさらりと言われて、アラクセイトは一瞬言葉を失った。

「えっと……もしかして、ミイノの家って、お金持ちなの……？」

誘拐だの暗殺だのという話題がでるのは、『お金持ち』か『偉いひと』に限定されたものだと思っている彼女の問いは、素朴と言えば聞こえはいいが、間抜けなものだった。

事実、問いかけられたソラミイノは、がっくりと肩を落とし、深いため息を洩らしていた。

「アーク……。玉濫の神殿にいたころ、わたしがけっこう優遇されてたこととか覚えてない？長期休暇でもないのに外泊が認められてたこととか、休みでもないのに講義休んでもなにも言われなかったりとか……いろいろ、あったでしょ？」

げんなり、と顔に書いてそう問いかけてくる親友に、アラクセイトはきょとんとした顔で応じる。

「だって、それはミイノが優秀で、先生たちからも信頼されてたからでしょう？　先生たちがミイノのこと、十年にひとりの逸材だって話してたの、聞いたことあるよ？　だから……だっ

たんじゃないの？」

成績がいいだけでなく、面倒みもいいソラミイノは、周囲から信頼されていた。

そんな彼女だからこそ、神殿も少々の融通をきかしていたのだろうと、アラクセイトはずっと思っていたのだ。

対するソラミイノは、ますます深いため息を洩らした。

「もちろん、それもあっただろうけどね……」

さらりとアラクセイトの発言内容を肯定するあたり、人柄によっては非常に厭味に聞こえてもおかしくないのだが、そうは聞こえないという点で、青緑の双眸の少女は得な性分だといっていいだろう。

すんなりと、それが事実だと皆に納得させてしまうのだ。

かなりひねくれた性格の主でも、心底からソラミイノを嫌うことができない理由はそこにある。処世術のひとことでは片づけられない不思議な魅力が、確かに彼女にはあるのだ。

ひねくれていないアラクセイトが、真っ直ぐそのままに受け入れてしまうのは当然のことといえた。もっとも彼女の場合、裏読みだの副音声翻訳機能だのがまったくといっていいほどにないため、別の意味で危なっかしい人物ではあったわけだが。

「うちのお祖父さまがね、玉濫のアスカニーリ神殿の大神官なわけ。あと、大叔父さまが殊玉の大神官で……ほかにもぼろぼろいるわけよ、豊珠中の大都市の神殿の神官長だとかなんだと

かって肩書持ってるひとたちが。わたしが特別扱いされてたのは、どっちかというと、そっちの関係なわけ、わかった？」

不本意そうに顔を曇らせ、それでも一応説明してくれるソラミイノに、アラクセイトはふと浮かんだ疑問を口にはせずにうなずいた。

（それなら、ミイノって、神殿でものすごーく偉いお家の一員だってことだよね？　でも、普通そういうひとたちは、もっと大きな街の格式の高い神殿とかを選んで入りそうなものだと思うんだけど……なんでミイノはそうしなかったのかな……？）

なんとなく、答えはわかっているような気がした。

ソラミイノの、ものすごく不機嫌な顔と口調から考えれば、彼女がそのたぐいの特別扱いを喜んでいないのははっきりしていたように思えるからだ。

ソラミイノはきっと、そんな家柄とかではなく、自分自身の力で、周囲を認めさせたいと思ったのではないだろうか。

だから、敢えて玉濫でも田舎にある神殿に入ったのではないだろうか。

そして、なるべく自分の身元がわからないように……周囲に知られて、それで特別扱いされたりしないように、なるべく家族や親戚のことを口にしないようにしていたのではないだろうか……？

思い起こせば、ソラミイノは自分からは、家族のことは口に出さなかったと思う。話の矛先

を向けられた場合でも、誤魔化すというと聞こえは悪いけれど、曖昧に流していたような気がするし、深く突っこまれたときでも、明確なことは言っていなかったように思う。

（それってきっと、お家のこととかばれて、それで周りの態度が変わっちゃうの、イヤだって思ってたってこともあるよね、きっと。あと、行方不明だったお兄さんみたく、ミイノもばれたら狙われるかもしれなかったって線もあるし……）

鈍感で、のほほん、ぽややんな天然娘は、しかし頭の働き自体は悪くない……というか、どちらかと言えば速い。

そうと教えられるまで、かけらも気づかなかったあたりは、まさに鈍いとしか言いようがないが、気づけばそれなりに頭を働かせることはできるのだ。

「……じゃあ、その行方の知れなかったお兄さんも、位の高い神官さまだったの？」

尋ねたアラクセイトに、ソラミイノは「まさか」と手を振った。

「まあ、将来を有望視されてたのは事実だけどね、いなくなったとき、兄は十五だったんですもの。いくらうちが神殿で力を持っていたって、そこまでのごり押しはできないわよ。派閥争いだってあるわけだしね」

いともあっさりとそう告げられ、アラクセイトは頭がぐるぐるしそうになって困った。

（派閥争い……だから、誘拐とか暗殺の危険がつきまとってる……？　王家の方々や大きな貴族ではよくあるって話だけど……神殿の、神さまに仕えるお家でも、そういうの、あるわけな

のかな？　なんか、すごく似合わないような気がするんだけど……うーん……？）

思わず首をかしげてしまった彼女の肩を、ソラミイノがぽん、とはたいた。

「どうせ、あなたは使徒になるんだから、そのあたりのことはあれこれ難しく考える必要はないわ。そんなのに係わってられるほど暇じゃないはずだし、瘴気浄化のために、あちこち飛び回ることになるだろうからね」

はっきり、きっぱりと言い切られて、アラクセイトは目を丸くした。

「ミイノって、予見の力でも持ってるの？　でも……それって、かなり無理だと思うんだけど……わたしの実技成績って、最低の最低だし？　第一、わたしみたいな暴走火薬娘、神々だって不安で使徒になんて選べないと思うんだけどなあ……？」

言って……自分の言葉に傷ついた。

（じ、自分で自分の傷を抉っちゃった……）

さすがに、胸をおさえることはしなかったが、つい先日の失敗を思い出し、ずぅんと落ちこんでしまったアラクセイトである。

そんな彼女に、ソラミイノはにっこり笑って腕をのばしてきた。

次の瞬間、かなりの力で両頬を摘まれ、左右に引っ張られたアラクセイトは思わずつぶやいた。

「い、いひゃい……」

なぜに、なんで、どうしてと、顔に書いて黄橙色の瞳で問いかけた彼女に、親友はすげなく告げた。

「気にしないで。ただの八つ当たりだから」

と――。

眼下で風景が、すごい速度で変化していく。

イーオダールの子供たち――木気を帯びた聖石の子供石の力を借りて、風霊たちに助力を求めた結果の高速移動である。

先日、金剛石の子供であるガネルオージェに誘拐された際は、寒風吹きすさぶなかをそのまま空中移動したため、あわや肺炎で死にかける羽目に陥ったのだが、今回の移動は、周囲を風霊たちが守護してくれていることもあり、まったく別物と言えるほどに快適なものだった。

それを制御しているのが、ふたりの師匠とも呼べる珊瑚の使徒ふたりであり、能力を磨くということは、こういうことも可能にするのだと、アラクセイトなどはひとしきり感動し、だからこそ、せめて暴走癖だけは直そうと心に誓ったわけではあるのだが。

（先は、限りなく長いと思うんだよねえ……）



意欲はあるし、努力するつもりだって山積みだ。
なにより、いつまでも自分の暴走癖のせいで、周囲に迷惑かけっぱなしという状況はなんとかしたい。
切実に、そう思っている。
けれど……けれど、だ。
（石墨だって満足に使えないのに、金剛石の子供石だとか、思うように扱えないイイタールの娘としての力だとか……正直なところ、ちょっと……荷が重いんだけど……なあ……？）
ちらりとそんなことを考えて、けれどアラクセイトは口にするのはやめておいた。
聖石の子供は神々が人間に賜えた福音――そのことで得られた力は神々の望むように、世界のために揮うべきもの。
まさにそれを実践している師匠たちや、それを目指している親友の前で、怠惰に取り憑かれたようなことは言えない。
（本当は、石墨、薬湯にできて……そうだな、炎をおこす力も制御できちゃって、細々でもいいから、うちの家族養えるぐらいのお金稼げたら、それ以上のことは望まないんだけど……な。すぐになんでも爆発させちゃうような力より、そっちのほうがずっと、欲しかったりするんだけど……）
バルヴァローズの歴史上、前例のない能力と資質を与えられた少女は、そんなせこましい

ことを、こっそり考えたりする性格の主だった。
そんな彼女だからこそ、神々は選んだのだろうか。
大きな運命の渦は、もう、すぐそこに近づいていた。

3

そのひとは——。

記憶に刻まれたままの姿と声で微笑みかけてきた。

「ソラミイノ……ソーラかい……？」

明るい青の双眸に、心底からの再会への喜びをたたえて自分の名を……家族しか使わない愛称を口にしたそのひとを前に、ソラミイノはどう反応していいのかわからなくなった。

そのひとの髪は淡い金——この豊珠に、ほんの短い期間しか、射しこまぬ陽光の色。

そのひとの瞳は明るい青——豊珠より南の大陸でしか、恐らく目にすることはできぬと言われる明るく暖かい春の空色。

冬に閉ざされた豊珠にあって、唯一南の春を体現する者——あるいは真の春をこの豊珠に招いてくれるかもしれぬひと。

五年の時を越えて、いま再会しているのは、そう呼ばれたひとだった。

なにもかも……変わらない。

その髪の色も、瞳の色も、肌の色さえ――いや、その体格や顔だち……歳の頃さえも！

「ワレン……兄さま……？」

信じがたい思いで、ソラミイノは問いかけた。

ワレン――ワレンアイノが行方知れずとなったとき、彼は十五だった。

子供にあっては男児より女児のほうが早く成長することも多い。

事実、兄であるワレンアイノは、少しばかり周囲の同年代の少年に比べて小柄だったと聞く。

けれど、五歳もの年の差があれば、そんなことはわからない。

十になるかならずのソラミイノにとって、ワレンアイノは大きくて優しくて、頼りになる兄だった。

年は離れていたけれど、ほかの従兄弟や従姉妹たちより、親身になって話をきいてくれていた分、身近に感じていた部分はあったかもしれない。

だからこそ、ワレンアイノが行方知れずとなったとき、夜も眠れぬほどに心配した。

周囲には風邪をひいたのだと言い張ったのだが――自分でも自覚しているが、彼女は意地っ張りの上、周囲に自分の弱みをさらすのが大嫌いな人物だった――同年代の少女たちはともかく、周囲の年長者たちは、しっかり見抜いていただろうことは、いまとなっては悟らずにはいられないのだけれど。

兄の行方が知れなくなったという知らせを耳にして以来、ソラミイノは一心に、神々に祈ったものだ。

（どうか、どうか、お兄さまが無事でらっしゃいますように……！　ご無事なら……いいえ！　生きて戻ってくだされば……！　わたしは、もう、それだけでいいです……！）

その祈りは嘘ではなかった。

けれど、まさか、こんな形でその祈りの結果を目にすることになろうとは、彼女は想像だにしなかったのだ！

「……やっぱり、驚くよねぇ……」

ふっとため息ひとつついて、ワレンアイノが微笑んだ。

ソラミイノの当惑も当たり前のことだと認め、受け入れるかのように。

「そんな……そんなことは……」

ふるふると頭をふりながら、ソラミイノは自分の迂闊な態度に腹を立てた。

兄の――五年前と寸分変わらぬ姿に驚愕したのは事実だ。

十五歳で行方知れずとなった兄が、その当時のままの姿で生還した事実に驚きと衝撃をうけたことは否定できない。

なにしろ、五歳年上であるはずの兄が、いまの自分とほとんど変わりない姿のままで目の前にいるのだから！

世界の理を思えば、そんなことが起こり得るはずがないというのに！

（だから、だったんだわ……！）

いまさらながらに、ソラミイノは認めた。

単に、行方不明だった兄が見つかった――それだけであったならば、それは家族である自分たちだけの問題で終わっていたこと、ですんだのだ。

それだけの問題であれば、自分はきっと、カーラトーニとセイタマールに正当な理由を申し立てることで、五年ぶりに帰還した兄のために帰郷していたはずなのだ。

カーラたちとも、そしてアラクセイトとも関係なく、ひとりでここに戻ってきていたはずなのだ。

だが、実際はどうだ……？

（カーラさまたち……あのおふたりに玉濫の神殿から封書が届いたと聞いたとき……いいえ、それ以前にかりか同行なさるのだと聞いたとき、なぜわたしは単なる偶然だと片づけてしまったのかしら。このこととは無関係だなんて、どうして思いこんでしまったのかしら……!?）

自分の迂闊さに腹が立つ。

聖石の使徒とは、世界の理を乱す事象や事態を見極め、解決するために存在すると言っても過言ではないというのに！

けれど、心のどこかで少しだけほっと、していた。

なぜなら、ワレンアイノからは、二度だけだが感じたことのある、喪月神の瘴気が感じられなかったからだ。

兄の身に、異常な事態が起こったことは事実。

(けれど、それに喪月神は拘わってはいない……恐らく)

きっと、と言い切れないのは、微妙な部分まで感査できるほどには、ソラミイノには経験がなかったからだ。

だからこそ、それを持つカーラが呼ばれたのに違いない。

(でも、きっと、大丈夫だわ……きっと)

自分に言い聞かせるように、胸中でそう繰り返したソラミイノは、そのときになって初めて、自分がようやく再会できた兄に、肝心な言葉を告げていないことを思い出した。

「ごめんなさい、ワレン兄さま。確かに驚いてしまってたみたいで……」

そう前置きしてから、彼女は心からの笑顔で、『その一言』を口にした。

「お帰りなさい、お兄さま。ご無事なご帰還、心から嬉しく思いますわ」

その笑顔のせいか、ワレンアイノは少しばかり苦笑まじりにこう答えてきた。

「あまり無事……でもなさそうなんだけどね」

とんでもない、とソラミイノは大声で否定した。

「どこも怪我なさってらっしゃらないし、記憶だってしっかりなさってらっしゃるじゃありま

せんか！　これをご無事と言わずして、なんと言えばよろしいんです!?　それに……」

と、言いかけて、そのとき初めて、昔聞いた話を思い出した。

「それに、聞いたことがありますわ。何百年も昔の地層から見つかった植物の種が、植えたらちゃんと芽を出したって話。お兄さまも、きっとその種と一緒なんですわ。どこか……きっと、神々の恵みの厚い場所で、五年間眠ってらしただけなんですわ……。そうよ、そうでなければずっと見つからなかったはずがありませんもの！」

力説したソラミイノに、ワレンアイノが驚いたような目を向けてきた。

「……どうなさいました？」

尋ねた彼女に、兄であるそのひとは「いや」と笑って答えた。

「確かにあれから五年がたったんだと不意に実感してね。もちろんソーラは大きくなったし、目を瞠るぐらい綺麗になったけど……それ以上に、内面が変わったのを目の当たりにするとね……ソーラは覚えてないかもしれないけど、昔はそういう理屈から外れた話は苦手で、極力話題に乗せないようにしていたものだから」

聖石の子供だなんて、神々の奇跡と加護に、直に接している身だというのにね――。

愛情に溢れた揶揄の言葉に、ソラミイノはつい言葉に詰まってしまう。

「あれは……世の中のひとたちが、あんまり簡単に神々の恩恵だとか奇跡だとか言い立ててありがたがってることが不思議だったのと……ちょっと滑稽に思えたからです。もちろん、この

世界を創られたのは神々であり、そうである以上、すべての事象は神々の奇跡と呼べるかもしれませんけど、でもちょっと珍しいぐらいの自然現象まで、全部奇跡で片づけようとするのはどうかと思っていただけですもの……」

そう、聖石の子供として生まれ、また同時に火神イイタールの加護をも得た、二重の意味で『奇跡の子供』であったソラミイノは、その利発さゆえに、一時期、『本当の神々の奇跡』の真贋を見極めようなどと思っていたころがあったのだ。

「でも、いまはそこまで頑なにこだわってはいないようだね？」

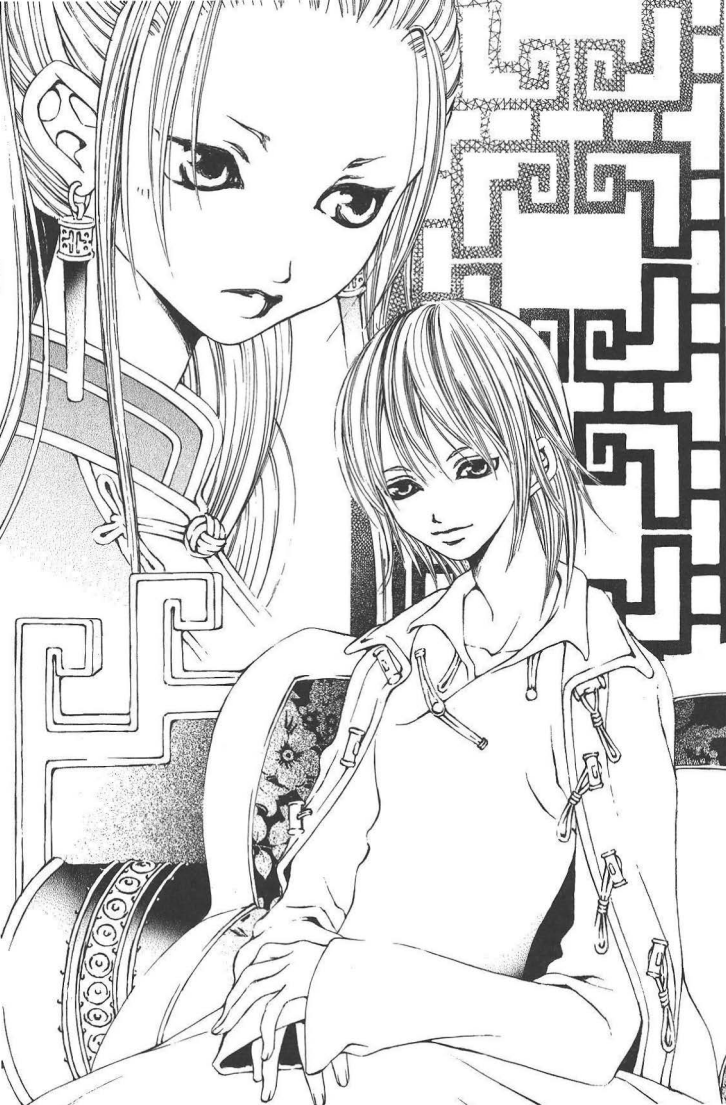
やさしい笑顔で問われ、彼女はうなずいた。

「ええ。本当の奇跡は確かにあるのだとわかりましたし、そういうことは……なにも躍起になって見極めなくてもいいのだと……世の中にはいくらでもあるのだと思い知りましたし……」

彼女をその心境まで導いたのは、アラクセイトだった。

（イイタールの娘で、子供石として金剛石生み出せて、しかも普通なら、使徒さまであっても、浄化できるのは人間が生み出した瘴気に限られるっていうのに、あろうことか喪月神自身が生み出した……それこそ世界を覆しかねない強力な瘴気まで浄化しちゃう人間だなんて、はっきりきっぱり夢物語の住人か、もしくは神々の愛し児ってとこよね）

嘘としか思えない——そんな夢の化身を、ところがソラミイノは身近に見知ってしまっている。



ただし、肩書のみに限定すれば、という条件がつく相手なのだが。

実際につきあうとなると、相変わらずありあまる——過剰なせいで尚更、と言えなくもないが——才能を制御できず、おかげで暴走起こしまくり、性格ときたら覇気のかけらもないのほほんでふややんで、本来の能力を発揮できるのは、ほとんど火事場の馬鹿力状況のみときている。

ところが、そんな状況下で見せる輝きというか魅力というか……そういったものが、尋常ではない。

（ほんと……あれはほとんど詐欺だと思うわ……）

そんなことを思っていた彼女に、ワレンアイノは微笑み、嬉しそうな目で語りかけてきた。

「いい友人が、できたようだね……？」

ソラミイノが即座にうなずけなかったのは……なにも彼女の責ではなかったろう。

（いい友人……？）

はたしてアレを、そう呼んでいいものかどうか、一瞬判断に迷ったからと言って、誰にも非難される筋合いはないとは思っていたものの……。

（うーん……？）

思わず首をかしげながら、彼女はぽろりと「そうかも」とつぶやいていた。

少なくとも、アラクセイトやカーラたちと一緒に過ごす日々においては、自分はアスカニー

リ神殿における有力名門の一員であるという枷からは解放されているのだから。

玉濫における田舎と言われる場所の神殿を選んでも、結局贔屓はついて回った。

自らの能力の高さゆえに、周囲が便宜を図ってくれているのだと、誤解していられたのは、神殿に入ってほんのしばらくのころまでのことだった。

もちろん、教育の場において、教師でもある神官たちは、自分に対して追従したりはしなかった。実家にあって、それはごくごく当たり前なことであった上、かなり鬱陶しかったものだから、半ば癇癪を起こして、せめて実家の権勢のあまり届かない田舎の神殿に入りたいと思い、実際そうしたのだけれど……だからといって、豊珠の隅々まで根を張りめぐらせた一族の力が、たかだか田舎だからというだけの理由で、及んでいないはずはなかったのだ。

突然の家族からの呼び出しに、すわ何事かと焦り、帰還した結果、修行中の身である自分を呼び戻した理由が従姉の婚約式であったり——結婚式ならともかくだ——遠縁の老人の長寿を祝う宴の席であったり、一番腹が立ったのが、久しぶりに顔を見たいからという理由だけで、自らを危篤と偽って、祖父が呼び寄せた一件だったりするのだが……。

そんなことがつづけば、いやでも自分が特別扱いされていることに気づいてしまう。

そして、それは、周囲の友人たちも同じだった。

頼りになる級長、あるいは室長として寄せられる期待のほとんどは、確かに彼女の能力に対するものであったけれど、なかにはそうではないものもあった。

阿諛追従する者も、決して少なくはなかったのだ。
おかげで、周囲からの称賛を素直に受け入れることが難しくなった。
『すごいわね』
『さすがだわ』
投げかけられる言葉を皮肉に受け止めるのが当たり前になっていった……のだけれど。
よもやまさか、一番その手の台詞を多く口にしていた少女が、まったくきっぱり、そういう裏事情に気づいてもいなかったというのは……いささか複雑な気分だった。
それは、アラクセイトが純粋にソラミイノのことを認めていてくれた事実を示すと同時に、少しでも関心を覚え、日々の言動に気をつけていれば、すぐにも想像できる程度の事情にも拘わらず、あの紫紺の髪の少女が気づかなかった——その意味を考えさせられるからだ。
自分に対し、そこまでの興味を抱かず、だからこそ周囲の空気を読み取ることができなかったのか……それとも。
見るには見ていたし、聞くには聞いており、さらに感じる分には感じていたものの……のほほんな性格が災いし、皆目事情を推理さえできずにいた……とか。
（なんだか、限りなく、後者の可能性が強いような気はするけど……それはそれで、なんだかねえ……？）
と、思ってしまうのだ。

これから一緒に行動していく上で、そこまでアラクセイトが鈍感であるというのは、いささかどころでない頭痛の種となり得る事実だった。

けれど、別の部分で、その鈍さゆえに嬉しいと思ってしまう自分を、ソラミイノは認めていたりした。

（だからって、あんな性格のままずっと一緒にいるのは御免だけど）

だから――と、ソラミイノは心に固く誓ったのだ。

（アークにはこれから、精神面でどんどん成長してもらうことにしてっ！　でもってあの才能を遺憾なく発揮できるようになってもらってっ！　そして……）

誰もが文句なしに認め、たたえるような『聖石の使徒』になってもらうのだ、と。

くっきりはっきりと、彼女は思い、決めたのだ。

その傍に、必ず自分がいることは決定事項だと思い定め、ソラミイノはワレンアイノにこっそり笑ってこう告げた。

「ええ、お兄さま。とっても手のかかる面倒な子なんですけど……でも、かけがえのない友人だと思うひとが出来ましたわ」

それは良かった――とは、ワレンアイノの言だった。

「違うね」

きっぱりと、黒珊瑚の使徒であるカーラトーニが言い切ったのは、ワレンアイノの寝室からいくらか離れた、一族の集う広間でのことだった。

皆が、ほっと息をつく。

それでも安心できぬと見える人物が、「そ、それは、つまり……？」と、彼女に言質を求めるのに対し、カーラトーニはそれを与えた。

「ああ。喪月神の瘴気は見受けられない……あの公子は無垢なままだ。公子は神々の奇跡を受けた身だと見なして差し支えなかろうよ」

「おお！」

集った者たちが、安堵のためにどよめいた。

それらの感情の不純さゆえに、カーラトーニは内心のため息を禁じ得ない。

奇跡と見なされること——その原因はふたつに分かれるのが普通だ。

まさに、神々の恩寵を受け、神々の力によって、現実では到底不可能と思われる事象が可能とされること——もうひとつの可能性は、かつて神と呼ばれた身によるそれで、だが周囲に瘴気を蒔きちらすもの……。

前者は尊ばれ、後者は忌まれる。

感性の鋭いカーラトーニが今回玉濫に招聘されたのは、その判別を依頼する――そのためだったのだ。

（まあ、そりゃあ、わたしだってよかったとは思うけどね）

瘴気を引き寄せた人間は、以前がどうあれ、瘴気に触れたとたんに変質してしまうものであり、その後は災厄しか引き寄せないのが当たり前とされているからだ。

たとえ、自分に判定を依頼した者たちの本音が「神々から愛されたからの奇跡なら言うことなしだけれど、そうでなかった場合は即刻抹殺」だったとしても、部外者である自分がどうこう言える筋合いではない。

とはいえ、このあからさまな空気の変化は何事かと、ついつい思ってしまうのも事実だ。

一族のためになるならばよし、そうでなければ存在する必要なし――と、まるで言い切られているかのようではないか。

（なんだか、むかっとするよねえ……）

瘴気はなにも、悪しき心にばかり働きかけるわけではない。

必死に願う心、求める心に、瘴気と神々の恵みは半々の確率で応じるものだと、カーラトーニは知っている。

もちろん、どちらの力を受けた方が、周囲に甚大なる被害をまき散らすのかはわかっているのだが……それでも。

悪しき力を一度でも頼った魂は、永劫の悪から逃れ得ないものと見なすひとびとの認識には疑問を持っていた。

（そこまで……ひとであれ、神々であれ、絶対ではあれないと思うのだけど……それは間違っているのかねえ……？）

わからない。

わからないけれど――。

明確な答えのみを求める人々には言えなかった『疑問』を、こっそりと胸の内に隠したまま、彼女は事実のみを口にした。

ワレンアイノの身を満たしていたのは純粋なる月光――そこには一片の瘴気もなかったのだと。

懸念はあったが、それは口に出さずにおいた。

それは、係わるには多少どころでない覚悟が必要な問題を孕んでいたからだ。

彼女は決して消極的な人間ではなかったが、起こってもいない波風をわざわざ立ててまで身を乗り出そうとするほど過激な人間でもなかったのだ。

4

ワレンアイノの体は、見る間に回復していった。
カーラの『お墨付き』が、それに一役買っていたことは否めない。
人間というものは、良くも悪くも心に左右されるものであり、それは、もちろん本人のものが一番の影響力を持つとは言え、周囲のそれだって馬鹿にならない力を発揮することもあるのだからだ。
つまるところ、ワレンアイノの帰還に周囲の面々は喜びながらも、一抹の不安と疑念を捨てきれずにいたころの、彼の周囲の感情というものが、彼の心身に多大な影響を与えていたということだ。
無理はなかろう。
本人自身、自らの身に起こった事実をどう受け止めていいのかわからずにいたのだ。
行方知れずとなった五年前から変わらぬ肉体と、その間の記憶の一切が空白だという事実。
なまじ神殿の中枢に近しく生まれて来、常人には伝えられることのない歴史や真実の幾ばく

かに通じた身にとって、それは、到底無視できるものではなかった。
この身を見舞った事態は、いったいいかなる意味合いを持つのか。
それは悪しきものではないのか。
自身を含めた周囲の皆の感情にさらされ、時に孤立化する。
致し方ない——その事態を我がことと感じるのは、ワレンアイノ自身しかいないのだから。
どれほど親身に想い、心配してくれていようとも、彼以外の人物が、彼の感情そのものを共有できるはずはないのだから。
だから——この豊珠には存在しない、最も喪月神の気配に近しいと見なされる珊瑚の使徒によって、この身を助けた光が瘴気ではなく、純粋な月神の力であることを証明された時、彼は心底から安堵の息をついた。
よかった、と思った。
(わたしは、悪しき力を借りたわけではない……)
なにより、そのことが嬉しかった。
そして、それが証明されたいま、家族も皆、自分の生還を喜んでくれている。
末の妹も含め、家族が、この外見ゆえに喜ぶより先に困惑していたのはわかっていたが、それでも、嫌疑は晴れた。
この身は、神の祝福でもって永らえたものなのだと証明された。

いまはまだ、普通に生活するほどには回復していないが、すぐに動けるようになる。
そうなれば――。
（そう……ようやく、君に会える……）
ワレンアイノが脳裏に思い描いたのは、彼をこの世に引き戻した、大切な許嫁の少女の顔だった。
ふたつ年下の、金の髪のばらの蕾のような少女――。
別れた、あのときから五年。
彼女はいかほどに輝かしく成長していることだろう？
（わたしの……大切な蕾姫……）
もはや、彼女を再び失望させる心配はない。
この身を甦らせたのが、喪月神の瘴気でないことは証明されたのだから。
（ああ……けれど、この体では、きっと彼女のほうが年上に見られてしまうかもしれないな。急いで、不釣り合いに見えないよう、成長してしまわなくては……）
この身を救い、生還させたのが、神の力であるのなら、それもまたやすいものに、彼には思えた。
（彼女に、恥ずかしい思いをさせないよう、はやく年相応に育つように……願い、祈るぐらいのことは、きっと大丈夫なはずだ……）

そして、心と体は繋がっている。
いますぐには無理でも、きっとこの願いに、体は応じて成長してくれるに違いない。
そう思い、強く、強く、ワレンアイノは祈った。
そして、ふと思い出した。
（なぜ、彼女は会いに来てくれなかった……？）
と――。
それまで、自身を救った力の正体がなんであるのか、そちらにばかり気が行っていたものだから、気づかずにいたのだけれど。
（ああ、いや……多分、彼女には知らされなかったんだ……）
と、彼は自らを納得させた。
自分でも、この生還が尋常ならざることは理解できる。
そして、神殿の重鎮であることを第一としている一族の観点からすれば、本来ならあり得ぬ形で戻った自分への対処に関して、慎重な態度を取らざるを得ないことは手に取るほどによくわかる。
そして、許嫁であった少女は、縁戚ではあったけれど、彼の一族からは外れた存在だった。
たとえ婚約しているとはいえ、いまだ余所者である彼女を、白黒のはっきりしない状況で、秘密主義に凝り固まった一族が呼び寄せるはずがない。

（そうだった……）

自分が『判定の結果』次第では、生還した事実ごと抹殺されていた可能性まで含めた形で受け入れてしまっている青年は、冷静すぎる判断を下す。

それは、彼を含む一族の皆が、幼少時から叩きこまれたものだった。

（でも、もう大丈夫だから……）

もう、なにも心配することはないのだから——。

すぐに会える、とワレンアイノは思った。

彼の意識は十五のときに凍った——そのときのままだった。

その後に起こったこと、その後に変わってしまったこと——そういったことが、彼の脳裏にはなかったのだ。

だから、彼は素直に、十五のころに信じていたことが、五年後のいまも実現化すると頭から信じこみ、自分を待っているに違いないと信じる許嫁の、いまの状況を知りたいと願った。

それが、なにを現実にもたらすか——想像もせずに。

ソラミイノは、本当にいいお家のお嬢さまなのだと、アラクセイトはいまさらながらに再認

識した。

なんといっても屋敷はだだっ広くて気を抜けば迷子になりそうだし、大きな窓には見たこともないぐらい大きな玻璃が嵌めてあるし、お風呂のお湯は使い放題だし、靴のまま歩くのが躊躇われるような綺麗な敷物が部屋はもちろん廊下にまで敷いてあるし、ずいぶんと夜遅くまで蠟燭が灯っているし……と、これまで想像もしたことのない贅沢尽くしだったのだ。

しかも、どうやらこれは特別なことではなく、日頃からそうなのだと聞かされれば、アラクセイトとしてはため息をつくことしかできない。

極めつきは、大人が三人並んで寝ても、まだ余裕がありそうな大きな寝台と、どこまで沈むかわからないほどに柔らかい布団だった。

しかも、部屋付きの者が、こちらが眠る前に、シーツや毛布に火熨斗を当てるという徹底ぶりなのだ。おかげでほかほかの布団にくるまれて眠れるわけで、否やもなにもないのだが……湯たんぽや温石すらよほど寒い夜にしか使ったことのない彼女にとって、それらは目眩を覚えるほどの贅沢さだった。

「ミイノって、本当にお嬢さまだったんだねえ……」

ばふん、と行儀悪く、ふかふかでほかほかの布団に倒れこんだ恰好で、アラクセイトがしみじみとつぶやいた。

因みに、彼女はソラミイノと同じ部屋で寝起きしている。勝手がわからないだろうからとい

うソラミイノの配慮だった。

大変助かったと、アラクセイトが思ったのは言うまでもない。

「なに？　疑ってたの？　わたし、隠し事はしても、基本的に嘘はつかないわよ？」

別段気を悪くした様子もなく、ソラミイノが――吟味してみると、けっこう侮れぬ性格の見え隠れする言葉なのだが――そう言うのに対し、アラクセイトは「ううん、そうじゃなくて」とかぶりをふった。

「わたし、神殿で一緒に掃除したり、給仕係やったりしてるミイノしか知らなかったから……そもそも、こんなお屋敷来るのも初めてだし。こんな……まるで魔法みたいに、なんでも欲しいものが出てくる生活自体、想像したこともなかったし。こんな生活に慣れちゃったら、神殿での暮らしって、けっこう辛いような気がするのに、ミイノってば、神殿でも文句ひとつ口にしないで、なんでもてきぱきこなしてたでしょ？　だから……やっぱりミイノってすごいんだなあって再認識しちゃった」

へへ、と笑ったアラクセイトに、ソラミイノはちらりと振り返って答えた。

「確かに、手荒れは神殿に行って初体験した悩みだったわね。雑巾掛けで、いつもは使わない筋肉を酷使したあげくに筋肉痛起こしたこともあったし、食事の質素さにはけっこう泣きたくなったこともあったけれど……でも修行だと思えば、我慢できないほどじゃなかったからね。慣れれば別に大した問題じゃなくなったし」

「それは、ミイノが大した問題じゃなくしたんでしょう？　それって凄いと思うんだけど？　わたしがこんな暮らししてたら、神殿で泣きまくってたと思うもの」

真剣にそう告げたアラクセイトに、ソラミイノはにこりと笑って「ありがと」と言った。

そしてすぐに、こうも付け加えた。

「聖石の子供は全員、一定期間、神殿で教育を受ける義務がある……けれど、実際のところ、みんな平等ってわけじゃないこと――その顔だと知らないみたいね」

まさに初耳の情報に、目を丸くしてこくこくうなずくアラクセイトに、ソラミイノは説明してくれた。

「わたしの場合もそうだけど、王族や貴族に生まれた聖石の子供ってね、普通は王都である六華の神殿に預けられるものなの。あちらは規模が大きいし、人手もあるし、なにより警備がしやすくできてるんだからね。それで、良家の子女のほとんどは、生まれ育った屋敷で生活するのと変わらない毎日を送るってわけ。最低限の能力の制御は必須事項だけどね」

思わず胸を押さえるアラクセイトだった――何しろ、その最低限のことがいまだにできずにいるのだから。

「え……でも？　お掃除とか給仕とかって、神殿では交代で……」

「だから、免除されてしまうのよ。あるいはお付きの侍女とか侍従が、主人の代わりを果たすわけ。大体、想像してごらんなさいな。玉濫の第三王女殿下が、雑巾なんてものを絞ってる姿

が想像できる？」

玉濫の第三王女――ファラライネは、紅水晶の子供として、十年以上、神殿で過ごしたと伝えられる人物だった。

今年中にも殊玉の王太子に嫁ぐ予定だとは聞くが……しかし。

（た、確かに……絵姿でしか拝見したことないけれど、でも、あんな優美でやさしそうな方が雑巾絞って床拭いてたり、三角巾とマスクをつけて玉杓子で大鍋から料理を各皿に配分している様子なんて……！）

想像できないというか、想像力のほうが拒絶する。

「でも、ミイノはやってたじゃない……？」

床掃除だって、カーテン洗いだって、布団干しだって――。

と、言い募ったアラクセイトに、ソラミイノは「まあね」と答えた。

さらにつづける。

「でも、それには理由があるの。きちんと修行したからって、使徒に選ばれる保証はないわ。けど、きちんと修行しなければ、絶対に使徒にはなれないことははっきりしているの。でね、アーク、こういう家に生まれた子女というものはね、使徒に選ばれでもしないかぎり、好条件の政略結婚の餌に一番されやすいものなのよ」

耳慣れない言葉に、アラクセイトが首をかしげるのに対し、ソラミイノは丁寧に説明してく

れた。

「いーい？　使徒に選ばれた者は、自動的に神殿に籍を持つことになる……そうしたら、本人の実家の思惑からは取り敢えず解放されるわけよ。……まあ、わたしみたく、神殿中心に権力固めてる家の出身者となると、ちょっと話は変わってくるけれど」

わかる？

と問われて、アラクセイトはうなずいた。

たとえ使徒に選ばれずとも、きちんと能力を制御する術さえ持っていれば、『聖石の子供』は常人にはない力があるということだ。

一番顕著なのが、自らの生み出した子供石を薬湯に変えることで、それで限られた症状とはいえ、病んだひとびとを治療できる。

それは、一家の生計を立てるに充分な収入源となるはずだった。

事実、それで家族を養っている者も多い。

けれど、王族や貴族など、権力の類いに近しい者たちの間では、個人の持つ能力を、付加価値と片づけることも珍しくないのだと……ソラミイノから、初めて聞かされた。

大抵は、外聞の上で有効だという話だった。

聖石の子供とは、すなわち神々に愛された者——。

そんな存在を、婚姻という形で自らの陣営に迎え入れることができれば——その支配下にお

けるひとびとはどう思うだろう？

　自分の住む街や国には、神々の加護が約束されているのだと、そう思いはしないだろうか？　なにしろ、支配者たる者、あるいはその伴侶が、それを約束された者なのだから。

「それは……ミイノも、そういう風に扱われる可能性がある……っていうことなの？」

「可能性はね」

　意味ありげにそう答え、白金の髪の少女は、ふっと遠い目をした。

「使徒に選ばれなければ、結局そう利用されるんでしょうね。でも、使徒になれれば、そうはならずにすむ。わたしが頑張っているのはねえ、つまりはそういうことなのよ。不純だって思う？」

　問いかけられ、アラクセイトはきょとんとしてしまった。

「どうして？　だってミイノは自分の生きたいように生きるために努力してるじゃない。使徒さまになれるかどうかは、神さま次第だからなんとも言えないけど、選ばれてもおかしくない努力を、ミイノが積んでるのは誰にでもわかることだよ？　だから、動機なんか、どうでもいいんじゃないのかなあ。だって、ミイノの性格だもの、選ばれたら、絶対、模範的な使徒さまになると思うし……」

　それにねえ、とアラクセイトは告げた。

「神々は、別に自分たちをたたえろとか言ってるわけじゃないと思うの。というか、言われて

力ずくで祈らされたって、それは本当の意味での祈りじゃないと思うし。今日も無事にすんだなあ、よかったなあ……って思って、夜眠る前に、ああ、神さまありがとうございました、って感謝の祈りを捧げれば、それでいいんだと思うの。決まりとか、そういうのじゃなくてね、自然にありがたいなあって思ったときに、そのままの気持ちで感謝したら、いいんだと思うの。だから、ミイノが不純だとかってことはないと思うのよ？」

訥々とそう訴えたアラクセイトに、ソラミイノは驚いたような目を向けてきた。

（あ、あれ？　わたし、そんなに変なこと、言ったかなあ……？）

内心焦りを覚えつつ、アラクセイトはソラミイノの反応を見守った。

「アーク、あなたね……」

疲れたような口調で、ソラミイノが言葉を紡ぎかける。

だが、それは最後まで紡がれることはなかった。

異変が、生じたのだ！

圧倒的な月光の気配が、爆発したかのような、衝撃がその場を満たしたのだ！

「え!?　あ!?」

（イイタールの子供たちが騒ぎだした!?　なにかよくないことでも起こったの……!?）

アラクセイトの感覚は、かなり以前のそれに近く、鋭くなっていた。

喪月神に拐かされ、死ぬほどの恐怖を味わわされたため、数年間というもの、我が身を守る

本能によって、そのほとんどが封じられていたのだが、記憶を取り戻したことによって、その封印は解除されかけていた。

けれど、完璧ではない。

現に、なにが起こったのか、正確なところはわからなかった。

先に動いたのはソラミイノだった。

「まさか……お兄さま……っ!?」

そうつぶやくなり、彼女は駆けだした。

慌てて後を追ったアラクセイトは、ソラミイノとふたり、その不思議のたったふたりの目撃者となった。

全身に月光を纏うそのひとを――。

その瞬間、胸に走った衝撃の意味を、彼女はすぐには理解できなかった。

「お……兄さま……」

ソラミイノの声に気づいたのか、そのひとは、一瞬だけこちらを振り向き……そうして、消えた。

「お兄さまっ！」

ソラミイノの悲鳴が、広い屋敷に響きわたった――。

5

ワレンアイノの行方は、杳として知れなかった。
半月ほどが経ち、しかも彼の失踪の理由が明らかになったころには、彼の行方を本気で捜そうとする者はほとんどいなくなった。
（腹立つったら、腹立つったら、腹立つったら……！）
ぷんぷん怒りながら、ソラミイノはてきぱきと荷物をまとめていた。
なんのためか――？
決まっている、兄を捜しにいくためだ。
（誰も本気でお兄さまのこと、捜し出そうと思っていないんだわ。はなからあきらめちゃって……むかつくったらっ！）
月神の加護を受けたワレンアイノが、自ら姿を消したのだ――見つかるはずがない……というのが、一族の主だった者たちの言い分だった。
いや、言い訳だと、ソラミイノは思っている。

（お兄さまが五年前と変わらない姿で見つかったことで、周囲にはそのことひた隠しにしてたんですものね、瘴気に侵されたわけじゃないってわかったもんだから、捜す必要はないって思ってるのが見え見えなのよ……ったく）

もし逆に、兄が瘴気の穢れを受けていたなら……あるいはその可能性が残されていると見なされていたなら、一族はなにがあろうと彼の行方を突き止めようとしただろう。

彼という存在を、完全に闇に葬り去るために。

アスカニーリ神殿における名門である一族にとって、その一員が喪月神と関わりを持ったなどということは、決して表沙汰にはできない醜聞なのだ。その判別をカーラに依頼したのは、彼女の実力とは別に、その出身地が、本来豊珠とはほとんど行き来のない海掌だったことも大きかったに違いない。彼女がもっと豊珠と交流の深い大陸出身であったなら、逆に一族は依頼しなかっただろうことをソラミイノは理解していた。

（きっとあの古狸たちのことだから、お兄さまが月神の加護を受けて生還した事実、うまく利用しようとか思ってたのよね。でも、その矢先に姿消されて……そこで、きっと気づいたんだわ。五年間、お兄さまは亡くなったことになってて、それでもなんとか出来てたってことに。しかも……お兄さまが姿を消した理由が理由ですもの。面倒になって匙を投げたってあたりでしょうね、きっと）

それとも、と乾し飯の入った袋を取り上げながら、思った。

「てんで方向違いだけど、良心の呵責だなんてものをちらっとでも覚えたのかしら？」

二年前のことだった。

兄の許嫁であった少女は、一族の意向で、ほとんど無理やり結婚させられた。

彼女の名はライライーソ――いつまでもワレンアイノの帰りを待つと言いつづけていた彼女に、一族は、当時台頭してきた一族の有力者との縁組を強いたのだ。

ライライーソは頑なにその話を拒んだのだが――未来の姉になるひとだと思っていたから、ソラミイノは文でやりとりしていたから知っている――折り悪く、ライライーソの父親が体調を崩したのだ。

一族は、そこに乗じてライライーソを従わせた。彼女の家族を援助する見返りに、言うことを聞けと彼女に迫ったわけだ。

（本当に最低のやり方よね。神に帰依した人間のやることじゃないわ）

それでも、それが罷り通ってしまうのが、力の論理というものだ。

不幸中の幸いと呼ぶべきか、彼女の夫となったひとは、懐深く、誠意のある人物だった。

彼女の心にある傷さえも受け入れ、やさしく包みこむ大きな器を持ったひとだった。

あのころは、それを幸いだと……ソラミイノも思っていた。

兄を想い、忘れられぬままに、一族の意向によって嫁がされるライライーソの心境を思えば一刻でも早く、その傷が癒されるようにと……そう願い、祈ったものだ。

事実、ライライーソは徐々に落ち着き、人生の伴侶として、相手を受け入れるようになった……そのことに、ソラミイノ自身安堵を覚えたものだ。

義姉になっていたはずのひと――せめて、彼女には幸せになってほしい……。

ライライーソのことも大好きだったソラミイノは心からそう思っていたから、彼女が幸せになれそうな気配を感じて、とても嬉しく思ったものだ。

まさか今頃になって――とは、あまりにもひどい表現だから、使いたくない。

けれど、現実に、五年という時は流れてしまったのだ。

ようやく、ワレンアイノはもういないのだという事実を受け入れ、そうして新たな道に足を踏み入れたライライーソが懐妊の兆しを得たという話は、まだ神殿で寝起きしていたころに聞いた話だった。

彼女は産み月間近のはずだった。

そんな時期に、ワレンアイノは帰還したのだ。

（まるで幻のように、現れたと文にはあった……）

最愛の許嫁を想い、兄は心を馳せたのだろうと思う。

もしくは、身に受けた月神の加護により、願いのままに彼女の元へ駆けつけたのか……。

溢れんばかりの月光を宿したいまのワレンアイノなら、それも可能だったろう。

そして……頭では理解しても、実感は追いついていなかったろう五年の歳月というものを、

何の覚悟もなくつきつけられたのに違いない。

ソラミイノが以前の十の子供ではないのと同じく、ライライーソももう、十三だった幼さの残る少女ではなくなったことを。

既婚夫人の証とも言える、きっちりと結い上げた髪と、身ごもっていることが明白なその腹部――それを目にした瞬間に、兄のなかのなにかが壊れたのではないかと、ソラミイノは思っている。

ワレンアイノもライライーソも、ふたりとも大好きだった。

けれど、ふたりが一緒にいるのを見るのは、少しだけ苦しかった。幼いながらに、そこには自分の居場所がないと感じ取っていたせいだと思う。

一族が決めた婚約だったけれど、ふたりは本当に互いを大切に想いあっていた。十の子供の目にも明らかなほど、それは確かな事実だったのだ……。

(多分……いいえ、きっと、お兄さまはほかの誰のためでもなく、ライライーソのために生きて戻ってらっしゃったんだわ……)

神々の奇跡を手繰り寄せてまで――。

だのに、ライライーソはすでにひとの妻となっており、夫との間に子を身ごもっていた――その事実は、どれほどに兄の心を打ちのめしたことだろう。

兄にもライライーソにも、非はないのだ。

責められるべきは、彼女に縁組を無理強いした一族だ。
（なのにっ！　その一番悪いやつらがこぞって『臭いものには蓋』対応なんですものねっ！　タチが悪いったら！　わたしがお兄さまなら、あの古狸どもに仕返しのひとつやふたつやみっつやよっつ、絶対仕掛けてやってたわよ）
月神の加護を得た身であれば、それはたやすいことだったろう。
と、そこまで考えて、ふっとソラミイノはあることに気づいた。
（そういえば……気のせいかしら？　あのとき、カーラさまは月神とおっしゃっただけ……のような気が……？）
もちろん、いまのこの世界――バルヴァローズに月神はひとりしか存在しない。
サラムトーリ。
三つ子の月神のなかで、唯一瘴に堕すことなく残った月の女神。
ふたりの堕神は喪月神と呼ばれる。
だから、月神と呼ばれるそのひとは、サラムトーリしかいない……のだけれど。
（なにか、が……引っ掛かる？　なにかしら……よく思い出せない。でも、なにか忘れてるような気がするのは……）
気のせいなのだろうか？
眉宇を寄せ、そのことに意識を集中しかけたソラミイノは、窓の外に見える空の色の変化に

気づき、現実に立ち戻る。

そろそろ、アラクセイトがカーラたちの講義から戻ってくるころだと気づいたのだ。

誰にも内緒の荷造りである以上——また、同じ部屋で寝起きしているアラクセイトが、本当にもう感心するしかないぐらい、嘘や隠し事が苦手な馬鹿正直者である以上、こんな準備をしていることを気づかれるわけにはいかない。

なにしろ、ソラミイノは一族の裏を掻いて、兄捜しの家出を計画中なのだから。

捜し出したところで、ここに戻るよう説得するつもりはない。

ただ、どうしても言っておきたいことがあるだけなのだ。

一度は、ちゃんと言った。

けれど、あのときといまでは事情が違う。

だから、いまこそ、はっきりと伝えたい一言があったのだ。

決行は二日後——新月の夜に決めていた。

家出決行の夜のこと。

ソラミイノはそろりと寝台から身を起こした。

隣で眠っているアラクセイトはそれに気づいた気配もない。
当然の結果というものだった。
実のところ、途中で気づかれたら困るということで、ソラミイノは就寝前、アラクセイトに数種の果実酒を勧め、飲ませていた。甘く口当たりがやわらかいため、そうとは気づかないがけっこう酒度の強いものばかりだ。
おかげでアラクセイトは熟睡しまくっている。
狙い通りというやつだ。
（あとは、イイタールの子供たちに頼んでた、ちょっとした小火騒ぎだけど……カーラさまたちがいらっしゃったら、いくらなんでも絶対無理だったろうけど、なんだか用事があるとかってことで、おふたりとも隣街に出掛けてくださったのは幸運だったわ……というか、それもあったから今夜に決めたんだけど）
イイタールの子供たち――炎霊には、屋敷の敷地の一部で、『不審火』を起こして欲しいと頼んでいた。
あくまで自分が屋敷を抜け出すための囮なのだから、ひとはもちろん、植物も含め、生命あるものの犠牲の出ない形で頼んである。
ただし、完全な不審火でも、管理を任された人物が責任を問われるかもしれないということで、そうではないと証言する目撃者も用意してあった。

なにしろ広すぎるぐらいに広い屋敷のことだから、ひとの住んでいない一画もある。そこに突然、空を切り裂くように炎そのものが降り注いできたとしたら……？

屋敷内は、一時とはいえ騒然とするだろう。

その隙を狙って家出する、というのがソラミイノの計画だった。

我ながら、計画の甘さには気づいていた。より大きな効果を狙うなら、やはり一族が寝起きする場所へ攻撃するに越したことはないのだ。

けれど、それでは人命が損なわれる危険性が大きい。

陽動が陽動だとばれてしまっては元も子もない。けれど、他の命を損ないたくはない。

結果的に絞った先が、今回の標的だった。

ひとは居住していない——けれど、実に燃えやすい財産……木彫りやら絵画といったものだ——が集中している場所。

それが、イイタールの子供たちに指示した的だった。

（うーん……かなり、けっこう心苦しいけど……でも、こうでもしないと抜け出せないんですものね）

自分にそう言い訳しながら、ソラミイノは暗闇のなかで着替え、とっておきの隠し場所からまとめた荷物を引きずり出した。

遠くで、声が聞こえる。

それに応じるように、自分たちがいるこの棟から、警備の男たちが離れていく――消火活動を手伝うために。

（うん、よし、予定通りだわ）

ころ良し――と見計らい、ソラミイノは動いた。

すべては計画通りだと……思った。

計画は順調、あとは予定通りにやるばかり――。

離れで起こった火事のため、消火活動に駆り出された警備の者たちの目を盗みに盗んで、ソラミイノは屋敷の敷地のある一画にたどりついた。

記憶が正しければ、そこには敷地の外へ通じる抜け穴が存在するはずだったのだ。

もちろん、暗殺の危険にさらされ慣れている一族のことだ、そんな穴を見つけたが最後、塗りつぶすに違いないのだが、偶然――地震かなにかで――できたそれを、最初に見つけたのが、空神パルムローリの加護を受けた者だったために、そこには完璧なめくらましがかけられていた。

なんのことはない、何代前になるのかもわからない第一発見者自身、息抜きのために屋敷か

ら抜け出す穴をこっそり確保し、代々伝えてきたというわけだ。
それをソラミイノに教えてくれたのは、ワレンアイノだった。
もっとも、正確な場所までは教えてくれなかったけれど。
それでも、ソラミイノは幼いころに、その場所を突き止めていた。
そして、数日前にも、一応散歩のふりをして、下見はしておいた。
穴は、存在したままだった。
だからこそ、今夜のこの家出を決行したというのに……！
問題の場所にたどりついたものの、ソラミイノは呆然としていた。
「うそ……」
ないのだ……というか、見当たらないのだ。
このばりばりに結界の張られた屋敷から抜け出せる、唯一の道であるはずの穴が！
「そんな……ここまできて……こんな騒ぎまで起こして……どうして……!?」
これが唯一にして絶対の機会だというのに!?
驚きと衝撃で、青緑の双眸を大きく瞠り、両手で口許を覆った彼女に、声をかけてきた者がいた。
「ミイノったら、ほんと、水臭いんだから……」
声のしたほうを振り返ったソラミイノは、自分と同じような小ぶりの荷物を背負ったアラク

セイトの姿を認めた。
信じられなかった。
思わず「どうして!?」と問いかけた。
「どうしてって……聞かれても。単なる勘だけど、ミイノ、終始落ちついてたし、お兄さんのことすんなり納得したみたいにしていたし……？」
だったら尚更、自分のこの行動は読めなかったはずだ、と追及するより先にアラクセイトが笑った。
「だって、ミイノ、お兄さんのこと、ほんとにとっても好きみたいだったし、なのに周りの意見にすんなり同意してたし……ミイノは自分のことだから、そういうとき、どう反応するかとか、わかりっこないって思ってるかもしれないけど……でも、実のところは、わかりやすかったりするんだよ？　絶対、なにか企んでるって……そこになにがあったのか、わたしは知らないけど、でも、知ってるひともそう判断したんじゃないのかなあ？　でね、提案なんだけど、わたしがこの間貰ったお見舞いの青玉、欲しくない？」
それは、先日、アラクセイトが巻きこまれた騒ぎに対する代償として、巻きこんだ元凶の師匠とでも呼ぶべき青年がよこしたものだった。
矢車菊を思わせる、極上の青玉を抱いて生まれてきた青玉の使徒が生み出した、極上の……聖石の子供石。

そのたたえる色は青――木気……風を司る、青。

その石を用いれば、風霊に頼んで、この屋敷から連れ出してもらうことも可能なのだ。

「提案ってことは、なにか条件があるってことよね……？」

部屋でぐっすり眠っていたはずのアラクセイトが、ちゃっかり先回りしていたことには驚いたが、彼女が小振りの荷物を背負っていたことには……不安を覚えた。

だから、慎重に尋ねることにしたのだ。

はたして、アラクセイトはにっこり笑って「さすがミイノ」と返してきた。

「あのね」

と、言いかける親友の機先を制してソラミイノは告げた。

「言っておくけど、一緒に来るってのはなしよ。わたしは個人的な理由で家出するんだから……」

あんたを巻きこむことはできないわ――。

そう言いかけて、彼女は言葉を変えることにした。そんな言い回しでは、アラクセイトの気を変わらせることができないことに気づいたのだ。

「あんたみたいな暴発爆発娘、一緒に連れていくのは御免なの。歩く目印つけてるも同然なんだもの。なによりあんたの暴走のせいで、罪もないひとに迷惑かけたりしたら申し訳なさ過ぎて泣くこともできやしないわ」

だから、あんたはカーラさまたちのそばで、おとなしく修行してなさい。
きっぱりと言い切ったソラミイノに、アラクセイトはしかし堪えた風もなく――意外と言えば意外だった、彼女がそのあたりのことを気にしていることを、ソラミイノは誰より一番知っていたからだ――けろんとして答えたのだ。
「暴走なんて、しないよ……もう」
素直に信じるには難のありすぎる発言だった。
「なんの根拠があって言ってるのか知らないけど……」
信じるわけにはいかないわ。
あくまで巻きこむまいというソラミイノの想いを知ってか知らずか――あるいはわかるからこその真剣さなのか……黄橙色の双眸に、真摯な光をたたえて、少女は告げた。
「本当に、大丈夫なんだってば。絶対イイタールの子供たち、暴走させない必殺技、カーラさまに教えていただいたんだから」
単に教えてもらっただけではなく、すでに効果のほどを確認したような余裕というか安堵の気配を感じ取り、ソラミイノは、いまはそばにいない師匠たちを恨みたくなった。
（カーラさまもセイさまもっ！　そういうの、あるんならもっと早くに教えてもらいたかったって言うか、よりにもよってこんなタイミングで教えてほしくなかったというか……）
けれど、やはり、ここは退けないのだ。

なぜとはっきり説明することはできないのだけれど、目の前の親友を、この騒ぎに巻きこむことだけは、絶対に避けるべきなのだと……心のどこかから声が聞こえてくるのだ。

「アーク……だからね」

なんとか相手を説得しようとしたソラミイノは、先程とは逆に、親友にしてやられることになった。

彼女の知る親友とは思えない、とんでもない脅し文句を口にしてくれたのだ！

アラクセイトは、懐からなにか小さなものを取り出し、星明かりの下で、それをかざして見せたのだ。

それがただの貴石や宝石であったなら、ソラミイノにも正体を知ることはできなかったろう。だが、聖石の子供石ならではの、目には見えぬ力の輝きは、感知能力に長けた彼女の目にははっきりと見て取れたのだ。

（薄紅の……金剛石……っ！）

火気……炎に通ずる色彩をたたえた、最強にして最高の、『炎の媒介』となり得るモノ。

「ここで、これ、イイタールの子供たちにお願いして、燃やしちゃったら、どうなるかな？ね、ミイノ、もう一度聞くけど、わたしが以前いただいた青玉の子供石、欲しくない？　っていうか……必要じゃない？」

（この……腐れ神童……っ！）

常であれば、決して脳裏にも浮かべないような、下品で下賤な罵倒語を胸中で洩らしながら、ソラミイノはアラクセイトを睨みつけた。

けれど、いつまでもそうしてはいられないのも事実だった。

時間は刻一刻と過ぎていく。

今回失敗してしまったら、恐らく二度目はない。

苦いものを無理やり飲み下す思いで、ソラミイノはアラクセイトを見つめた。

「一度でも、イイタールの子供たち、暴走させたら……なに言われたって絶対、絶対、見捨てて置いていくわよ？」

本当なら、もっとひどい言葉を用いてもよかったはずなのだけれど……結局そこまでは口にできなかった。

（結局……なんでだか、わたしはこの子に甘いのよねえ……）

そんなこんなを思いつつ、取り敢えずうなずいたソラミイノに、アラクセイトはほっとしたような笑みを返し、「うんっ！」と力答した。

まるで子犬のようだ、と思った。

6

イーオダールの子供たち――風霊たちの力を借りて、旅支度したアラクセイトとソラミイノが、まんまと屋敷を抜け出した様子の一部始終を、遠くから観察する二対の瞳があった。

ひとりは黒髪の美女――黒珊瑚の使徒であるカーラトーニ。

もうひとりはその相棒にして、血赤珊瑚の使徒に選ばれたセイタマールである。

その夜、「調べる必要がある」との理由で、ソラミイノの実家である屋敷を離れていたふたりは、弟子の少女ふたりの、無謀で乱暴な脱出劇を、気配が悟られない程度の距離をおいた場所で見守っていた。

「……無事に、抜け出したようだね」

ふう、と息をつきながらつぶやいたのはカーラトーニだ。

「まあ、大丈夫だろうとは思ってたけど……ソラミイノがあんな手に出るとは、ちょっと驚いたね。さすがにイイタールの加護を受けてるだけあって、なかなか過激な性格をしてるみたいだ」

くすくす笑いながらの彼女の言葉に、セイタマールは小さく肩をすくめた。
「意外だというのなら、アラクセイトのほうも相当だと思うが？　まさか、あんな脅し文句を口にできる性格だとは思わなかったが……」
そう言いかけた青年は、なにか思いついたように、ふっと相棒の美女に目を向けた。
「お前の入れ知恵か？」
「なんのことだかね」
惚けながらも、カーラトーニは笑いをおさめない——認めているも同然だった。
ただし、そこで会話が途切れたわけではない。
「バランスの問題だよ。いまのソラミイノはひとりにしとくべきじゃない……本人、冷静なつもりらしいけどね、本音の部分じゃぐらぐらに揺れまくってる。下手したら、あっち側に取りこまれちまうよ」
あちら側という言葉に、セイタマールが眉宇を震わせた。
「……ならば、閉じこめてでも、外に出さないほうが良かったんじゃないのか？　知れば……お前の危惧通りにならないとも限らない……」
「馬鹿、お言いでないよ。火の宮に生まれ、火神の加護を受けた娘だ。気性は激しいに決まってる。そんな娘をいつまでも閉じこめておけるわけがないだろう？　よしんばそうしたところで、早晩今夜よりずっと手荒な方法で飛び出したに違いないよ」

おまけに、イイタールの娘がいるんだもの、止められっこないよ――。

くすくす、くすくすと、本当に愉快そうにカーラトーニは笑った。

そばに立つのは、反応に困った風情の赤い髪の青年――。

「確かに、アラクセイトが協力すれば、今夜以上の大騒ぎは確実だろうが……しかし、本当によかったのか、あんなに未熟なまま放り出すようなことをして？」

アラクセイトの修行は、なかなかに難航中で、その能力の制御も、完全とは言いがたいものだった。

それを知るからこそ、セイタマールの表情は優れないのだ。

しかし、その相棒は気にする様子も見せない。

「かまやしないさ。あの娘の記憶が戻った時点で、本当なら修行は終わってたはずなんだから……まあ、よっぽど怖かったのか、力の使い方までは思い出せなかったようだけど、瓢箪から駒みたく、前回の騒ぎでしっかり思い出してくれたみたいだしね」

と答えるカーラに、当惑、と顔に書いてセイタマールが尋ねた。

「あの後も、暴走癖はやまなかったように記憶してるんだが……？」

「あたしらが連れ出したころは、力の使い方全部忘れたも同然だったせいで起こった暴走だった。途中からは、思い出しかけた段階での暴走……でも、規模はさして変わらなかっただろう？　制御できてる証拠さ。ただし、まだ経験が圧倒的に足らないもんだから、被害が周囲に

及んでるってとこはあるけどね。でも、大丈夫だよ」

余裕たっぷりのカーラの言葉に、セイタマールはますます困惑したように顔をしかめた。

「……天災に匹敵する人災を世界に放り出したような気がするのはおれの気のせいか？」

気のせいか――と言いながら、セイタマールの双眸には剣呑な殺気が宿り始めていた。

そんな相棒の両頬に、びたんと平手を見舞ってから、カーラは告げた。

「なーに、考えてんだか……。いつまで昔の悪い癖、引きずってるんだい？　可能性は可能性に過ぎないし、そうはならない確率だって現実に存在するんだって、あんたもあたしも身を持って知ってるはずだろう!?　あたしは、パルムローリ神殿の時視の巫女が予言したような、喪月神の愛娘にはならなかった。予言なんてものは結局、可能性のひとつに過ぎないんだよ。まあ……一応神殿に属してる以上、時視の巫女の神託には従わなきゃいけないってのはあるにしてもだ、よ……？」

そこまで一気に言い切って、カーラトーニは相棒の髪をさらりと指で梳いた。

「あたしら自身が生き証人じゃないか。巫女の予言は絶対じゃない……そして、絶対じゃなくなるようにあたしらが祈ったところで、それは責められることじゃない。だって、そうじゃないか？　あたしらだって、結局人間なんだから……さ」

見ているだけで切なくなるような瞳で、かつて一度神敵となる未来を予見されたがために暗殺者の刃にさらされた使徒はささやきかけた。

「……そうだな」

と、答えたのは、彼女に出会う以前、一度として時視の巫女の言葉を疑ったことのない、暗殺者として生きていた青年だった。

殺される者と殺す者として、出会ったふたりは……いま、ともにある。

それは小さな奇跡かもしれないが、この先二度と生じ得ないそれとは断定できない大きな可能性――。

「そう……かもしれないな」

考えこんだ後、そうつぶやいたセイタマールに、カーラはこの上なく華やかで、この上なく嬉しげな笑顔で答えた。

「そうだとも」

脅迫まがいのことを言って、ソラミイノに同行するのを許してもらいはしたものの、アラクセイトはかなり居心地の悪い気分を味わっていた。

（そりゃあ、無理やりついてきたみたいなもんなんだから、邪魔にされても仕方ない……とかは思ってたんだけど……）

わかってはいるのだ。

あの夜、あの時は、ああするしかなかったのだ。

でなければ、ソラミイノはアラクセイトの同行を許さなかっただろうし、アラクセイトは絶対に、親友をひとりで『家出』などさせたくなかったのだから。

（まあ、わたしの場合、家出とは言えないんだけど……）

でも、どうしてもイヤだったのだ、一度行方不明となり、五年の時を経て不思議とともに戻って来ながら、再度姿を消したそのひとを、ソラミイノがたったひとりで捜しに飛び出してしまうのは。

不安だった……いや、怖かったというほうが正確かもしれない。

絶対に、ひとりで行かせてはいけない、と思った。

だから、相手が怒るに違いないとわかっていたにも拘わらず、以前カーラトーニから教えてもらった『脅し文句』なるものも使ってみた。

効果のほどは覿面で、おかげでいま、一緒にいられるのだけれど……ソラミイノの怒りは相当に、深い。

それこそ、全身に棘が見えるようなありさまなのだ。

かろうじて、無視はしないでいてくれているのだが、口から飛び出す言葉という言葉のことごとくには、丹念に棘がまぶしてあるし、それがまた、いちいち的確にこちらの急所を突くも

のばかりなものだから、胸がずきずきと痛んで仕方ない。
けれど、それ以上にアラクセイトが痛いと感じたのは、ソラミイノの様子だった。
五年ぶりにようやく再会した兄が、また姿を消したのだ。
必死になるのはわかる。
けれど、その必死さに、鬼気せまるものを感じてしまうのだ。
なにかに引き寄せられるかのように——あるいは追い立てられるかのように……ソラミイノはただ南へと向かう。
なぜと尋ねても答えてはくれない。
尚も突っこむと「戻ったら？」の一刀両断攻撃だ。
これはきつい。
だが、アラクセイト自身、ここで退いては駄目だということがわかっていた。直感していたと言うべきかもしれない。
同時に、深い自己嫌悪を覚えていたのも事実だった。
原因は、彼女の料理の腕……というか、段取りのできない不器用さだった。
行方不明となったワレンアイノの気配をたどるべく、ソラミイノは屋敷を出て三日ほど、それにのみ集中していた。
立ち寄れる街があれば、適当な食事を出す店に入って、それで用は足りていた。

問題は、自炊するしかない日のことで——。

出汁の取り方は知っていても、効率的にするやり方までは知らないアラクセイトは、乾物の扱いに不慣れで、ようやく出汁がとれた頃には——翌日のことも考えて——眠る時刻になっていた……というのも珍しくはなかったのだ。

栄養補給できないのは問題だと、彼女が次にやったことは、出汁なしの煮物や吸い物というものだった。

この食事に、ソラミイノは反応を示したわけである。

絶食に関しては全然気にもとめないくせに、出てきた食事の味にはこだわるというあたり、育ちというか、性格も含め、さまざまなものが見えるような気もするのだが……出汁もなにもきいていない、根菜の雑炊もどき——味付けに使ったのは塩だけだった——を口にした彼女は、翌日から料理担当を引き受けた。

曰く。

「あんたに任せてたら、人間の食べられる食事、出てこないんですもの」

だったが、心当たりのありすぎるアラクセイトに、反論の余地はなかった。

そういうわけもあって、盛大に落ちこんでいた彼女だが、このあとすぐ、その問題からは解放された。

正確には、落ちこんでなどいられない事態が持ち上がったのである。

いったい、なにが起こったのかと言えば……だ。
夢を、見たのだ。
とびきり不穏で剣呑な……『ただの夢ではないとわかる』夢を。

それは、五年ほど前に一度だけ見た夢に酷似していた。
夢と現を繋げられ、命を奪われそうになった……あの『夢』と。
アラクセイトは思わず身震いした。あのときの体験は、思い出して楽しいものでは決してなかった。それどころか、あまりの恐怖と緊張に、覚えていることを放棄するぐらいにすさまじいものだったのだ。
（イヤだ……）
反射的に、見たくないと思った。
けれど、夢だとわかっている夢ならともかく、イヤだからといって内容を切り換えられるたぐいのものでもない。
（イヤだ……イヤなのに……）
それは、無理やりに目に入ってきてしまう。

違う。目を閉じても脳裏にしっかりとその光景が浮かんでしまう——そんな感じだった。
あのときのような脅威は感じられない。
あの夢のなかで、自分をじわじわといたぶり、命を奪おうとしたモノの気配は感じ取れない。そう……そこだけは、はっきりと違う。
似ているけれど、同じもの……夢ではない。
それは、わかる。
けれど、心臓をしめつけるほどの恐怖と不安は同じだった。
（なぜ……なんで……？）
自問しても、答えは出ない。
なぜならアラクセイト自身が、恐ろしさに身を竦め、その正体を見極めようとしていなかったからだ。
ただただ目を背け、見ないようにすればするだけ、それは克明な輪郭をあらわにしてくる。
（ヤだってば……こんなの、見たくないって……っ！）
そう思っているのに、まるで見せつけるかのように、それは段々はっきりしてくる。
着色する以前の箱庭を思わせる、土色の凹凸と輪郭を示す……不可思議ななにか。
それがどんどん小さくなっていく。
遠ざかるひとが、小さくなっていくのと同じだ。

遠くに離れれば、大きすぎて見えなかったものも見えてくる。
まさにその原理なのだと、夢のなか、アラクセイトは悟った。
けれど、このときはまだ、自分がなにを見ているのかはわからなかった。
作りかけの箱庭のようなこれが、なにを意味しているのか、このときの彼女は理解できなかったのだ。
ただ、不吉で恐ろしいものだという直感だけがあった。
だから、彼女はその先を見たくなかった。
本当に、心から、見たくなどなかったのだ。
それはなぜなのか――。
ほどなくアラクセイトは悟ることになった。
緑も青も見えぬ、ただ土一色のその箱庭擬に存在する、高低差による輪郭が、彼女の見知ったものと合致することに気づいたせいだ。
それは……神殿所蔵の地図に描かれた七つの大陸のひとつ。
アラクセイトが生まれ育った豊珠の輪郭そのもので――恐ろしいことに、そこには海も緑もなにもなかったのだ！
あるのは、ただ土と岩だけの大地。
しかも――そのただなかに、微笑むひとりの少年だか少女だかの姿が見えた。

生の気配の絶えたそこに、ただひとり、悠然と、満足げにたたずむその人物の髪は月光のごとき銀、瞳もまた同じ色彩をたたえていた。

（喪月神……!?）

アラクセイトは思った。

けれど、次の瞬間、そうではないことに気づいた。

わかってしまった。

夢のなか、アラクセイトは空気にも等しい存在として、そこを……世界を見ていた。

なのにその人物は、そんな彼女に気づいたように、ふっと目を上げ、こちらを見返してきたのだ！

彼女を真の恐慌状態に陥らせたのは、その人物の顔だった。

髪の色が違う。

瞳の色も違った。

それでも、見間違うはずがなかった。

（あの顔は……あれは……）

反射的に悲鳴をあげていた。

恐ろしい悪夢のなかで見たその顔、姿――。
それは、毎日といっていいほど、鏡や水面で目にする見知りすぎた顔。
アラクセイトのそれであったのだ……！

7

ソラミイノは苛立ちを持て余していた。

家出を決行したときから、その感覚は常に彼女の胸に根を据えており、ことあるごとに心をかき乱すのだ。

しかも、対象となるのがアラクセイトに限定してのことと気づけば、それとは別に、不安などというものもついてくる。

アラクセイトとともにいることが、とんでもない間違いのような気がしてしまうのだ。

なぜだろうと考えても答えは出ない。

これが、瘴気絡みのことであったなら、あっさりと見当をつけることもできたろう。なにしろアラクセイトはかつて、喪月神に命を狙われ、攫われたことがあったのだから。

自分の向かう先が、もしもそうであるのなら、そこは親友にとって非常に危険な……危険すぎる場所ということになる。

だが、そうではないのだ。

（わたしはただ、お兄さまを捜しているだけだわ……）

手掛かりもなにもひとつとてない……ただ直感に導かれて移動しているだけの……捜索とも呼べない行動だけれど、彼女にはなぜか、自分が確実に求める相手に近づいている確信があった。

兄は……ワレンアイノは、月神の加護のもと、死の淵から戻ってきた奇跡のひとだ。

行方知れずとなった五年前の姿のままとはいえ、彼が彼であることに変わりはなく、そして彼は力を得ている——月神の力のひと雫を。

ひとの身に、神の力を与えられることが、必ずしも幸福ばかりを意味するとは限らない。ひとの世にはひとの世の理や論理、都合があるもので、今回の兄の失踪は、それに深く結びついていることをソラミイノは知っている。

けれど、それはそれ——のはずなのだ。

アラクセイトには関係ない。つまりは、彼女の同行に、こうも不安や苛立ちを覚える道理がないということなのだが……なぜか、ソラミイノのなかで、日に日にそれらは大きく膨れ上がっていく。

（まあ……そりゃあ、アークのくせにわたしに脅しかけたときには「こいつ！」とか思ったものだけど……）

それは別段、アラクセイトのことを見下しているからの思いではない。

ソラミイノは、アラクセイトという少女の性格を、イヤというほどに理解している。
素直で正直で頭はいいが、馬鹿だということをだ。
あと、自分自身の持つ能力というものに対する自覚がほとんどない。
非常に困った、だが愛すべき性格の少女に対して、どうやら自分はいつの間にか、保護本能を刺激されていたらしい。もちろん、親友がそれだけの存在ではないことも、尋常ならざる能力者であることもわかってはいたが、性格の面では、どうにも放っておけない子供だと、思いこんでいた節がある。
だからこそ、そんなアラクセイトが自分に向かって脅し文句を口にしたのが驚きで、癇にも障ったのだ。
（もちろん、誰ぞの入れ知恵なんでしょうけどねっ！）
それが誰かも、いまのソラミイノならわかる。
カーラトーニかセイタマールだ。ほかには考えられない。
つまりは、ソラミイノの決死の覚悟であたった家出作戦の成功は、師匠たちのお目溢しあって初めて実現したものにすぎなかったというわけだ。
（タイミングがいいなあ、とかは確かに思ったけど……まさか、全部お見通しだったなんてね……役者が違うっていうか、なんというか……）
掌の上で踊らされていたような気がして、純粋に悔しい。

それをアラクセイトにぶつけるのは間違っているとは思うのだけれど……。

（でも……ねえ。なんか……もう、理屈じゃないんだけど、ぽややんなこの娘の顔見てると、なんだか苛めたくなるというか……一喜一憂するさまが、あんまりあからさまで見てて楽しくなるというか……）

そこまで考えて、ソラミイノはふるふるとかぶりをふった。

いけない。どうも、これはよろしくない傾向だ、と思った。

いつもの……少なくとも、カーラやセイたちと一緒に過ごしていたあのころならまだしも、いまは、これはよくない。

ワレンアイノへの心配や不安をかき消すために、アラクセイトに負担をかけている。それは八つ当たりであると同時に、依存に通じる行為だ。自身の精神を安定させるために、親友を利用しているに等しい。

やっぱり、これではいけない——とソラミイノは思った。

なにを思って、カーラたちがアラクセイトを同行させたのかはわからないが、このままでは自分はどんな暴言を、親友に吐いてしまうかもわからない。喜々として相手を傷つけるような態度を取ってしまう瞬間が、確かにあることを自覚しているのだから尚更だった。

（戻ればって、何度も言ってるのに聞き入れやしないし……だったら、やっぱり置き去りにするとか……？）

人通りの多い街中で、さりげなく撒いてしまうのはどうかと思い、しかしソラミイノはすぐに別の問題にぶつかった。

迷子になったアラクセイトが、はたして無事にすむかどうかである。

もちろん、彼女がすぐに最寄りの神殿に駆けこめば問題はない。

だが、そうしなかったときは……？

アラクセイトは馬鹿だが、頭は悪くないのだ。ソラミイノが家出中だということもしっかりはっきり把握している。そして、自分が同行者として手配されているだろうことも、彼女はわかっているに違いないのだ。

そんな、家出の片棒を担いだ人間が、連れとはぐれ、迷子になったからといって最寄りの神殿にでも駆けこもうものなら、家出娘の足跡をわざわざ教えるようなものであることに、彼女が気づかないはずがない。

だとすれば、どうするのか——。

もう、片っ端から宿のたぐいを尋ね歩くに決まっている。いや、それはそれで情報として神殿や一族に伝わってしまうかもしれないから、情報収集には知恵を働かせるかもしれないが……そうだとしても、だ。

ひとりで歩き回るには、アラクセイトは目立ちすぎる。

本人、自覚はないようだが、アラクセイトという少女は、煤で汚れていたりしなければ、印

象的な黄橙色の双眸といい、珍しい紫紺の真っ直ぐな髪といい、目鼻だちや唇の形といい、そこそこ以上の美少女ではあるのだ（ソラミイノも棚にあげているが、彼女自身もその範疇に入る）。

なまじ、神殿では外見の美醜には捕らわれないような教育がなされた上、ここしばらくというもの、極上としか呼べない美女の師匠と顔をつきあわせていたものだから、アラクセイト自身に、その手の危機感は皆無に違いない。

だが、現実的に見れば、彼女はれっきとした印象的な美少女で、しかも石墨とはいえ、聖石の子供であることに違いはないのだ。そんな少女が、神殿に関わることを避けて、こそこそと情報収集に勤しんでいるなどという情報が流れたら……。

裏稼業に手を染めた輩どもの目に、どう映るのか——。

考えるまでもない。

大きく口を開けた狼たちの群れのなかに、羊を放り出すようなものだ。

ぶるり、と身震いしてしまったソラミイノだった。

（それは、却下だわ……）

聖石の子供はまず例外なく神殿の保護下に置かれる。

使徒に選ばれなかった者にしても、神殿は困った際の保護、保証を約束している。

そうしなければ、あまりにも特異で有益な力を持つ彼らは、権力者や悪しき欲望を抱える者

たちに、簡単に餌食とされてしまうからだ。
神殿に駆けこめない事情を持つ『聖石の子供』など、恰好の餌というものだ。
（だから、それはなし）
とは決断したものの、では、どうすればいいのかとソラミイノが、ひとりさっさと丸まって眠ってしまったアラクセイトに目を向けたときのことだった。
（こっちの悩みも知らず、ほんとに呑気なんだから……）
平和な寝顔を目にしたとたん、思わず「殴ってやろうか」と思ったソラミイノは、しかし、その直後、親友の身に起こった異変に気づき、顔色を失った。
どんな夢を見ているのかは……わからない。
だが、眉宇をひそめたその表情から、あまり気持ちのいい夢ではないのだろうと彼女が見当をつけたころ——だ。
信じられないことが、起こった。
アラクセイトの全身が、淡い銀色の光を放ち始めたのである。
それは、瘴気ではなかった。
瘴気の持つ不浄の気配はかけらとて感じられなかった。
だが、だからといって、見過ごしにしていい事態ではなかった。
「アーク!?」

呼びかけたが、紫紺の髪の少女は目覚めない。
ただ、その顔を苦しげに歪ませただけだ。
「アーク！」
ただごとではないと、気づいてソラミイノは親友に近づき、その肩を揺さぶった。
それでも少女は目覚めない。
そうこうしているうちにも、彼女の全身から放たれる銀色の光は、その度合いを強めていく……徐々に、けれど、決してゆっくりとはいえない勢いで！
「アーク！　アーク、どうしたの!?　目をさまして……お願いだから！」
必死になって、ソラミイノは親友の肩を揺さぶった。
本能的な恐怖が、彼女の全身を支配していた。
銀色の光――間違うはずもない、月神の力を帯びたその光……力。
悪しきものではない。
直感で、わかった。
けれど同時に、それは善きものでもないと――少なくとも人間の身であるアラクセイトにとっては、善きものではないと、ソラミイノにはわかった。
そして、その事実に、彼女は震撼する。
（神気と瘴気はまるで違う……全然、違う。けれど、どちらの気も、ひとの身の負担となるこ

とに変わりはない……そういう意味での違いは、ないのだわ……）

その思いは、ほんの一瞬、彼女の意識をかすめただけのものだった。

すぐに消え、だから彼女は目の前の、恐らく夢に苦しんでいる少女に集中することになったのだけれど――。

「アーク！　目を覚まして……！　いったいなにが起こったというの……!?」

揺さぶって――けれど、紫紺の髪の少女は、夢に捕らわれてしまったかのように、かたくなまでに瞼を開けない。

「アーク！」

叫ぶソラミイノの表情からは、すでに余裕めいたものは消え失せていた。

こうしている間にも、アラクセイトから放たれる銀光――いや、違う……月光は眩さを増していくばかりだった。

「アーク！　アークったらっ！」

最後のほうは、怒鳴りつけていた。

それでも少女は目を開かない。

「アーク！」

ソラミイノが悲鳴をあげた、まさにそのときだった。

第三者の――聞いたこともない低い声が降ってきたのは。

「ちょっと、黙れ」

それは、男性の声だった。

いったいどこに――と思い、ソラミイノが周囲に目を向けたとき、見つけたのは、声が……大声ででもなければ届かないような場所から、真っ直ぐにこちらに歩いてくる青年の姿だった。

あの声は、彼だろうか――思って、即座に否定する。

そんなはずはなかったからだ。あんな遠くから、彼の声が聞こえるはずがない。少なくとも、聞いたと……聞こえたと思った声は、怒鳴り声でも叫び声でもなかったのだから。

だが……だとしたら、あの声の主はどこにいるというのだろう？

アラクセイトの尋常でない様子のこともあって、ソラミイノは半ば恐慌状態に陥っていた。

だからこそ……といっていいのか、彼女は近づいてくる青年から目が放せなかった。

その髪は漆黒、その双眸は半月の夜のような灰銀色――。

（だれ……？）

と一瞬自問し、しかしすぐに思い出した。

一度だけだが、会ったことのある……ただし、印象最悪の相手だと気づいたのだ。

だが、そんな彼女の胸中にはかまわず、青年はなにか礫のようなものを、指で弾いた……彼女のすぐそばに、それが埋まるように。

とたんに、胸のなかの不安が小さくなった。

（なにを……？）

彼はしたのか——思っているうちに、彼は二個目の石を指で弾き、今度はアラクセイトのそばに埋めた。

アラクセイトを包んでいた月光の気配が、また弱くなる。

三個目でまた弱くなり、四個目ではほとんど感じられなくなった。

五個目の小石が地面に埋まった瞬間、アラクセイトから放たれていた月光は完璧に消え失せていた。

五芒結界——五点に力の集中する媒介を置くことで、聖邪の区別なく守るべき人物を尋常ならざる気配から遠ざける技である。

ただし、その術は困難この上ないものとされている。

なぜなら、それを可能とする媒介が、この地上ではほとんど入手不可能とされているものであったからだ。

「あなた、ガネル。いったい、なにをしたの……？」

しっかりとアラクセイトの体を抱きしめながら、ソラミイノは尋ねた。

「さあな」

というのが答えだった。

「ただ、いまそいつにこびりついてるのは、よくないものだ。ああ、あんたにもこびりついてるな。だから、払いのけてる。それだけだ」
「なぜ、そんなことがわかるの？」
たずねたソラミイノに、ガネルは困ったように首をかしげる。
「わからないさ。ただ単に、イヤだろうなって感じるから追っ払ってるだけで……」
だけど、これも独りよがりかもしれない——と、青年はつぶやいた。
「なにが、どれが正しいのか、おれは……俺の師匠も含めてわかっちゃいないからな」
だから、自信がない……そう青年がつぶやいた、まさに直後のことだった。
ソラミイノが抱きしめていた、アラクセイトがふっと目を開けたのだ。
「アーク!?」
思わず、諸事情も忘れ、ただひたすらに彼女の無事を喜び、抱きしめたソラミイノに、アラクセイトは力いっぱい抱き返し、そうして心底ほっとしたように、こう答えたのだ。
「ありがとう……ありがとう、ミイノ！　ミイノが起こしてくれなかったら、わたし……わたし、あっちに捕まって、持っていかれてた……！」
と——。

8

あの恐ろしい夢から解放され、ほっとしたのも束の間、アラクセイトはすぐそばに、ここにいるはずのない青年の姿を見いだし、思わず叫んだ。

「な、な、なんでっ!?　いったいどうして、あなたがここにいるんですかぁっ!?」

行儀悪く、相手を指さしながらの問いに、ガネルは仏頂面でこう答えた。

「助けてもらった相手に向かって、礼を言うより先にそうくるか？」

自分の失礼さを指摘され、一瞬言葉に詰まってしまったアラクセイトだが、意外にもソラミイノが援護してくれた。

「お礼なんて、言う必要はないわよ、アーク。あなた、そのひとのせいで、危うく死にかけたんだから。悪いことしたのに謝りもしない人間に、礼を言われる権利なんてないもの」

正論だった……が、なんだか棘のまぶしかたが念入りだった。

「ミ、ミイノ……」

しかし、ガネルも負けてはいなかった。

「あれは……確かに悪かったと思ってるが……それは、あんたに指摘されるようなことじゃないだろう。第三者の口出しは、事態を複雑にするだけだと知らないのか？」

「あら？　謝りもしないうちに、礼だけは欲しがるなんてひとに、どうこう言われたくはないわね。第一、なぜあなたがここにいるのか、聞きたいのはわたしも同じだわ。あの見目麗しいお師匠さまは助かったんだから、もうアークにかまう必要はないでしょう？」

邪魔よ、邪魔――手を振って追い払いかねないソラミイノの態度に、ガネルが少しだけ傷ついたような目をしたのに気づいて、アラクセイトは困惑した。

（なんか、なんか……ミイノってば、実はどっか痛いところ突いちゃったとか……？）

別にガネルに好意など抱いてはいないが――なにしろ、誘拐されて、風邪ひかされて、さらにはそれを悪化させられて、肺炎を起こして死にかけたのだ、アラクセイトは――なんだかそこをさらにつつくのはよくないような気がして、彼女は話の矛先を変えることにした。

「あ、あのっ！　助けてくれたって話ですけど……なに、してもらったんでしょう？」

正直なところ、なにが起こったのかもわからずにいるのだ。

そんな彼女に、ソラミイノとガネルオージェは、呆れたような目を向けた。

「覚えてないの!?」

「わかってないのか!?」

と、口々に尋ねられ、アラクセイトは再び言葉に詰まった。

「え、ええっとー、物凄く怖い夢見てたのは……覚えてるんだけど……」

夢の内容も、しっかり覚えている。

だが、それと彼らふたりの反応が、どう結びつくのかは、想像もつかない。

「夢……？　どんな夢？　あなたったら、突然全身が銀色に光って、揺さぶっても大声で呼んでもぴくりともしなかったのよ!?　瘴気じゃないのはわかったけれど……あのままだったら、どうなっていたことか……」

ソラミイノの言葉を補足するかのように、今度はガネルオージェが口を開いた。

「どうなったもなにも、あのままだったら、間違いなく体ごと拐かされてただろうよ。師匠から、聞いたことがある。あんな風に全身が銀光に包まれて、ついには体ごと消えた子供がいたらしい。二度とは戻って来なかったそうだ。そいつも悪夢にうなされてたかどうかまでは知らないがな」

その、彼の言葉には、過去の体験を思い出させるものが含まれていた。

（まさか……また……？）

そう思い、つい胸元でこぶしを握ってしまったアラクセイトを気づかうように、ソラミイノが声をかけてきた。

「アーク、違うわ。あれは瘴気じゃなかったわ……わたしが保証するわ、あれは絶対に、瘴気なんかじゃなかった！」

だから大丈夫――と言い置いて、彼女は今度はガネルオージェに食ってかかった。
「あまりいい加減なこと、言わないでちょうだい。あなたにはわからなかったかもしれないけどっ！　あれはれっきとした月神気だったわ！　喪月神の瘴気とは全然違ったんだから！」
ものすごい剣幕だった。
あるいは、月神気と瘴気を一緒くたにされたことで、奇跡の生還を果たした兄のことまで疑われているように感じたのかもしれない。
しかし、ガネルオージェもそこで謝ったりはしなかった。
「喪月神だって、以前は月神だったろうがよ」
ほとんど禁句となっている事実を口にした青年を前にして、アラクセイトはなぜか、胸がどくん、と脈打つのを感じた。
「そ、それはそうだけど……喪月神となってからは、放つ気配は全然違うものに変わって……すごい瘴気で……そんな、月神気を放てるはずがなくなってて……」
そう……そのことに間違いはない。
そして、ソラミイノの感性の鋭さ、判定能力は、アスカニーリ神殿のお墨付きだ。彼女が、あれは瘴気でなかったと言うのなら、間違いなくそれは月神気だったのだ。
（でも、じゃあ……あの夢は……？）
緑も青も……生を思わせる色彩のことごとくが、取り除かれた箱庭のような、あの世界……

あの、見慣れた輪郭。

その大地にひとり、たたずんでいた銀髪銀瞳の——月神のごとき色彩に染め上げられた、あの……。

（あんな……あんな、恐ろしい夢……あれを見せたのが、瘴気じゃなくて、ミイノの言う通り月神気だったのなら……）

恐怖に、息がつまりそうになった。

それぐらいなら、幼いころに経験したような、瘴気のもたらした悪夢だったほうが、まだましにも思えた。

知らず、震えだしてしまったアラクセイトを気づかうように、ソラミイノが顔を寄せてきた。

「アーク、大丈夫？」

昨日——いや、正確に言うなら、眠りにつくまでのつんけんした態度が嘘のような、労りに満ちた口調だった。

「だ、大丈夫……」

なんとかうなずいたアラクセイトだったが、ガネルオージェが突っこむような問いを口に乗せてきた。

「それで、どんな夢見てたんだ？　確かにおれは鈍いからな、あれが瘴気か月神気かもわから

ないが、それでもその夢を見てたせいで、あんなことが起こったんだって可能性は捨てきれてないわけだろう？」

話してみろ――と言われ、アラクセイトは少し怯んだ。

そんな彼女を庇うように、ソラミイノが声を張り上げた。

「いいかげんにしてちょうだいっ！　なんでアークがそんなことまであなたに話さなきゃいけないの!?　だいたい、あなた、なんの目的で……」

ソラミイノは元々、ガネルオージェのことをよくは思っていない。

追い払ってしまおうというつもりなのは、アラクセイトにもわかった。

だから、彼女はあえて口をはさんだ。

「いい……いいの、ミイノ。ミイノの言った通り、あの夢見てるとき、わたしに憑いてたのが瘴気じゃないんなら、なおさら考えなきゃいけないことが多いと思うから。それに、夢の内容って、ひとに話すと効果がなくなるって言うじゃない？　わたし、あんなの絶対、本当になってほしくないから……話す」

事実、ひとりで抱えこんでおくには、恐ろしすぎる……重すぎる夢だったのだ。

他人に洩らすことで、夢が実現しないのであれば、聞いた相手の気が多少暗くなることには目を瞑ってでも、世界中のひとに聞いてほしいぐらいだった。

そうして、アラクセイトは夢にみた内容をふたりに語った。

語り終えたとき、彼らの表情は、冴えないどころでなく、どんよりとしたものに変わってしまっていたのだが、そのことに対してすまなく思いながらも、アラクセイト自身は少しだけ気が楽になっていて、自分の狡さに自己嫌悪を覚えた。

「……とんでもねえ夢だな」

ガネルオージェが、かすれた声で、そう感想を洩らせば――。

「ひとに話して正解だわ、そんな恐ろしい夢」

と、ソラミイノもうなずいていた。

「わたしも、イヤ……あんなの……」

そう答えたアラクセイトは、けれど不安を捨てきれない。

瘴気につけこまれて見た悪夢だったのなら、まだ救いはあるような気がする。

だが、そうではないのなら……あれは、未来、起こりえる事態とは言えないか？

（そんなの、絶対にイヤ……っ！）

けれど、どうしたらいいのかわからない。

しゃくっ、しゃくっと、なにかを咀嚼するような音が聞こえたのはそのときだった。

（え？）

と、思わずそちらに目を向けた彼女は、懐から取り出した革袋から、干し肉を摘まみ、しゃくしゃく食べているガネルオージェの姿を認め、目を丸くした。

緊張感がないと、責めるのは筋違いかもしれないが、それでもアラクセイトは、叫ばずにはいられなかった。

「あなたっ！　本当にっ！　いったい、なにしにここに来たんですかぁぁっっ!?」

傲岸不遜という言葉を形にすれば、きっとこんな青年になるに違いない――と、アラクセイトとソラミイノがそろって思うほど、図太くマイペースな人物は、あっけらかんと答えたものである。

「だから、うちの師匠から、お前、いくらか子供石もらってるだろ？　それ、多少譲って貰えないかと思って」

はるばる追ってきたのだと、ガネルオージェは白状した。

どうやら、あの騒ぎ以来、ずっと後をつけてきていたらしい。

だが、どうにもおかしい。

カーラトーニたちと一緒にいたころからのことを考えても、少なくとも風霊の助けを借りた移動は二度あった。

とても、普通に歩いたり、もしくは馬を使った移動方法では、到底追いつけるはずがないの

だ。追いつけるとしたら、やはり同じ方法を用いるしかないわけで……。

「だったら、あなただってお師匠さまの子供石、ちゃんと持ってるってことじゃないですか。なんでわざわざわたしがいただいた分まで欲しがるんです？」

だいたい、自分に頼むより、師匠である青玉と紅玉の使徒コンビに頼めばいいはずなのだ。弟子にそう簡単に譲ってくれないのだとしても、それでも本人たちに頼みこんだ方が、絶対に早いし確実なはずだった。

そういうことで、不審というか、疑問を覚えて問いかけたアラクセイトに、ガネルオージェは一瞬困ったような、居心地の悪そうな顔をした後、こう答えた。

「先だっての件で、破門されちまったんだよ」

つまり、喪月神の瘴気に捕らわれてしまった師匠を救い出すべく、当時、それが唯一可能と思われていた黒珊瑚の使徒カーラトーニを引っ張りだそうとしたものの、あえなく本人の拒絶でもって玉砕し、しかしあきらめることができず、その弟子であるアラクセイトを誘拐して人質にして、無理やりにでもカーラトーニの力を借りようとした暴挙に対する罰を与えられたというわけだ。

「まあ、当然ってものじゃないの」

と、同情の『ど』の字も示さなかったのはソラミイノだった。

目的のためなら手段は選ばないという主義自体には、あるいは共感すら抱いているかもしれ

ない少女は、しかし身近にいる、大事に思っている親友が巻きこまれ、しかも死にかけたという事実ゆえに、ガネルオージェに対する評価はひどく辛口なものになっていた。

「自業自得ってものよね」

しかも、容赦がない。

最大の被害者であるアラクセイトでさえ、つい同情的になってしまいそうになるほど、その口調は容赦なく、こてんぱんとしか言いようのないものだった。

ソラミイノがその気になれば、いくらでも辛辣な口がきけるのだということはわかっていたアラクセイトだが……それが終始向けられていた昨日までのことを考えれば、助かったという思いがまったくなかったかと問われれば嘘になってしまうが、それでもなんとなく、ガネルオージェが気の毒に思えてしまうぐらいには、彼女の毒舌ぶりはすさまじかった。

「あなたみたいなはた迷惑なやつ、よく面倒見てたもんだわよねえ。わたしだったら、絶対、絶対御免だわ。ひとの道、踏み外すにもほどがあるってものだし。ほんと、まったく匙を投げたくなるのも無理ないと思うわ。だからって、こっちに来られても尚更迷惑でしかないけど」

一片の容赦もない言葉であり口調だった。

（うわー、ミイノ、怖いよ、それは……）

と、アラクセイトが思わず突っ込みを入れたくなったほどだ。

しかし、自業自得で破門された青年は、しおらしく反省してうなだれるような性格の主では

なかった……ようだ。

「うるせえな！　おれだって、手持ちの子供石で用が足せるんなら、わざわざこんなとこまで追いかけて来たりしねえよ。誰がわざわざ、大火事起こして犯罪者の仲間入りすることになるかもしれない危険人物に近づくような真似するかよ。あんたらがふたりともイイタールの娘なら尚更だ！」

この台詞に、きょとんとしたのはソラミイノだった。

「アークはともかく、誰が、イイタールの娘なんですって……？」

（あああ、まずいっ！）

と思ったのはアラクセイトだった。

ガネルオージェに攫われて、火事騒ぎを起こしてしまったとき、「こんなことなら、お前じゃなく、もうひとりのほうを人質に取ればよかった」云々と告げられ、反射的にソラミイノも自分と同じだと言い切ってしまったからだ。

実のところ、ソラミイノは『イイタールの娘』ではない。

発火能力は持っているけれど、でも、『イイタールの娘』ではないのだ。

ただ、あの時は、そうでも言わなければ、自分とソラミイノをさっさと取り替えてしまいそうな勢いをガネルオージェに感じたものだから、少しでも歯止めになるよう、そう口走ってしまったのだけれど。

「あ、あのっ!?　それでっ!?　手持ちの子供石で足せない用事って、なに!?　なんのこと!?」
わたわたと手を振りながら問いかけたアラクセイトを、ガネルオージェはじろりとねめつけてきた。
先日の件に対する念押しかもしれなかった。
（うわあ……嘘ついたってことに気づいたのかな？　嘘ついたな、ただじゃおかないぞって……そういうことなのかな!?）
心臓が縮み上がりそうだった。
唯一の救いは、ソラミイノの問い掛けのおかげで、どうやら青年自身は、欲しくてたまらない、なにか特別な意味か力を持つ『子供石』――恐らくは紅玉と青玉だろうが――を持っていないらしいとわかったことだ。
だが、しかし。
自らの弱みを見せたがらない点においては、ガネルオージェも第一級だった。
すさまじい目つきでアラクセイトを睨みつけた後、説明もなにもなしに「いいから出せ」と言いだした。
彼女ひとりであったなら、怯えてしまって、彼の言いなりになってしまったかもしれない……が。
幸いにも、アラクセイトには最強の味方がそばについていた。

「駄目よ、アーク。こういう相手とは、じっくり話し合わなくちゃ。大体、自分の手の内は見せないくせに、こっちから勝手に好きな手札分捕ろうって態度が気に食わないわ。譲って欲しいなんて言いながら、もしかしたらだまし取るつもりだったかもしれないのだし。ほうら、顔色が変わった。そのつもり満々だったっていう、なによりの証拠だわ」

「好き勝手に自分の邪推を正当化するな！」

顔を真っ赤にして、ガネルオージェがソラミイノに怒鳴りつける。

しかし、ソラミイノは涼しい顔を崩さない。

「わたしの言い分を邪推だと言うのなら、そうではない証を立てるべきではないの？　少なくとも、真実を明かすべきではないの？　きちんと、理由を説明して、それでこちらに頼むべきではないのかしら？　それを全部抜いて、いいから子供石を見せろだなんて、どう考えたっていかさまめいたものとしか思えないわ！」

うっ、と胸を押さえたガネルオージェは、結局苦々しげに告白することになった。

自らの左手首にからまった、銀の腕輪に嵌めこまれた……罅の入った青玉と紅玉の腕輪を指し示すかのようにふるい、彼は叫んだ。

「これが理由だ！　おれは絶対に、この枷から外れたくない……！」

けれど、この枷は外れようとするんだ……。

それは、束縛の枷に見えた。



縛られる本人が望む枷、に――。
だが、それは駄目(だめ)だ、絶対に――。
事態を巡(めぐ)り、状況はおおいなる変化を見せていく。

9

「つまり、その腕輪をはめてる限り、あなたの能力は暴走しないというわけね？」
一通りの説明を受けた後、ソラミイノが口にした言葉に、ガネルオージェがこくりとうなずいた。
「しかも、あのお師匠たちの子供石ならなんでもいいってわけじゃなくて、特に力の強いものでないと、あなたの力を封じることはできない、と――」
「そうだよ」
苦い顔でそう答えた青年は、もういいだろうとでも言いたげな顔をアラクセイトに向けてきた。
「いいかげん、石を見せてくれる気になったか？」
おそろしく不機嫌そうなその顔に、けれどなんだか追い詰められたものを感じて、アラクセイトは即座にうなずきそうになったのだが、これをソラミイノがとめた。
「まあ、待ちなさいな、アーク。その話が事実だとしても、それだけで譲ってあげるのは親切

すぎるというものよ。二度目、三度目がないとも言い切れないんですもの。そのたびにたからればちゃ、いくらたくさんいただいたからって、すぐに手持ちがなくなっちゃうわ。わたしたちだって、これから必要とするかもわからないんですからね」

確かにそれはそうかもしれないが……気のせいか、ソラミイノの口調には私情がまじっているような気がした。

（ミイノ、ほんとにほんとにこのひとのこと、嫌いなんだなあ……）

なぜだろうと首をかしげるアラクセイトには、その元凶たる自覚がない。

「第一、そんな力のある子供石なんて、そうそうあるものじゃないのでしょう？　最後の一粒を使ってしまったら、そのあとはどうするつもりなの？　制御する努力をするほうが、前向きな態度というものではないのかしら？」

辛辣ながら、堂々たる正論を口にしたソラミイノのそばで、思わず胸に手をあててしまったアラクセイトである。

（い、痛い……）

「もちろん努力はする。修行だってつづけるさ……」

悔しげに唇を噛みながら、ガネルオージェはうなるような声でつづけた。

「だが、たとえ時間稼ぎにしかならなくとも、おれにはこの封じが必要なんだ。二度とこの力が暴走しないように……」

歯ぎしりせんばかりの様子に、ソラミイノも心動かされたらしい。
「制御がきかないばかりに、大失敗したことがあるみたいね。いったい、なにを引き起こしたの？　内容次第によっては、考えてあげないわけでもないわよ」
それでも口調が偉そうなのは、相手に向ける感情ゆえだったのか……。
射殺すような目を向けて、ガネルオージェが毒づいた。
「それは、お前のものじゃないだろうに」
なんの権利があって口出しするのかとでも言いたげな様子の青年に、決まっているとばかりにソラミイノは説明した。
「この子に財布の紐なんて握らせていたら、どんな悲惨なことになるか目に見えているからよ。あなたのお師匠さまからいただいた青玉と紅玉を見て、この子がなんと言ったか、教えてあげましょうか？　何粒ぐらい売れば、越冬資金になるかしら、ですって」
淡々とした口調で語られた内容に、それまで殺気だっていたガネルオージェの表情が劇的な変化を遂げた。
あきれたようにまじまじと、アラクセイトの顔を見つめたのだ。
「お前……もしかして、ものすごーくいいところのお嬢なのか？」
当然のことながら、そんないい家の生まれではないアラクセイトはかぶりをふった。
「ううん。ものすごーくいい家のお嬢さんはミイノよ。この間、初めて知ったけど」

この言葉に、またしても意外そうな顔になり、青年は今度はソラミイノに目を向けた。
「その割に、ずいぶんしっかりしてるような気がするが……本当に？　逆じゃなく？」
小さくため息を洩らしながら、白金の髪の少女はうなずいた。
「本当よ。第一、お金の存在も知らないようなお嬢が、越冬資金なんて言葉を口にするはずがないでしょう？　神殿じゃ、聖石の子供石を換金する話とかはまだしてなかったから、貨幣換算できてないってあたりが正解ね。そんなぼけぼけ娘に、財布なんか任せておけるわけないでしょう？」
なにやらひどい言いぐさだが、事実その通りなので、アラクセイトは反論できなかった。ガネルオージェも納得したように、何度かうなずいたのち、なんとも言いがたい顔で彼女を見つめてつぶやいた。
「そういう話なら、仕方ないな……ああ、なんの話だったか？」
先程までのぎすぎすした空気が霧散し、なにやら和やかと言っても差し支えないほどの雰囲気になったなか、話題は元に戻った。
「暴走って言うけど、それはどの程度の規模で、どんな内容かってことね。なんでもかんでも封印に頼ってたら、制御できるものも制御できなくなるでしょうし……ね」
つまりは、あまりひどいものでないのなら、封印などに頼らず努力しろ――ということらしい。

険悪な空気は去っても、ソラミイノの手厳しさは変わらないのだ。
だが、今度はガネルオージェも気を悪くした様子を見せなかった。自覚はあるということだろう。
「……屋敷全壊の上、生存者なし……だった」
一瞬、我が耳を疑う内容に、アラクセイトは目を瞬かせた。
「……はい？」
「……本気で？」
ソラミイノの場合は、理解しつつも懐疑的な態度といった様子である。
「洒落や冗談で言えるか、こんなこと。一度、おれが金剛石を生み出すところを見られてな。金に目がくらんだ悪党が、おれを攫って監禁したことがあったんだ。折り悪く、そのときは師匠たちの石は砕けたばっかりで、ちょうど彫金師に修理に出してたんだよ。金剛石だってだけで値打ちモノだってのに、おまけにおれの生み出すのは聖石の子供石だ。いくら金を生み出すかわからない金づるだってことになって、目の色変えられてなあ……」
しみじみした口調で語るガネルオージェを前に、ソラミイノはやや同情的な声で「そうでしょうねえ」とうなずいた。
「そういう状況なら、敵がどんなことをやらかすかは目に見えてるわね。思考力を鈍らす薬のたぐいでも投与して、言いなりにさせようって線じゃない？」

「ああ、その通りだ。さらに運の悪いことに、師匠たちはそのとき、神殿に報告に揃って出掛けてたんだな。おれもだが、師匠はふたりとも感知能力のたぐいがほとんどなくってな、いつもだったら腕輪のおかげで捜せたはずなんだが、修理にだしちまってたし。薬で暗示かけて、手っとり早くおれの意識を屈伏させようと企んだらしいんだが……まあ、おれにも触れられたくないことのひとつやふたつはあったわけでな」

おとなしく、そばで聞いていたアラクセイトは、なんとか話の流れを整理しようとしていた。

あっさりすんなり理解するには、いささか経験値が足りなかったのだ。

（えっと、つまり……このひとが、金剛石の子供だってことを知った悪いひとたちが、あのお師匠さまたちのいない間に誘拐しちゃって、薬で言うことをきかそうとしたってわけよね）

非常に簡単明瞭な筋だが、間違ってはいない。

「……それで、力が暴走してしまったの？」

尋ねた彼女に、「そういうことだ」とガネルオージェがうなずいた。

「……屋敷と言ったけど、どのぐらいの規模だったの？　やることは小悪党並みだけど、屋敷を構えてるってことは、そこそこの金持ち……というか、権力者ではあったわけなのよね？」

確認を取るようかのように、畳みかけたソラミイノに、やはりガネルオージェはうなずいた。

「あんたたちがいた屋敷ほどじゃなかったが、敷地にして二周りぐらいは小さかったかな？どうやら悪巧みする時専用だったらしい。そうじゃなかったら、さすがにいくらおれが被害者だからって、お咎めなしにはならなかったろうよ」

アラクセイトは驚きのあまり、目を瞠ってしまった。

（ミイノのお屋敷よりは狭いって言っても、それでものすごーっく広いお屋敷ってことにならないかな。それを全壊させた……って……）

ふうう、と深い、深い息をついたのはソラミイノだった。

「なるほどねえ」

とつぶやくと、彼女はアラクセイトに手を差し出した。

「あ、うん」

答えて彼女は懐から革の小袋を取り出した。

お守り代わりの子供石の入った袋だ。

振るとじゃらじゃらと音がする。決して褒められた方法ではなかったが、聖石の子供石どうしは、よほど強くこすりあわせでもしない限り、表面に瑕がつくことはないので問題はないのだ。

ソラミイノは受け取った袋の口を開けながら、しかしきっぱりと釘を刺すのを忘れなかった。

「今回だけ、特別ってことで納得してちょうだいね。そうそうあてにされても困るし、あまりあなたと係わりたくないの」

そう言って、ちらりと目を向けた先にいたのは……アラクセイトだった。

「あなただって、行く先々で火事騒ぎに巻きこまれたくはないでしょう？」

（それって、やっぱりこの間のこと……なんだろうなあ……）

暗に告げられた内容に、どんよりと落ちこんでしまったアラクセイトである。

だが、てっきりうなずくと思ったガネルオージェは、意外にもかぶりをふったのだ。

「いや、確かにそれはおれも遠慮したいがな。言わせてもらえば、ここでおれを追い払うのは得策じゃねえと思うぞ？　若い娘がふたりきりで旅してるってだけでも危険だってのに、おまけにふたりがふたりとも聖石の子供と来た日には……ほら」

なにかを指し示すかのように、彼は周囲の暗闇に目を向けた。

先に息を呑んだのはソラミイノだった。次いで、アラクセイトも気づいた。

気配を殺して、近づいてくる者たちが、いたのだ。

「良くない了見のやつらにタチの悪いモンがくっついて、ぞろぞろ集まって来やがるって寸法だ……な？」

そう言って、にやりと笑ったガネルオージェの灰銀の双眸には、なぜか楽しげな光が宿り、きらきらと輝いていた。

10

「護身術の心得は？」
尋ねたガネルオージェは、予想の範疇内の答えをもらい、うなずいた。
白金の髪の少女は「一応は」と、紫紺の髪の少女は「全然」と――。
「なら、ふたりともここにいたほうがいい。気配は殺しておくんだな」
いっそ、好都合だと思い、彼は短く言い置き、その場を後にした。
実戦の場において、彼は少女ふたりの力など、あてにしてはいなかった。いや、却って邪魔にさえ思っていた。中途半端な力を持つ者ほど、実戦の場では役に立たない。なまじ自らを無力ではないと思っているため、こちらの足を引っ張るような真似を働くことも多いのだ。
ふたりのうちひとりが、護身術を心得ていないというのは、ある意味幸運だった。そうであれば、無力である彼女のために、一応の心得があると答えた少女はそばから離れられないからだ。
襲撃者たちは、ただの人間ではない。

瘴気の気配を色濃く漂わせている連中だ。

感知能力に関しては、ほとんどないと言っても嘘ではないガネルオージェだが、この手の瘴気だけは、すぐに嗅ぎ取ることができる。

なぜなら、それは以前、拉致され、薬物で操られそうになった際、イヤというほど肌で知った……いや、意識に刻まれた感覚だったからだ。

あのふたりの少女は、まだ知らない。

人間の放つ瘴気より、喪月神の放つそれのほうが、よほどに強く危険なものだと……そう認識しているだけだ。

人間が生み出し、放つ瘴気のほうが、より醜悪で歪んでいることを、彼女たちはまだ感じ取ってはいないのだ。

（まあ……そんなこと、知らずにすめば、それに越したことはないんだろうがな）

声には出さずつぶやきながら、彼は懐から針を取り出す。

裁縫用のそれと違い、太く長く両端が尖ったその中央部分には、師匠の片割れである青玉の使途の生み出した子供石が埋めこんである。

浄化の力を持っているのだ。

通常の場合、武器としてこの針は使わない。

ガネルオージェは師匠たちから、それぞれの子供石を嵌めこんだ短剣と長剣を与えられてい

たのだから。
　瘴気に取り憑かれただけの人間なら、それらで小さな傷のひとつも負わせれば、ことは足りるのだ。
　だが、いま自分たちを目指し、近づきつつある者たちは、そうではない。
　それが、ガネルオージェにはわかる。
　全員が全員、同じとは呼べないだろう。
　だが、自らの心をしめあげるような感覚が、襲撃者たちの正体を彼に知らしめる。
（こいつらは……あいつらと同じだ……）
　世の中には、それが自分に役に立つかどうかでしか、他者を判別できない人種が存在する。
　そして、そういう人種に限って、『有益』だと思ったとたん、なにがあろうと支配し、従え、期待通りの働きをさせずにはおけないと、そうでなければ許せないと、根拠も何もない傲慢さで信じる者がいるのだ。
　かつて、ガネルオージェを攫った面々がそうだった。
　彼らはガネルオージェという存在を、ただの『力の宿る道具』としか見なさなかった。
　ソラミイノたちに語った話は嘘ではない。
　だが、薬物で無理やり先鋭化させられた神経と感情に、ぶつけられたさまざまな欲望は、なまじ耐性がないだけに鮮烈に刻みこまれた。

あれが、同じ人間なのかと——いまでも振り返り、疑ってしまう。

いいや、違う。そうだと骨身に刻まれながらも、そうではないという、一縷の希望に縋りそうになってしまうのだ。

そう……あのときの感覚を、記憶を、現実のものだと、自分は認めたくないのだ。

だが同時に、とうに認めている部分もあった。

そうでなければ、この針は使えない。

人間に取り憑いた瘴気だけではなく、瘴気に取り憑かれるだけの条件を備えた人間の命をも同時に奪う……そのために作られた凶器なのだから、それは。

心が弱くなったとき、そこに瘴気は憑くと言われる。

どんな人間であろうと、心が弱くなる瞬間はある。また、魔がさす瞬間も、ある。

だが、ときに……人間のなかには、常に瘴気を引き寄せる気質を持つ者もいる。

いくら瘴気を払おうと、次から次に、悪しき気を引き寄せ、その巫史になってしまう者がいるのだ。

(ずいぶん、増えちまったな……)

闇のなかで、針を用いてひとり、ひとり——命を奪いながら、ガネルオージェはそう思っていた。

不幸にも、下司の勘繰りのたぐいだけは読み取れるようになってしまった彼には、男たちの

思惑が見て取れてしまった。
ソラミイノとアラクセイト――。
ともに聖石の子供であり、しかも使徒とは認められてはいない、なかなかに見目のよろしいふたりの少女。
（こいつらにとっちゃ、美味しい餌でしかないんだろうな……）
ひとり『いくら』の勘定で動いていることまで読めるものだから、うんざりする。
こんな輩が生きていてもいいことはない。
もっとも、そのことをあのふたりに告げるつもりはない。
世の中には、敢えて知る必要のない闇がある。
これも、そのうちのひとつだ。
ガネルオージェ自身、暗殺者として師匠たちに育てられたわけではない。対象への生殺与奪の権利を認められたに過ぎない。いや、ある意味において、最も重い判断を委ねられたと言い変えることもできようが、そんな師匠たちの判断を、これまで恨んだことはない。
直感として、わかるのだ。
（こいつらは、駄目だ。更生の余地がない……）
そんな連中のせいで、あのふたりが不幸になるのは面白くなかった。
守りたいと思ったわけではない。そこまで深い思い入れができるほど、ガネルオージェは彼

女たちのことを知っているわけではないのだから。

ただ、こんな底の浅い悪党たちのせいで、あの生意気で口の減らないふたりが目茶苦茶に傷つけられるのは我慢ならないと……そう感じただけだ。

この世において、無知は罪である。

だが、自らが無知であることを悟れば、ひとは無知ではなくなるよう努力することができる。

いまは無知でも、きっかけひとつで無知ではない者になれるかもしれない者たち——そのきっかけひとつを与えるぐらいのことは、してやってもいいのではないかと彼は思ったのだ。

一から教えてやるつもりなどない。だが、もし自分の与えたきっかけで、彼女たちに気づくものがあるのなら……。

そう、思い、彼は針を揮った。

(あと、ふたり……)

闇のなかで標的の数を数えながら、彼は仕留めるべき存在を、明確に知覚していた。

詳しいことは、わからない。



ただはっきりとわかったのは、刻一刻と、自分たちに害意を抱く存在が消えていく感覚だけだった。

ソラミイノは、連れであるアラクセイトを庇う恰好で、ほとんどその場にうずくまっていた。ガネルオージェの「じっとしていろ」という台詞に、尋常でないなにかを感じ取ったからである。

あの時ばかりは、憎まれ口を叩く気にもなれなかった。

従うしかないと思った。

なぜなら、自分たちを包囲した者たちの気配はあまりにも多く、強かったからだ。

（このままでは、捕らわれる……！）

真実、そう覚悟した。

そうなった場合のことを考えれば、到底逆らえるものではなかった。

有力者の一門に生まれた身として、ソラミイノは幼いころから、その意味と危険性を身近に感じつづけてきた。

神殿における発言力のある名門の出であるという事実は、彼女を普通の安全な生活から隔てていた。

なぜなら、政治と宗教との距離は近い。

神殿に力を持つ者は、間接的にとは言え、政治を担う者たちをも動かすことが可能なのだ。

そんな家に生まれた子供は、それだけでさまざまな企みを抱く者たちにとって魅力的な的となる。

本家の直系と生まれた上に、聖石の子供だったソラミイノは、一族にとっても重要な意味を持つ娘だった。

珊瑚と真珠を除く、ほとんどの貴石や宝石を産出することで知られる豊珠大陸だが、宝石とまで呼ばれる聖石を抱いて生まれてくる子供は、ほとんどいなかったのだ。

剛玉石はもちろんのこと、黄玉、緑柱石を抱いて生まれて来る者も稀ともなれば――他大陸でも、百年から数百年にひとり、生まれて来るかどうかの状況ではあったのだが――一族がソラミイノの能力を重要視したのは無理からぬことだった。

神殿中で相当な権力を握りながら、彼らには『神々の加護を得た』証を持つ神輿がなかったのだから。

そんな折りに、聖石の子供としての自分が生まれた。

一族にとって、それは願ったりかなったりのことだったろう。

そう、たとえ聖石の使徒に選ばれたとしても、ソラミイノは一族から完全に自由になれることはなかったに違いない。砂金水晶の子供として生まれた彼女を、一族はどんな経緯があれ、最大限に利用することを、彼女が生まれたその日のうちにでも、とことん突き詰めていたに違いないのだから。

それでも、本当の傀儡にはなりたくなかったから、ソラミイノは努力した。自分の意志を最低限貫ける程度の発言権を手に入れるために、彼女は努力しつづけたのである。

それは、己が力を磨くことばかりにかけたものではない。

自らの油断や隙が、一族に困った事態を呼び寄せる可能性も考えた。自分は、まず能力以前に生まれ落ちた一族の名前――ストリーヴ家という名前によって、価値を決められているのだという現実を、彼女はしっかりと把握していたのだ。

ストリーヴ家は、アスカニーリ神殿における権力を確保することを最重要課題と見なしている節があり――もしかしたら、それ以上のことを望んでいるのかもしれないが――身内にも部外者にもたいへん厳しい対応をする一族であることを彼女は知っていた。

一族の者でない、なんらかの意図を持つ者を弾き、抹殺するのは不思議ではないとはいえ、ストリーヴという一族は、おなじだけの厳しさで、一族に属する者たちにあたるところがあったのだ。

つまり、一度でも一族に不利益をもたらすような騒ぎを起こしたならば、たとえそれがソラミイノであろうとも……しかも彼女が聖石の子供で、有力な使徒候補であろうとも、容赦なくその特権を取り上げる、というものだった。

徹底したそのシステムは、ソラミイノにとっては融通のきかない、不便なものにしか思えな

かったが、これまでストリーヴ家が生き残れてきたのは、その単純な仕組みゆえ――という点も否定できない。

だから、彼女はアラクセイトを抱き抱えるようにして、騒ぎが終わるのをじっと待ちつづけたのだ。

ストリーヴの一族として、火事騒ぎまで起こして家出してしまった自分の評価は、底の底まで下落しているに違いないと思う。

次に一族に見つかってしまったら、恐らく二度と自由は望めぬ環境になってしまうだろうことがわかる。

そう……細心の注意を払いつつ、だが一族に隙を見せぬようふるまうことを常に心掛けていた自分が、ずいぶんな無茶を働いてしまったものだ。

その自覚は、ある。

けれど、あのときは、どうしようもなかった。

兄に対する慕わしさで、一族特有の『制御』がきかなかった。

こうなってしまっては、自分は一族にとっての問題児でしかない。

見つかり、連れ戻されれば、そのような駒として、一族は自分を扱うに違いない。

（それは、イヤ……！）

心から、そう思った。

だから、ソラミイノはアラクセイトを抱きしめ、嵐の去るのをただじっと待つことにした。
自らの自由な未来と、自分以外の誰かの命を秤にかけ、結局自分の未来を選んだのだ。
ひとの命が散らされていくのを肌で感じつつも——。
ガネルオージェの暗殺者としての腕は、相当なものがあるとわかっていた。
アラクセイトには教えられない……知らせられない。
否。
知らせたくない。
全身全霊をかけて、ソラミイノはアラクセイトの耳を塞ぎ、その耳に、その心に、この場で起こっている事実が届かないように、と祈った。

11

離れて行ってから約半刻後、ガネルオージェは戻ってきた。
初夏とはいえ、豊珠は世界最北の大陸だ――いかに南部と言えども、明け方ともなれば冷え込みは激しい。
一度消した焚き火を再び起こし――こういう場合、能力の安定しないアラクセイトではなく、ソラミイノが担当したわけだが――戻ってきた黒髪の青年に、紫紺の髪の少女は、礼の言葉を告げた。
「ありがとう……強いんだね」
「まあな」
と、謙遜することなくうなずいたガネルオージェだったが、なにごとかに気づいたように、ふと首をかしげ、彼女に問いかけた。
「お前、会ったばかりのころと、態度が違ってないか？」
出会い、誘拐されている間も、彼女はガネルオージェに対しては敬語を使っていた。

いまは、それがない。
別に不快に思ったわけではないのだが、不思議には思った。だからガネルオージェはつい尋ねてしまったのだ。
それに対するアラクセイトの答えは曖昧なものだった。
「ああ、それは……」
と言いかけて、少女はしかし口ごもってしまった。
なにか言いにくいことでもあるらしい。
「なんだ？」
と、ガネルオージェが突っこんだのに対して、アラクセイトの援護に乗り出してきたソラミイノが口をはさむ。
「確かに、いくら年上だからって、殺されかけた身としては、敬う気にはなれないわよねえ。熱出して、肺炎起こして、アーク、本当に大変だったんですものねえ」
当て擦られ、ガネルオージェがぎり、と唇を噛む。
「だから、その詫びも兼ねて、あいつらを撃退してやったんだろうが……っ！」
「ああ、そうだったんだ？」
びっくり、と顔に書いて、アラクセイトが間の抜けた反応を示した。
それでも「気にすることないのに」と言わないあたり、先日受けた災難を忘れたわけではな

さそうである。
「じゃあ……じゃあね、ガネルさん。もうひとつ、お願いしてもいいかな？」
けっこうちゃっかりしてやがる――というのが、ガネルオージェの正直な本音だった。
「義理は果たしたと思うんだが？」
命の危険に追いやった償いに、命を助けてやった。
これで、差し引きゼロになったはずだ。
そんな彼の思いを知ってか知らずか、アラクセイトはおっとりした笑顔で、とんでもないことを言いだした。
「うん、だから、授業料は払うってことで、ガネルさんの欲しがるような子供石があったら、一度目はただで譲るから……」
一度目は、と断るあたり、けっこう侮れない。
「それで？」
条件――否、『お願い』とはなにか……と尋ねた彼に、少女はあっさりと答えたものだ。
「武術……？　それとも護身術っていうの？　それ、教えてもらいたいの」
思わずガネルが「正気か？」と尋ねてしまうほど、それは意外な頼み事だった。
ほとんど同時に、ソラミイノが叫んだ。
「やめなさい、そんな自殺行為！　包丁も満足にふるえないあなたに、刃物を扱えるはずがな

いでしょう!?」

包丁と武器を一緒くたにする内容にはいささか感じるものがあったが、確かに世の中には刃物を持たせるべきでない人種というものが存在することを、ガネルオージェは知っていた。

他者を傷つけることに快感を覚えるような精神破綻者はもちろんだが、戦うつもりで武器を取ったはいいものの、結局自分で自分を傷つける羽目になる、超のつく不器用者の粗忽者もその範疇に入る。

ガネルオージェが見るところ、アラクセイトという少女は、まさにそれに当てはまるように思えたのだ。

そんな少女に、いくら授業料代わりとして、ただで師匠たちの子供石を譲ってくれると言われたからといって、手ほどきするのは気が引けた。

「あー、悪いことは言わないから……」

そんな馬鹿なことは考えないほうがいいぞ——と、暗に断りの言葉を口にしたガネルオージェに、アラクセイトは真っ直ぐな視線を向けて、こう言い切った。

「だって、ああいうひとたちは、特別珍しいってわけじゃないんでしょう?」

この先も、ああした輩に狙われる可能性というものを、アラクセイトはアラクセイトなりに予測し、対策を考えたつもり……らしい。

奇遇にも、今回一緒にいた自分のことを、次回以降に関してもあてにしているわけではなさ

そうな彼女の態度に、結構好印象を覚えたものの――なにもかも、誰かに助けてもらえると信じて疑わない人間ほど、ガネルオージェが嫌うものはないのだ――しかし、目前の少女の決意はあまりにも無謀に見えた。

「……まあ、そうだが、いくらなんでも、使徒の一行には手は出さねえよ。どうせ、お前らだって……っつーか、そっちのお嬢だって、ずーっと逃げ隠れするつもりはないんだろう？　だったら、わざわざそんなこと、習う必要はないだろうが。まあ、目的果たすまで、おれが用心棒を務めてやるとして、代わりに師匠の子供石、貰おうとかは思っているけどな」

それがすめば、師匠と仰ぐ、あの珊瑚の使徒たちの元へ戻ればいい。

そうである以上、護身術など学ぶ必要もないものだ――と告げたのは、アラクセイトに他者の血を流させたくない……と思ったわけでは決してなく、そちらのほうが、より面倒かつ厄介な事態を引き起こしそうだと判断したからに過ぎない。

ある意味、ソラミイノの「包丁も満足に使えないくせに」との台詞を、額面通りに受け取ったせい……と言えなくもなかった。

だが、そんなふたりに、アラクセイトは不満そうに目を怒らせた。

「それで？　この先もずっと誰かに守ってもらうわけ？　なんで、わたしには自分を守る力もないんだって決めつけるの？　わたしだって、自分のことぐらい、自分で守りたいよ？　誰かの足手まといになんか、なりたくないって思うの、そんなに変なこと？　そりゃあ、わたしは

包丁使いもうまくできないし、不器用だって言われたら、確かに反論できないけど……でも、鉈ならもっとうまく使えるし、力だってそこそこにはあるよ。なんで、最初っから駄目だって決めつけるわけ!?」

たいそうな剣幕だった。

だがしかし、彼女に相対するふたりが——期せずして——同時に思ったことは、彼女の言葉に含まれた、いささか無骨にすぎる刃物に対する感想だった。

「……鉈？」

「鉈……」

どう考えても、目の前の、ほっそりした少女には似つかわしくない代物だった。

だが、黄橙色の瞳の少女は、彼らのそんな違和感には気づかないらしく、こっくりとうなずいたのだ。

「うちでは薪割りはわたしの役目だったもの」

なにやら大幅に問題の違うことを、真面目に言いだした少女に、ガネルオージェは内心困惑しつつも、なんとか説得しようとした。

「たとえそうだったとしても、だ。動かない薪と違って、ああいった連中は動いてるんだぞ？薪割りと一緒にできるかどうか、考えてみりゃあすぐにわかることだろうがよ」

「どうしても、どうしても駄目なの？」

思い詰めた目でそう尋ねられ、ガネルオージェは一瞬迷ったが、結局重々しくうなずいて見せた。

鉈と剣を一緒に考えているような相手に、一から教える面倒など、誰が買いたいと思うだろう。ただし、それで旋毛を曲げて、意地でも――師匠の子供石を――譲らないと言われては困ると思い、一応の補足はしておいた。

「言っておくが、おれは教えるってことに自信がないんだよ。しかも初心者が相手だなんて……考えただけでぞっとする。そういうことは、あの赤毛の師匠にでも頼んでくれ。腕は確からしいからな」

この言葉に、アラクセイトは反応した。

「……セイさまに？」

ここぞとばかりに援護してくれたのはソラミイノだった。

「そうしたほうがいいわ、アーク。それに、稽古をつけていただく前に、筋力や持久力はつけておいたほうがいいと思うし……ほら、なにしろあなた、この間の肺炎のせいで、体力落ちたって言っていたでしょう？」

肺炎――という言葉を、わざとらしく強調するあたり、ソラミイノの遺恨の深さを思い知らされたガネルオージェだったが、その提案には実際救われた。

「……でも、筋力とか持久力とかって、どうすればつくものなのかな？　薪割りする必要はな

いし、水だって、そんなにいっぱい汲んでくることもないし……」

だからといって、訓練している暇などない——現在彼女たちは家出中なのであり、しかもソラミイノの兄を見つけるために移動中なのだから。

うーん、と考えこんでしまった少女に、助け船を出したのは——不本意ながら——ガネルオージェだった。

うーん、うーんといつまでも悩む姿が鬱陶しかったのだ。

「暇を見つけて素振りでもしたらどうだ？」

告げた瞬間、ソラミイノが余計なことを、とでも言いたげな目を向けてきたのには気づいたが、かまってはいられなかった。

こんな、神経に障る相手に、結果的に振り回されているという事実が、彼にはどうにも我慢ならなかったのだ……。

「し損じた……と？」

つややかな銀の髪をかきあげながら、物憂げな表情で、少年はつぶやいた。

その双眸も、やはり銀——北の大地に降り積もる雪のように白い肌といい、まるで月の化身

のような少年だった。

「任せておけと、万が一にも取りこぼすようなことはないと……たいそう自信たっぷりに言い切ってくれたと記憶しているのだけれど、あれはわたしの記憶違いだったのかな？」

皮肉げな笑みをたたえ、小首をかしげながら少年が目を向けた先に、座るのはひとりの壮年の男だった。

倍ほども歳の違う少年に、しかし男は焦りと不安もあらわな顔で、自らの弁解を口にし始めた。

この場に集まった面々が、決して年齢による序列で位置づけられているわけではないという、なによりの証と言っていいかもしれない。

そこに集ったのは八人の男たちだった。

少年を除けば、最も若い者ですら不惑を越えた年長者ばかりである。

ところが、場の支配権を握っているのは、どう見ても十代でしかない銀髪銀瞳の少年なのだ。

責められるだけの失敗を犯したのは、面々のなかでも——少年を除いての話だが——二番目に若い男性だった。

男は必死に、予想外の青年の存在を言い立てた。

「まさか、青玉の子供石を嵌めた針を使うような者が、標的のそばに控えておろうとは……」

想像だにできなかったのだと力説した男に、少年は、安心させるような笑顔で、
「うん、それは悪かったよ」
と謝った。
「そもそも、あの子が飛び出してくるかどうかも半々の確率だったわけだし、そこに余計なおまけがくっついてくることだって予想外だったものね。さらにそこに、ますますありがたくない厄介者まで加わるだなんて、わたし自身、想像もできなかったからね。だから、一度目は許してあげよう」
この上なく慈悲深い笑顔を向ける少年の、ただその銀の双眸だけは笑ってはいなかった。
二度目はないと、明確に、その眼光が告げていた。
そのことに気づいたのだろう、失態を犯した男は、体を縮こませるように小さくしながら、
「次こそは」とつぶやいた。
「うん、そうしてくれると嬉しい」
と、少年も、答えた。
大体、と——少年は、遠い目をしてつぶやいた。
「なんだって、わざわざこんな時期に、あんなのが生まれるかなあ……？」
ほとほと呆れたかのような、あるいは困ったかのような……そんな表情であり、口調だった。

「姉上たちの画策かな？　それにしても意地の悪いことだ。あんな代物をふたりも地上に解き放つだなんて……あんなモノに灼かれたら、ただではすまないのはあのひとたちだって同じなはずだというのに……」

それとも、自分たちだけは無事にすむとでも思っているのかな？

忍び笑いを洩らしつつ、低くつぶやいた少年の言葉に、そばにいた初老の男がこう応えた。

「それほどの脅威だと、彼女らは貴方様を認識しているのでありましょう」

「やりかたは、けっこう杜撰だったけどね」

「それは、いかに尊き身にして強大な力を持つ方々であれ、女性であらせられますから」

女性を一段低く見なす発言を洩らした男に、少年は不可思議な微笑みを向けた。

「お前なら、あの子を……あの子だけを、わたしの目の前に連れてくることが、できる？」

対して男は、否定の意味合いとは少々違う素振りでかぶりをふった。

「その役目は、わたくしのものではありますまい」

と――。

「そうかな？」

首を傾げて問いかけてきた少年に、彼はうなずいた。

「はい、さように存じます」

と。

「そう……か」

と応えた少年は、一度目の失敗を犯した男に目を向けた。

「じゃあ、そういうことだから……もう一度だけ、お前にまかせてやろう。わたしの望みは……わかっているね？」

念を押すように尋ねた言葉に、男はうなずき……だが、堪えきれぬかのように、自らの疑問を口にしてきた。

「ずっと待ち望んできた御方のご命令であれば、なんであれ従うつもりではございますが……それでも、ひとつだけ、お尋ねしたく存じます。なぜにその少女に、そこまでの執着を覚えられます!?　我等にとって、聖石の子供など、貴方様方に主権を奪われる危惧を抱いた女郎どもが生み出した小細工の結晶に過ぎぬはずですのに……!?」

「口を慎め！」

年長の者たちが、口々に制止したものの、男の台詞は途切れることがなかった。

そのすべてを耳にしながら、しかし少年は憤激する様子ひとつ見せなかった。

哀れむような笑みをたたえ、少年は応えたのだ。

「わたしにとって、不可欠な愛しい存在だからだよ」

それきり口を閉ざしてしまった彼に、なおも問い詰める者はいなかった。

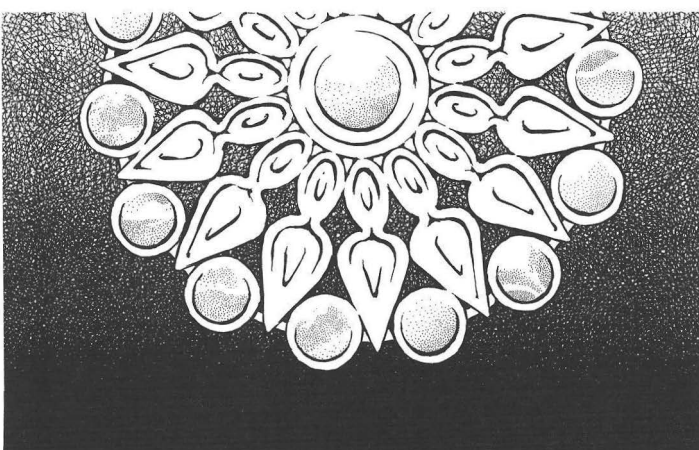
それはすでに、許されざる領域に至ってしまったせいである。



世界は動乱の兆し（きざし）と気配に震えていた。

―つづく―

海と月の宝石



プロローグ

セイタマールにとって、生まれながらに与えられた名前こそが、なによりの重荷であった。
男児にあっては『う』音、女児にあっては『い』音。
その音を末尾に与えられる者はひとの世において恩寵を与えられる。
聖石の使徒に選ばれし者のことごとくが、男性にあっては『う』音、女性にあっては『い』音に連なる響きを連ねた『使徒名』を与えられることで。
セイタマールはしかし、生まれながらにしてセイタマールだった。
生まれ落ちて間もなく、彼は血赤珊瑚の使徒として認められ、その名を許されたのだ。
本来であれば、神殿にその才能を見いだされ、引き取られ、教育を受けた後、選別され、ようやく手に入れるはずのものを、彼は生まれると同時に手にしていた。
それほどに厚い神々の加護を受けた……稀有なる存在とも言える。
だが、その事実は、彼から家族を奪った。
誕生するとほぼ同時に、彼の身柄は、強奪されたも同然に、アスカニーリ神殿に移されたの

だ。

物心がつくと同時に、聖石の使徒としての教育を受けはじめた彼は、当然同じ年頃の子供たちと接する機会が少なかった。

それでも彼は別に気にしたりはしなかった。

同年代とは言っても、彼以外の子供たちは、彼にしてみれば初歩的としか言いようのない授業や訓練に明け暮れており、共通する話題を見いだせないことも多かったからである。

それぐらいなら、年長者の使徒たちとつきあっているほうが楽だった。彼が接触を許された使徒たちは、みな的外れな妬みや僻みを彼にぶつけてくることはなかったのだから。

いつしか彼は、年長者に囲まれた生活が当たり前のものになった。

だから、彼は気づかなかったのだ。

自らの内に宿るもうひとつの才能に――。

そして、そこに期待する周囲の目に……その結果、引き起こされる現実がいかなるものであるのかということに。

彼が十二になって間もなくのころ、彼は初めて使徒としての使命を神殿から授けられた。

相棒として選ばれたのは、八つ年上の、女性だった。

笑顔のやさしい彼女は――白真珠の使徒だった……。

I

その街――雨城で奇妙なことが起こり始めたのは一年前のことだった。

次々と子供――正確に言うなら、三歳から四歳の男児ばかりが次々に姿を消したのだ。

雨城は治安のいい街として知られていたが、貧しさのあまり、我が子を幾ばくかの金子と引き換えに手放す者もいないではない。また、その金子さえ惜しみ、子供を攫う悪党も、決していないわけではないのだ。

ただし、前者はともかく、後者はれっきとした犯罪である。役所に届けられた子供の特徴を元に、警邏たちは必死に行方を捜したが、ひとりとして家族のもとへ戻っては来なかった。

子供は、いまも消えつづけているのだという。

だが、それだけであれば、神殿は使徒を送りだそうとはしなかったろう。

自然ではありえない事態が起こったからこそ、神殿はセイタマールたち――白真珠の使徒はラークラーニという名である――を派遣したのだ。

それは、最初の子供が姿を消して、三カ月後に起こった。

一五、六とおぼしき少年が、ふらりと雨城に現れたのだ。
その少年は、子供の攫われた家を訪ね、意外なことを告げたのだという。
自分が、昔連れ出された、この家の子供なのだと。
家族が信じなかったのは無理からぬことだった。攫われた子供は三つで、しかもまだ半年も経ってはいなかったのだ。一五、六に見えるこの少年が当人であるはずがない。
確かにその髪も瞳の色も……顔だちも、消えた子供を彷彿とさせるものがあった……らしい。だが、あまりにも馬鹿げたことに思えても仕方ない。しかも子供の家族は、いまも必死に息子の無事な帰還を祈りつづけていたのだ。悪質な冗談だと思ったろうことは想像に難くない。
かくして少年はすげなく追い返された。
だが、奇妙なことはこれに留まらなかったのだ。
数日後、その少年は死体で発見された。いや、少年であった者――というべきか。
身につけていた衣服から、それがあの少年であったことは知れたのだが、その死にざまというのが尋常ではなかった。
どうみてもそれは老人だった。
死体を調べた医者が、死因は老衰であると報告した時点で、別人だろうと警邏の者は思ったわけだが、そうではないことを証言する者が現れたことで、この事態は神殿の知るところとな

った。

目撃者は十歳の少女だった。

少女は裕福とは言いがたい家の娘で、市場の手伝いをすることで、家計の幾ばくかを助けていた。

朝早く、いつものように市場に向かっていた彼女は、場違いにも、路地脇で体を丸めて眠っている少年を見かけたのだという。酔っぱらいにも見えず、しかも少年の首に、金色に輝く鎖を見つけて、少女は声をかけ、起こしてやることにした。金目のものを隠しもせずに身につけていて、野宿しても安全なほどには、雨城の治安はよくない。それぐらいのことは、子供だって知っていることだった。

だから、少年を起こしてやったのだ。

『早くお家に帰ったほうがいいよ』

とも言った。

そんな少女に、少年は困ったように首をかしげてこう答えたのだという。

『帰れないし……わからないんだ』

と。

『道を忘れちゃったの？　だから帰れないの？』

そう尋ねた彼女に、少年はなんとも淋しげな顔でかぶりをふり、それきり黙りこんだのだと

いう。

仕事の時間が迫っていたこともあり、少女はその日はそのまま少年と別れた。

そして、翌日――やっぱり市場へ向かう途中で、少女はあの少年を見かけた。いや、服と金鎖が一緒だったから、そうなのだとわかったのだという。

『だってね、そのお兄ちゃん、小父ちゃんになってたんだよ』

変だなとは思ったけれど、相変わらず宿を取ってなさそうな様子に、ついお節介を焼いてしまったのだという。

彼女は長女のせいもあり、十歳にしてすっかり『お姉さん』な性格が出来上がっていたのである。

『だからね、追剝だって出るんだから、そんな高価そうな物は隠しておかなくっちゃ駄目なんだってば』

そう指摘して忠告すると、少年……いや、すでに青年になっていた彼は、首から金鎖を外して、彼女に差し出したらしい。

それはただの金鎖ではなかった。お守り石――聖石の子供石の下げ飾りがついていたのだ。

『あげる』

と言われて、少女は驚いた。

お守り石は、石の大きさや種類によって値段はさまざまだが、それでも少女の家庭で買える

ようなものではなかったからだ。

一度は辞退したものの、本音では欲しかった少女は、結局金鎖つきのお守り石をもらうことにした。

そのとき、せめてものお礼にと、ちょうど持っていた染料で、彼の手の甲に、厄除けの模様を描いてあげたのだという。

それは草から取れるもので、皮膚についた場合、数日は洗っても落ちないというものだった。お守り石を買えるほど裕福でない家庭では、この染料でまじないの模様を描くことで、『守り』としているのだ。

そして、その二日後、老人の死体が発見されたということだ。

その手の甲には、少女の描いた模様が残されていた。

これだけでも、神殿が動くには充分だったというのに、その二月後、やはりまた同じようなことが起こった。

突然、十ほども成長した息子だと名乗る少年が、やはり子供の消えた家に現れたのである。彼もまたひとりめの少年と同じく追い返され、やはり数日後、老衰で死んでいるのが発見された。

神殿は本格的な調査に乗り出したが、結果はあまり捗々しいものではなかった。

なぜなら、雨城の神殿には、当時使徒と呼べる存在がいなかったのだ。急ぎ、近隣の街の神

殿に、感査能力の高い使徒の派遣を求めたが、どちらかと言えば大都市から離れた地方でのこと、なかなかに時間がかかった。

そして、派遣されてきた水晶の使徒ふたりが調べた結果、これは間違いなく『瘴気絡み』の事件であるという報告書が提出され、今回の運びとなったのだ。

2

ラークラーニは、白真珠の化身と言われても納得してしまうような女性だった。
純白の髪といい銀の瞳といい北の生まれでもないのに日に焼けることのない白い肌といい、小柄で華奢なことも手伝ってか、彼女は実際より幼く見えた。
セイタマールは十二にしては大柄なほうであり、彼女よりわずかだが身長も高かった。
そのせいでもあるまいが、彼はこの初めて組んだ女性のことが、少しだけ苦手だった。
虫が好かないというのではない。
ただ、あまりにもはかなげで、見ているだけでなにやらはらはらしてしまうのだ。
もちろん、神殿が選んだ以上、使徒としての能力に不足はないのだろうが……できることならば、もっと頑丈そうな相棒がよかった、と彼は考えていた。
そんな彼の心中を読んだかのように、不意に隣を歩くラークラーニがくすりと笑った。
ふたりは無事に雨城に入り、神殿を目指して歩いているところだった。当然、人通りの多い道でのこと、気づかずともおかしくはなかったのだが、なぜか鮮明に耳に飛びこんできたの

だ。

「なにか？」

と尋ねると、彼女は小刻みに肩を震わせて、答えた。

「そんなに心配してくれなくても大丈夫よ、こんな外見のせいで誤解されるのは慣れてるけれど、瘴気に触れたからって倒れたりしないから」

第一、そんな人材じゃ、派遣されるはずがないでしょう？

胸中を読まれたことに、気まずさを感じながら、セイタマールは「いや、そんなわけでは……」ともごもごと言い訳した。

どうも、居心地が悪かった。

小柄ではかなげに見えるだけではなく、彼女の持つふわふわとした雰囲気に、慣れていないせいかもしれない。彼がこれまでつきあってきたのは、外見的にも性格的にも、繊細とか優美などという言葉の当てはまることのない面々だったから尚更だった。

「別に……心配してるわけじゃない……」

小声で答えた彼に、ラークラーニは「あら、そう？」と微笑んだ。

やさしく包みこむような、胸の奥があたたかくなるような笑顔だった。

「そういうことに、しておいてあげるわ。わたしはあなたのことを心配しているけれど、ね」

「どういう意味だ？」

尋ねたセイタマールに、ラークラーニは笑って答えなかった。

年長の使徒たちに、からかわれることは珍しくなかったが、これがそうなのかどうか、判断できず、彼は困惑した。

今度は気づかれないようにと、こっそりと息をついて、彼はやはり相棒はもっと頑丈なほうがよかったな、と思った。

小さな少女のようなこの体に剣を向けるのは……どうにも気が進まなかったのだ。

「消えた子供が全員戻ってきたわけではないのです」

雨城のアスカニーリ神殿で、この一年近く、調査をつづけてきたという水晶の使徒の言葉に、セイタマールとラークラーニは首をかしげた。

「それは、瘴気絡みでありながら、という意味ですか？　それとも戻って来ない子供たちに関しては、純粋な誘拐だったと……？」

セイタマールの問いに、水晶の使徒――レイアナールは「前者です」と答えた。

「確かにこの半年ほどの間には、手口を真似ての犯行もあったと思われます。いかに内密に調べを進めても、人の口に戸はたてられませんからね。ですが、少なくとも最初の五件に関して

は、間違いなく瘴気絡みです。微かにですが、気配が残ってましたから」
五件と聞いて、ラークラーニが目を丸くした。
「五件って……異常が起こり始めて一年なのでしょう？　いったい何人の子供が攫われたというのです？」
レイアナールがため息まじりに答える。
「現在までに、二十人の子供が攫われています。うち七人は条件を満たしておりませんので、模倣犯によるものと思われますが……」
「つまりは十三人は、瘴気絡みで姿を消してるってわけか」
セイの言葉に、レイアナールがうなずく。
「はい。約一月にひとりの割合です。正確には新月ごとに、三歳ないしは四歳の男児がひとり消えています」
「それで十三人なのね……」
ぽつりとつぶやいたラークラーニの銀の瞳には、沈痛な色が浮かんでいた。
戻って来た子供のその先を考えれば、致し方ないことだった。本来ならば、まだ幼児であるはずの子供たちが、老衰で死んでしまうなど、無残としか言いようがない。
「その十三人のうち、戻ってきたのは何人ですか？」
努めて感情的にならぬよう、淡々とした口調で尋ねたセイタマールに、返ってきたのは「六

人です」という言葉だった。

「約半数か……」

「はい。最初のひとりめが三カ月後、ふたり目がその二カ月後でした。ただし、戻ってきたふたりめは、攫われた三人目だったのです。攫われたふたり目は、いまだ戻っておりません」

暗に、生存は望めないだろうことを告げながら、レイアナールは額に手を当てた。

「酷いことです。戻ってきた子供たちのほとんどは、家族に認められず、数日のうちに死に至っております。なにしろ、両親や家族にとっては、彼らはまだ幼い子供のはずなのですから、そう簡単に受け入れられないのはわかるのですが……」

そのとき、口をはさんだのはラークラーニだった。

「いま、ほとんど……とおっしゃいましたね？　もしかして、助かった子がいるのですか？」

「ええ、ひとりだけですが。それでも、救いにはなります。その助かった子は、唯一家族に拒絶されなかったんですよ。その……偶然と言いましょうか、その子が攫われたせいで、母親は多少精神を病んでいたらしく、疑う心の働きが止まっていたようなのです。戻ってきた子供を一目で、我が子だと認めたそうです。その子供だけは、他の子供たちを襲った不幸から逃れました」

「家族の……」

つぶやいて、セイタマールは眉宇をひそめた。

家族というものを知らずに育った彼には、どうもそのあたりのことがよくわからない。もちろん無関係なはずはないと思うが、それでもどういったからくりなのか、皆目見当がつかない。

「家族と言うよりは、母親という存在に対する悪意を感じるわね。けれど、ひどいことを……子供たちにはなんの罪もないというのに……」

ラークラーニの声には、おさえきれない怒りがあった。

思わずそちらに目を向けたセイタマールは、彼女が蒼白な顔で、唇を噛みしめているのに気づき、なんとはない罪悪感を覚えた。

彼女のように、純粋な怒りを覚えることのできない自分の心に対するものだ。

自分が、精神的にどこか欠如している自覚はあったが、それを思い知るたびに、いつもこんな気分になる。

だが、今回に関してはそれは幸いなのだと、彼は思うことにした。ラークラーニは傍目にもわかるほど感情的になっている。自分までそうなっては、冷静な事態の解決は難しくなるかもしれないのだから。

「戻ってきたその子供から、話を聞くことはできるだろうか？」

あくまで冷静な態度を崩さぬセイタマールに、レイアナールが「それはもちろん」と答えた。

ちらりと向けられた目は、あまり好意的なものではなかった。
それも仕方のないことだ。
自らに言い聞かせ、彼は立ち上がった。
いま必要なことは、事態を一刻も早く解決することだ。
神殿は、それを期待して、自分たちを派遣したのだから。
「ラークラーニ」
呼びかけると、彼女はこくりとうなずいた。
やはり彼女も、自分を薄情だと思い、責める目を向けてくるのだろうか——ちらりとそんなことを考えたセイタマールの予想は、しかし裏切られることとなった。
「ええ、行きましょう」
答えた彼女の双眸には、非難めいた光はまったく浮かんでいなかったのだ。

3

唯一の生き残りである少年は、詳しくは覚えていないのだと言った。
ただ、そこには優しい女性がいて、まるで実の母親のように、自分を愛して育ててくれたのだ……と。
十年以上、確かに自分はそこで、母親であるひとと、一緒に暮らしていたのだと。
「それだけは、覚えているんです。けれど、あそこがどこなのか、どうやって戻ってきたのかは記憶が曖昧で……ただ、戻ってくる直前に、なにか……恐ろしいことがあったような……いや、言われたのかな……？」
首をかしげる少年に、嘘や隠し事の気配は見えなかった。
ある程度話を聞いて、ふたりは屋敷を辞去した。少年の話自体は、すでに神殿の調査報告書に記載してある分で把握していた。実際に会ったのは、少しでも手掛かりとなる……たとえば瘴気の残り香とでも呼ぶべきものがないかどうかを確かめるためだった。
はたして、それは残されていた。

ラークラーニが感じ取ったのだ。

「奇妙だわ……奇妙な感じなの」

神殿へ戻る道すがら、しきりと首をかしげながら彼女は語った。

「まぎれもない愛情と、限りない悪意がそれぞれにあの子に絡みついていたの……まったく違う波動を放ちながら、けれど残る気配は同じなのよ」

「それは……瘴気の主がふたりいるということか？」

珍しいことだが、あり得ない話ではない。

同じものに執着した複数の人間の思惑がまじりあい、ひとつの瘴気を形成した例は、過去にいくつか報告されているのだから。

「多分……ああ、いえ。よくわからないわ。けれど、だとしたら、そのふたりはごくごく近い間柄なのだわ。そうでなければ、あそこまでかけ離れた感情を放ちながら、おなじモノを共有できるはずがないんですもの」

そうつぶやいてかぶりをふったラークラーニの顔には疲労の色が濃く浮きでていた。

高い感査能力を持つ者は、そのぶん消耗も激しいと聞いていたセイタマールは、「すまない」と彼女に頭を下げた。感査には、精神の共鳴体とでも呼ぶべきものが必要なのだが、感情の振幅の小さな彼には向いているとは言いがたいため、相棒となる使徒がほとんど受け持つ羽目になるのだ。

けれど、彼の言葉に、ラークラーニは不思議そうに首をかしげた。
「なにを謝るの？　出来る人間がやれることをするのは当然のことでしょう？　代わりと言ってはなんだけど、わたしは浄化はできないから、そのときにはお願いね？」
なんでもないことのように言ってくる白真珠の使徒に、彼はふと疑問を抱いた。
もしかしたら、彼女は自分の浄化の方法を知らないのではないか――と。
無論そんなはずはないのだが――そうでなければ、支障を来すなどというものではない――あまりにもこだわりのない笑顔に、そう思ってしまったのだ。
だから、彼は尋ねてみることにした――これが杞憂ならば杞憂だと、安心したかったのかもしれない。
「ラークラーニ……ひとつ、確認しておきたいんだが、あなたはおれの浄化の方法を……その、正確に知っているんだろうか？」
彼の浄化法は、相棒にとって、あまり心に優しいやり方とは言えないものだった。
いわゆるところの囮役を、彼の対たる者は務めなければならないからだ。
相棒が瘴気をおびき寄せたところを――さすがに宿すまではいかないが――彼の愛剣で両断する、というものだ。
柄にびっしりと嵌めこまれた彼の聖石の子供石――血赤珊瑚に宿る力によって、彼の剣は生身を断つことなく、瘴気のみを浄化する。

だが、そうとわかっているからと言って、自分に降り下ろされる刃に平気でいられるかといえば、それは別の問題だろうと思うのだ。

だから、セイタマールは尋ねずにはいられなかったのだ……彼自身、いくら実害がないからといっても、ラークラーニのような小柄で華奢な女性に向かって、剣を降り下ろす真似は、あまりしたくないというのが本音だった。

「もし、知らないようなら、悪いことは言わない、やめたほうがいい。おれのやり方は……その、荒っぽいんだ」

そう告げた彼に、彼女は「知っているわ」とうなずいた。

「知らないわけがないでしょう？　だから、わたしが来たのよ」

そんなことを心配していたの？

ころころ笑ってそう言われたセイタマールは、心底驚き、同時に彼女の見かけからは想像もつかない胆力に感心した。

「本当に……その、いいのか……？」

彼女の決意を疑うわけではなかったが、つい重ねて尋ねてしまった彼に、

「もちろんよ。だけど、さすがに目は瞑らせてね？」

愛嬌たっぷりにラークラーニは答えた。

思わず、じっと相手を見つめ、セイタマールは大きくうなずき、ささやくように、告げた。

「よろしく、頼む」
「まかせてちょうだい」
ラークラーニの笑顔は、やさしかった。

消えた子供たちの共通点は、歳と性別以外にもふたつあった。
ひとつは金髪であること、もうひとつは榛色の瞳であること、だ。
「彼女にとって、それは譲れない条件なんでしょうね。恐らく、彼女は息子を取り戻したいのよ」
「それは、愛情深いほう……なんだな？　なら、悪意の塊のほうはどうなんだろう？」
感情の機微に疎い自覚のあるセイタマールは、さしたるこだわりもなく相棒に問いかけた。
下手な考え休むに似たり――ではないが、彼はいくら考えても到底答えなど出せそうにない自身に見切りをつけていた。考えることを放棄する態度は、決して感心できるものではなかったが、この場合は仕方なかった。
なにしろ、時がなかった。次の新月――恐らく、また子供が消えるだろう夜――は、明日に迫っていたのだから。

「彼女も……同じ。息子を失ってしまった……のだと思うわ。ただし、彼女は奪われたそのことにこだわるあまり、他の母親からも息子を奪ってやろうと思っているの。ただ、それだと、戻ってきた子供は全員、死んでいなければならないはずなの。ところが、たったひとりだけとはいえ、子供は無事に生き延びている……もしかしたら、彼女は母親と息子の絆を試すつもりなのではないかしら？　外見がどれほど変わろうと、母親がきちんと自分の息子を見極められるものかどうか……」

だから、あの子は助かったのではないかしら。

そうつぶやきながらも、ラークラーニはどこか腑に落ちない様子だった。

「わからないのは……なぜ、戻ってくる子とそうでない子がいるか、なのよね。彼女たちのそばに『息子』がいるのなら、新しい子が消えるとは思えないんですもの……」

少年の言葉が正しければ、彼らは一足飛びに成長したわけではないことになる。

少なくとも、瘴気の支配するその空間の時間流は、こちらの世界のそれとはまったく違うわけだ。そのなかにあっては、彼らは普通に成長したはずだ。そしてもし、彼らがこちらに戻らないことを選んだのだとしたら、新たな子供が攫われるのはおかしい。

戻って来た子供と、戻って来なかった子供――この両者の間に、どんな意味が隠されているのか……まだ謎は深い。

「仕方ない」

いくら考えても仕方ないと、セイタマールは言い切った。
「明日になればわかることだ」
早い話が出たとこ勝負という、大胆な発言だったが、ラークラーニは笑ってうなずいた。
「そうね、明日になれば……もう、ひとりだって、あんな不幸は繰り返させない……」
決して——とつぶやく声は低く、けれど決意に満ちたものだった。
このとき彼女がなにを思い、心に決めていたのか——セイタマールは翌日になるまで知ることはなかった。

4

その夜——月は姿を隠し、星々は暗く厚い雲によって地上と切り離された。
月も星もない深い、深い闇のなか——雨城の街外れ、なにもない荒れ地であるはずの場所に、その屋敷は姿を現した。
いや、屋敷はあるのだ。ただ、いつもは結界によって、ひとの目から完璧に隠されているのだ、強大な瘴気を力に変えて……。
けれど、新月の夜だけは、違う。
月神の加護の消える、月に一度のその夜にのみ、結界は綻びを見せる。それともその夜を選び、内側から開かれるのか。
しかも今夜は星神の加護も暗雲によって消されている。
雨城の夜の闇は、噴き出した瘴気によって、別の闇色に染め替えられていた。
そんななか、通りに立つふたりの人影があった。
ひとりは自ら輝くような純白の髪の女性——そしてもうひとりは、焔色の髪の少年。

ラークラーニとセイタマールだった。
ずるり、ずるりと通りを移動してくるソレを目にし、セイタマールが眉宇をひそめた。
「なんだ、あれは……」
奇妙で醜悪な歪な……ひとの輪郭によく似た、だが決してひとではあり得ぬモノが、ゆっくりと近づいてくる。
長い、長い髪――引きずっているのは長衣の裾だ。女性……に見えないこともない。
だが、それはあくまで異形だった。
なぜなら、そのひとに似たモノには、ふたつの顔がついていたのだから。
「やはり……」
と、つぶやいたのはラークラーニだった。
「ラークラーニ？」
尋ねた彼に、白真珠の使徒は悲しげに息をついた。
「あれは死霊です。相反するふたつの感情に引き裂かれ、それでも育てた息子に対する執着に縛られて……」
彼女の脳裏に、瘴気に刻まれた、かつてひとであったその女性の記憶が流れこんでくる。
子供に恵まれなかった彼女とその夫は、施設から、当時三歳だった男児を引き取り、育てることになったのだ。金髪に、榛色の瞳の子供は、夫婦によく懐き、幸せな日々がつづいた。そ

う、ある日彼女の夫が突然の病で息を引き取るまでは。

それでも彼女は不幸にはならなかった。彼女には、息子が残されていたからだ。また、子供も彼女を慕い、彼女を気遣い、ふたりは貧しいながらも満ち足りた生活を送っていた。

けれど、子供が十五になったとき、彼の本当の両親を名乗るふたりが現れた。

返してほしい、と彼らは頼みこんできた。けれど、彼女にその気はなかった。いまさらどうして離れられるというのだろう、たったひとりの息子、たったひとりの家族だというのに！

それは子供も同じだと、彼女は信じて疑わなかった。

だからこそ、息子の裏切りにしか思えぬ選択が……彼女の生活の保護を条件に、両親の元へ戻ると言いだした息子が、許せなかった。実の親だというだけで、息子を奪おうとする女が、どうしても許せなかった。

最後の夜、そうして彼女は夕食に毒を盛り、無理心中をはかったのだ。

死した後、息子の亡骸と引き離されることも知らず。

そして、彼女は死霊となり、瘴気によって異形へと変化したのだ。

愛しい息子を取り戻すために。

自分から息子を奪った憎い女に復讐するために。

深すぎる愛情と憎悪ゆえに、彼女はふたつの顔を持つ。

それぞれに逆の願いを、口々に繰り返すそのために。

「あの子はどこ……？　あの子は……わたしの可愛い子……」
「許さない……あの女！　実の母親というだけで、あの子を奪ったあの女……！　血の絆こそが絶対だというのなら、見事我が子を見分けてみればいい！」
「ああ早く……早く逃げなさい、吾子。狂った鬼がやってきて、吾子を殺してしまう前に……さあ早く……早く……！」
「どれほど姿が変わろうと、見分けられるというのなら、さあ見分けてみせるがいい！　できなければ子供は死ぬよ……見分けきれぬ無情な母のせいで、お前の大事な息子は死ぬよ」
相反する感情に引き裂かれたふたつの顔の女性は……しかしどちらも正気を手放してしまっている点においては同じだった。
「可哀相なひと……」
ぽつりとつぶやくラークラーニの瞳に涙が浮かんだ。
「だが……」
言いかけるセイタマールに「わかっているわ」と答えて、彼女は異形と化した女性へと近づいた。
「わたしが、彼女を抱きしめる……だから、お願い」
振り向かずにそう告げた彼女の顔を、だからセイタマールは見ることができなかった。
「わかった」

ひとつうなずき、彼は愛剣を引き抜いた。
ずるり、ずるりと、異形の女が街へ……新たな子供を求めて入っていく。その体を……すでに肉体を失ってしまったはずの存在を瘴気ごと抱きしめて、ラークラーニははっきりと、叫んだ。
「いまよ、セイタマール！　お願い！」
その言葉に従うように、彼は駆け寄り、全身の力で剣を振り下ろした！
赤い雨が……降った。

「ラークラーニ！」
あり得ない……あってはならぬ事態に、セイタマールは呆然としていた。
目の前に倒れているのは、自分の初めての……いや、これからずっと組んでいくはずだった相棒の女性だった。
その彼女が、なぜ血を流しているのか……。
「なぜだ……なぜ!?　おれの剣は、生身を傷つけることはないはずだ……今までだって、一度だって……っ！　なのに、なぜラークラーニが……!?」

悲鳴をあげながら、彼は剣を放り出し、ラークラーニを助け起こそうとした。
「それとも神殿での教えは嘘だったのか!?　おれは……おれはひとを傷つけずに瘴気を浄化することはできないのか!?」
混乱し、叫びつづけるセイタマールの頬に、震える……細い指が触れた。
「嘘ではないわ……セイタマール。あなたは生身を傷つけることなく、瘴気を浄化できる稀有なる剣士……」
「嘘だ！　なら、どうしてあなたを……どうしてっ!?」
「あなたの剣が生身ごと葬り去るのは……恐ろしい喪月神に見こまれてしまった者だけ。わたし、気づいてたわ。だから……来たのよ。あなたが辛い思いするって、わかってたのに……ごめんなさい。でも、わたし、このままじゃ、絶対にあの子を殺してた……大切、な……わたし……の。ご、めんなさ……い。セイ……本当に……」
ごめんなさい——もう一度つぶやいて、ラークラーニは息絶えた。
瘴気の浄化された雨城の夜に、悲しい嗚咽が一晩中、響きわたった……。

エピローグ

彼の剣は喪月神の瘴気に侵された者以外の生身を傷つけることはなく、彼の剣はすべての瘴気を浄化する。

判定人にして処刑人――。

それが、神殿がセイタマールに期待した能力だった。

白真珠の使徒ラークラーニが、いつごろから喪月神に見こまれていたのかはわからない。ただ周囲が不審を覚えるより先に、彼女はセイタマールの相棒となることを選んだのだ。本人だけにしかわからない、だが深刻な兆しがあったのかもしれない。

なぜ、彼女が自殺にも等しい真似をしたのか――。

セイタマールがその理由を知ったのは、神殿に戻って後のことだった。

彼女には、二歳になる子供が……しかも、聖石を抱いて生まれてきた娘がいたのだ。
喪月神の瘴気は、強い力を持って生まれた聖石の子供を時に害そうとする。ラークラーニは、万が一にも、自分が娘を傷つけることのないよう……そのために、選択したのだ。
『ごめんなさい……』
何度も何度も謝って、死んでいったラークラーニ。
本当に、ひどい女だと、セイタマールは思った。
最初からそのつもりだったのなら、笑いかけたりしてほしくなかった。親しくなど、なるのではなかった。やさしい笑顔を見せて……あんなひどい裏切りはない。
いくら謝られたところで、到底許せるものではなかった。
心にざっくり走った傷が、癒える日が来るとも思えなかった。
この先何人相棒を持とうと、決して忘れることはできないと思った。
セイタマールの心は、こうして氷に閉ざされたのだ。
それを溶かす少女と出会うまで、彼はあと数年を待たねばならなかった……。

あとがき

まず、最初に懺悔します。
何回も同じことを書くことになりましたが、今回はまさにっ！
本当にっ！　ぎりっぎりの間一髪でしたっ！
というわけで、懺悔します。
今回、この本――聖石の使徒第三巻『其は天秤をかざす者』が、無事発売日に店頭に並んでいたら、それは間違いなく、私以外のすべての関係者の方々の努力とご尽力のおかげにほかなりません。
さらに懺悔第二段として、久々に枚数見積もりを大誤読いたしました。
おかげで、今回『其は天秤……』は、決着がついておりません。
次巻につづいてしまいます……つづきはなるべく早く、とは思っておりますので、どうかもうしばらくお待ちいただければ幸いです。

実は、ほんの数時間前に脱稿し、このあとがきを書いております。

本当は、脱稿の勢いのまま、あとがきになだれこもうとしたのですが……ちょっと、自分でも文面読み返して「これはどうか……」というぐらい、自己嫌悪に満ち満ちた文面になってしまったものですから、ちょっとインターバルを置くことにしました。全面的に自分に非があるのは事実とはいえ、読んで鬱陶しくなるような文章、書き連ねても、ねえ……？

というわけで、『其は天秤……』の制作秘話、いきますっ！

今回の目的は、なによりまず、ひよっこたちの『師匠離れ』でした。

なにしろ、主役級キャラ三人のひよっこたちには、クセが強すぎるぐらいに強い師匠たちがくっついてたんですよねえ。

おかげで、主役と誤解されることも度々ありました。

それもこれも、主人公たち、三人とも未熟者揃いだったから、なんですが。

今回で、そろそろ世界も大きく変化し、情勢だとか事態だとかが、台風のごとく襲ってくる……ということで、『そろそろ自力でがんばろうね♡』的展開にしてみたというわけです。

なんで師匠コンビ×2の出番が早々になくなったのか……というと、あの二組のコンビはそれぞれ番外編というか、外伝というか、そういう形で山ほどネタを抱えているせいもあります

し、もうひとつは彼らがコンビで動いたとき、一番いい味出す特性を持ってたりするせいです。

主役トリオの醸しだす雰囲気とはまた全然違う、師匠コンビ×2の空気ってのも、実は私個人としては気に入ってたりして、彼らの単独の番外編（外伝？）とかも、読みたいという声をいただけたら是非書きたいと思ってたりします。あ、でも書きたくなったら発作的に書いてしまうかもしれないけど。

ただ、これから、ヒロインのぽややん感覚とは裏腹に、あちらこちらが忙しく変化していく予定です……ので。

どうぞ、ご期待ください。

次巻、大立ち回りの予定有り、です。

いや、さすがにヒロインに鉈とか斧とか振り回させることはないだろうけど……とは、思うが……ううーむ。

さて、そろそろ結びとまいりましょう。

川野さま。

……本当に、申し訳ありませんでした。

山本鳥尾さま。

……こちらからお願いしましたのに、毎回毎回、とんでもないスケジュールになってしまっ

て……、申し訳ありません。にもかかわらず、いつも美麗なイラストを、ありがとうございます。

最後に、読んでくださる方々——。

これが発売される頃には、ずいぶん寒くなっていることと思います。風邪（特にインフルエンザ）などひかぬよう、気をつけてください。因みに私は今年は予防ワクチン打つつもりです。

それでは——。

平成十三年　某月某日

前田　珠子

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101―8050　東京都千代田区一ツ橋2―5―10

集英社コバルト編集部　気付

前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
其は天秤をかざす者

COBALT-SERIES

2002年1月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2002　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600052-0 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

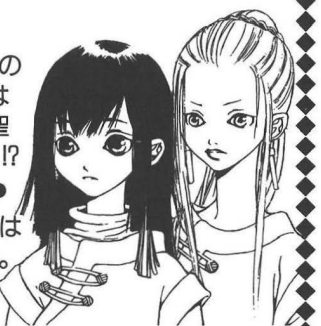
前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

神々に選ばれし「聖石の使徒」。少女・アークは使徒となる力を持つ「聖石の子供」だったが…!?



落ちこぼれのアークには絶大な力が眠っている。だが、彼女はそれを制御できなくて…。

聖石の使徒

其は力を放つ者

〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供しますー。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子

〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／夏門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

9784086000529

ISBN4-08-600052-0

C0193 ¥419E

1920193004199

定価 本体419円＋税



コバルト文庫